
桜文論叢

第112巻 2025年3月

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目 次

論 説

ラブレール研究の展望とその人文主義の意義 石橋 正孝 1

La compréhension du français par le prisme de l'anglais
chez les Japonais Camille Lepeltier 25

研究ノート

保健室登校の高校生の時間的展望の特徴
—— 心理的時間と精神的健康 —— 和田 万紀 45

宋代軍事史研究と「東部ユーラシア」 伊藤 一馬 67

論 説

歴史から芸術、そして存在へ
—— ハイデガー『存在と時間』から『芸術作品の根源』へ —— 岡山 敬二 126

ラブレール研究の展望とその人文主義の意義

石 橋 正 孝

序論

2019年4月15日、パリの観光名所であるノートルダム大聖堂で火災が起き、世界中でニュースとなったことは記憶に新しいが、その再建工事の過程で二つの棺が発見され、その身元調査の結果が2024年9月17日に発表された。二つの棺のうちの一つは、16世紀のフランス・プレイアッド派の代表的詩人の一人であるジョアキム・デュ・ベレーのものであることが確認された¹。棺の中の遺体がデュ・ベレー本人であると結論づける決め手の一つとして、長期間の騎乗が骨格にもたらす変形も確認された。

16世紀文学の研究は、16世紀学者 (seizièmiste) という呼称を持つことで、歴史研究・文学研究の区分が明確ではないことを示しているが、デュ・ベレーの棺と遺体の発見が示すように、考古学的・人類学的な発見が文学史に寄与する余地が未だ残されている領域でもある。

一方で、他の隣接領域との上記のような連携を除いた「文学研究」についていえば、フランスでは120年を超える歴史を持つようになり、16世紀の「書かれたもの」を扱う歴史・文学を対象とする研究は飽和状態を迎えた領域も出てきたように思われる²。

この現在のフランス文学、ひいてはフランスの近代学問成立の背景には、フンボルト理念³がある。19世紀初頭のナポレオンのヨーロッパ制圧に対して、

啓蒙の世紀の成果としての科学でフランスに敗北したと認識したドイツでは、科学の立て直しが求められ、フンボルト理念に基づいて1807年にベルリン大学が設立される。ついで因果応報のように、1871年の普仏戦争敗北によって科学的後進性を認めたフランスは、ドイツに習った大学制度の抜本的改革に着手し、第三共和政の19世紀末に各学区に一大学の現在に至る制度的大枠が作られた。

こうして、現在のフランス文学研究の歴史が始まるわけだが、それは近代大学制度の整備と同時に創られた人文諸科学の一つとしての文学であり、作品としての文学と区別しなければならない。フランスで近代の大学制度が整うのは、19世紀末であり、現在大学で「文学」として成立している学問もこの時に誕生しており、学問としては新しいのだ⁴。

神学部を中心とするパリ大学が1215年創設以来8世紀の歴史を持つことを考えると、学問としては日が浅い。この事実は、文学研究者が自ら信じるその存立基盤の普遍性に対する試練である。『イリアス』、『オデュッセイア』を西洋文学の始まりとすれば、「作品としての文学」のおよそ2700年⁵の歴史に対して、それらを「研究する学問としての文学」があたかも同等の普遍性を獲得しているという錯覚に甘んじていてはならないのだ。それは、個々の研究に対しての戒めではなく、より根源的なところで、近代学問としての文学が、帝国主義的イデオロギーに端を発する近代の一過性の現象に過ぎないのではないか、その役割も終焉を迎えているのではないかという危機意識である。

本稿においては、こうした近代人文科学の一領域としての文学の飽和・閉塞状況の中で、16世紀のフランスを代表するフランソワ・ラブレーについて120年の研究を簡単に振り返り、その作品の意義について改めて考え、とりわけその人文主義に焦点を当てて文学研究としての今後に向けての方向性を探っていく。

ラブレー研究の現状

ラブレー研究は、1903年の *Etudes Rabelaisiennes* の刊行から現在まで⁶、120年の歴史を有している。ラブレー研究誌の発刊が、すでに述べた近代の職

業的文学研究の出発と同時であったことが、ラブレールのフランス文学史上に占める重要性を示しているといえよう。

一方で、ラブレール研究の現状は徐々に閉塞的な状況を迎えている。120年に渡って多くの職業研究者によって知見が積み重ねられてきたので、新しい知見を付け加えていくのはいよいよ困難になってきたのである。また、裏を返せば、新たな研究者志望が作家ラブレールを研究しようとする、この120年分の知見をまず身につけてからでなければ学問的なスタート地点に立つことが難しいという、きわめて敷居の高い研究対象となってしまうことを意味する。

この現状に至るまでの研究の歴史をここで簡単に概観する。まず、*Etudes rabelaisiennes* の創刊の当初は、実証研究とあわせて校訂版の作成が真っ先に取り組まれた事業であり、A. ルフランらが1913年から1931年にかけてその後のラブレール研究の土台を築いた⁷。第二次大戦前後には構造主義の流行がルネサンス研究にも波及してくる。ロシア・フォルマリズムの流れを汲む M. バフチン⁸の著作がフランス語に翻訳されると、作品中の民衆文化の役割を重視する構造主義的なアプローチが盛んとなり、同時に M. スクリーチに代表される⁹人文主義研究の陣営もフランスにおけるラブレール研究の正統派として着実に成果を重ねてきた。

実際、1990年くらいまでは、バフチン派か、スクリーチ派かの二択のような状況になっていたが、同時に、文学の世界における構造主義の流行は、ラブレールの作品において民衆文化の社会的力学を読み取るのみならず記号論的アプローチをとる研究も多く見られるようになってきた¹⁰。しかしながら、1980～90年の時点ですでに研究の蓄積は膨大なものとなり、新たな研究者が研究対象とすることを忌避する傾向が出始めた。

その傾向を裏付けるように、それまでは傍流として放置された状態にあったラブレール以外の同時代の散文作品への研究が、一つの大きな波となる。70年代には、ラブレール以外の同時代の散文物語に関しては「その他」扱いであった¹¹が、ラフンソワ I 世の姉であるマルグリット・ドゥ・ナヴァールに関しては、すでに研究は進んでいたが、ボナヴァンチュール・デ・ペリエ、ニコラ・

ドゥ・トロワ、エリゼンヌ・ドゥ・クレヌなどが90年代に入って注目を浴びるようになり¹²、16世紀前半という印刷術の普及が進んだ時代の、物語の在り方についての研究¹³が進んだ。

こうして研究対象がラブレーから外れて「傍流」への研究に研究者の意識が向かうようになるのと同時期に、20世紀前半の校訂版以来のラブレー研究の集大成ともなる M. ユションの校訂版が1994年に出版される¹⁴が、この辺りからいよいよラブレー研究は転換点を迎えるようになってくる。研究書の出版が減り、代わりに大衆向け入門書、バカロレアの試験対策書、現代語訳などが目立って増えてくるようになる。

フランスでは、M. ユションが2011年にラブレーの概説書¹⁵を出版し、時期を同じくして日本では2009年に、イギリスで2010年、アメリカでは2011年にそれぞれラブレーに関する基本書が刊行された。アメリカのもの¹⁶は、教師が共有するためのラブレー指南書であり、イギリスのもの¹⁷はより読者層を広げてラブレーの概説書となっている。いずれも、両者がその主旨を明確にしているように、ラブレーに関する新しい発見を意欲的に探るというものではない。教員間でのラブレーの価値の情報共有、または一般向けの読み物としてラブレーを親しみやすくするためのものである。また上述の *Études rabelaisiennes* の最新号も、イギリス人によるラブレーの作品の初版から17世紀初頭までの版の整理と補足であり、今からラブレー研究に着手するフランス人の研究者も見当たらず、いよいよラブレー研究に関しては一段落という流れになっている¹⁸。

破壊者ラブレー

ここで、『ガルガンチュア』第11章の「ガルガンチュアの幼年時代」の冒頭を引用し、ラブレーの破壊者としての要素を紹介する。

「ガルガンチュワが三歳から五歳になるまでは、父親の命令通りに、あらゆる適切なしつけによって育てられ、国の幼い子供たちと同じように過ごすことになった。つまり、飲んだり、食べたり、眠ったり、食べたり、眠ったり、飲んだり、眠ったり、飲んだり、食べたりしていたのである。毎日のように泥水の中を転げまわった

り、鼻面を真っ黒にしたり、顔を汚したり、靴の踵を潰したり、蠅を相手にあくびを連発したり、喜んで蝶を追いかけたりしていたが、ところで蝶と言えば、父君グラングウジェは蝶々国を支配していたのである。ガルガンチュワは、自分の靴におしっこをひっかけたり、肌着のなかへうんこをしたり、袖で鼻をかんだり、スーブのなかへ洩を垂らしたり、ところかまわずに泥んこになって転げまわったり、上靴で酒を飲んでみたり、いつも籠の胴腹へ体を擦り付けたりしていた¹⁹。」

この引用は、ガルガンチュワが幼年時代をいかに過ごしたかを展開していくものである。文学的評価としては中世騎士道物語のパロディーとして理解されている。騎士道物語における主人公の成長過程・幼年時代の描写を、巨人の破天荒なそれに置き換えた笑いとしての評価だが、このガルガンチュワの幼年時代から読み取れるのはそれだけではない。

中世騎士道物語のパロディーとしての幼年期であれば、騎士の比類なき才能の片鱗を示すエピソードの代わりに「飲んだり、食べたり、寝たりして過ごした」といって完結するはずが、そこで終わらず、記号の自己増殖が始まる。この引用部分の3倍以上に及ぶ描写が読者を圧倒する勢いで洪水のように続いていく。この三つの語順を入れ替えるところから始まり、延々と続く描写の洪水は、要約という合理性を拒絶する記号の物質性・物量そのものによって物語のレトリックの破壊と記号の自己増殖という、フランス文学史上唯一ともいうべきラブレールの筆致の特徴となっている。この記号の自己増殖はラブレールの作品のいたるところで見られるが、近代フランス語の生成期において、世界の事物のすべてを言語化しようとするかのごとき試みは、本稿の後半で言及するラブレールの「フランス語の創造者」としての意義となっている。

しかし、この記号の列举のなかでより重要な点として、とりわけ身体描写の延々と続く羅列から読み手が体験することは、レトリック・理性から記号を解放して、記号そのものの直接的かつ原始的な体験であり、その原始性の中で共有される人間の物質・肉性である²⁰。ガルガンチュワのこの引用に描かれているのは、物質・肉としての生命の、原始的な生きる喜びそのものであり、理性

的な拘束からの解放なのだ。

そしてこれは M. バフチンが指摘するグロテスク・リアリズム²¹そのものである。すなわち、人の理性的なものが、人の「物質としての肉性」から離れていくほどに、人間の本質から離れたものとなっていくのであり、肉としての人のグロテスク・リアリズムには、その形骸化した理性を破壊し、人間性の原点に還元することで、新たな理性を生み出す契機とするのである。

中世までの理性を代表するキリスト教という制度は、中世にわたる長期支配により疲弊・形骸化した結果、その生みの大地であるはずの民衆文化を制度として抑圧して久しい時代であった。キリスト教も本来は民衆の苦しい現世からの救済願望を満たし、現実と死への恐怖に対する癒しを与えるものであったが、その教えが権威となり形骸化すると、本来の意義を失い制度存続自体が目的となり、教義に内包される現世否定の志向は、民衆の生きる喜びを抑圧するものとなってしまった。

すると、こうした文化制度を生み出す土壌としての役割を持つ民衆文化は、それを土に還す機能を発動させることになる。役目を終えて形骸化・硬直化した制度を再びその土壌に還元するために、権威的制度が人間性から逸脱した理性的な部分、すなわち物質性・肉性の否定に対して、糞尿も含めた人間の肉性・物質性をぶつけることで、権威の貶め、奪冠を行う。それがカーニヴァルの原点であり、民衆文化の発揚の場であり、ラブレーがその文学的象徴とされているグロテスク・リアリズムである。ラブレーの作品においては、そのグロテスク・リアリズムが高らかな巨人の笑いに昇華されることで、人間性を抑圧する制度・秩序が破壊され、人間性の明るい解放が実現するのである。

本論

このように、ラブレーの文学的特徴としての記号増殖とグロテスク・リアリズムには、合理的理性へのアンチ・テーゼという共通項で、既成秩序への破壊者の要素を色濃く見て取ることができる。同時に、すでにラブレー研究の概観

で見たように、ラブレールに与えられる一番多い形容詞は、人文主義である。世間一般にラブレールの名前が知れわたっているのは、巨人、大食漢、スカトロジー、グルメというイメージであり、研究者とは受け取られる部分が異なる。

人文主義者としてのラブレールというのは、上記の肉体言語の自己増殖による秩序破壊という要素とは相反するものに見受けられるが、実は、この人文主義も「破壊者」の役割を担った歴史的イデオロギーである。本稿では、ラブレールの作品の属性として最も重要な要素ともいえるこの人文主義に焦点を当てる。その成立から発展の経緯を当時の政治・社会・宗教の激動の中でラブレールの時代背景に組み込んで考察し、今後のラブレール研究の可能性について考察する。

フランス人文主義の成立

イタリア人文主義

人文主義の発祥は、フランスではなくイタリアである。すでにその事実が人文主義の本質に強くかかわってくる。ユマニストの始祖²²と言われるペトラルカが生きた13世紀は、次のクワトロチェントと呼ばれるイタリア・ルネサンスを準備した時代である。アヴィニョン捕囚に続く教会大分裂でローマ教会の権威が失墜し、教会権力と各国の王権との覇権争いが徐々に王権に優位に動き、西ヨーロッパにおいて後の中央集権国家の原型となる封建国家が形を整えつつある時代であった。

しかしながらその西ヨーロッパの近代を形づくる大きな動きが数世紀にわたって緩やかに進行していく中で、イタリアだけは都市国家群に分裂したまま、国家としての政治的同一性はその展望すら見えない状況であった。こうしたイタリアの政治的・宗教的凋落を嘆いた愛国者として、過去の栄光を取り戻すことを夢見たペトラルカが、古代ローマの文献に傾倒していったのは自然であった。アヴィニョン捕囚によって教皇クレメンス5世がローマからフランス・アヴィニョンに移ると、ペトラルカも教皇酢に従って南仏を拠点とした。古代ローマの栄光に傾倒したペトラルカにとって、ポン・デュ・ガールやニームのアリーナなど、南仏の随所に見られる古代ローマの雄大な遺跡群に囲まれて過

ごしたことは、反ガリア（＝反フランス）の感情が育まれたとしても、それは必然であったといえるかもしれない²³。

近代ヨーロッパのアイデンティティ・近代フランスの成立

一方のフランスでは、人文主義の動きはイタリアのそれとは大きく異なる。そもそもイタリアのクワトロチェントに対してフランス・ルネサンス自体が1世紀遅れた動きであった。ここで、ラブレーの人文主義の置かれた状況を理解するために、フランス・ルネサンスについて概観していく。それは国内平和と中央集権国家の成立、対外戦争の時代である。

一般的には、フランソワ I 世の治世からその息子アンリ 2 世の治世までの、1515年から1549年までを指すことが受け入れられているが、人文主義の運動をルネサンスの契機とするならば、1470年代をフランス・ルネサンスの始点とする考え方もある²⁴。いずれも、その終点としては、国内で宗教戦争が本格化し、社会全体が暗い空気に包まれた1560年代には文芸復興運動としてのルネサンスは終わりを迎えたと考える点では一致している。

この二つの始点の解釈が分かれることも含め、この時代を準備したルネサンス以前の動きについての理解がなければ、政治・経済・文化・思想のすべてが入り組んで一斉に地殻変動を起こす時代と、ラブレーを含めてその時代の文学作品を正確に理解することはできない。

中世の西ヨーロッパは、十字軍運動に見られるように、西ローマ帝国から受け継ぐキリスト教に基づく同一性を「ヨーロッパというアイデンティティ²⁵」としていた。そもそも、同一性の意識は、対外的な危機意識、対抗意識から生まれるものであり、外圧が契機となって促進されるが、中世においては北アフリカと西アジアの東西からヨーロッパを挟むイスラム教の圧力がその生成を促進し、15世紀半ばにおいては、東はオスマン・トルコ、西はナスル朝に対抗する形で、イスラム教という異文明に対抗する地理的・宗教的基盤が同一性を保証していた。

しかしながら、そのキリスト教アイデンティティは、14世紀にペトラルカが

目の当たりにしたアヴィニョン捕囚以来大きく揺らいでいたが、レコンキスタと新大陸発見を契機として変容していくことになる。そのいずれもの主役であるスペインは、1479年のカスティーリャとアラゴンの合併後、わずか13年でイスラム勢力をイベリア半島から駆逐し、同1492年にコロンブスを援助し新大陸を発見するなど、キリスト教的同一性の地理的要因としての東西からのイスラムの脅威という図式を崩壊させ、一気に世界の覇権への道を歩み始める。ここで、16世紀初期におけるスペインのヨーロッパにおける軍事的優位性の原因として挙げられるのが、イベリア半島でウマイヤ朝・ナスル朝という異なる戦略・戦術を持つイスラム文明との長い闘いの過程で、敵への対応で変容・進化した軍事戦術の近代化であり、常に新しい戦術ユニットとその運用を積極的に受け入れる土壌ができていた点である。

一方のフランスは、イギリスとの100年戦争を通じて初めてフランスというアイデンティティが芽生えてきたが、当時まだ国家として統一されたものではなく、対イギリスでのフランスという、外圧に対するものとして騎士軍団という戦術ユニットの誇りがアイデンティティの中核をなしていた。しかしこの100年戦争が1453年に終結すると²⁶、戦争で疲弊した封建領主の弱体化に乗じて、フランス王権は40年をかけて徐々に国家の統一を進めていく。それまでは、パリを中心とした封建領主の一人として、フランス全土への実権を持たなかったヴァロワ朝は、ルイ11世がオルレアンやブルゴーニュなど抵抗する封建領主を着々と制定し、1488年にブルゴーニュを制圧して国内統一を事実上完成させる。次いで1491年にシャルル8世は最後に残った封土であるブルターニュのアンヌと結婚することでブルターニュを併合し、ここにフランス国家が完成する。

しかしながら、すでに見たように、フランスがようやく国内統一を果たした時には、すでにスペインが一足早くレコンキスタを完成する過程で軍事革命を成し遂げ、さらに新大陸を発見し、世界制覇への足掛かりを築いていた。

イタリア戦争

それを隣国として目の当たりにしていたフランスは、国内の安定を確保する

とその2年後の1494年にはイタリアに侵攻するほどに、スペインに対する自国の出遅れに焦っていたのである。無論、イタリアへの侵攻は隣国スペイン伸張への焦りだけの軽率なものではない。1492年から現代に至るまで続くフランスの一貫した戦略は、地政学的な核心的利益として第一の都市パリ、第二の都市リヨンの防衛である。そのために、この二都市からいかに国境を遠ざけるかが対外戦略の基本²⁷となっており、その戦略上の要衝リヨンからの国境線拡張がイタリア戦争の根本的な動機であった。

こうした地政学的要因を理由として、表向きは王位継承権を理由にシャルル8世がイタリア北部に侵入することになる。そこでフランス軍がローマ教皇とスイス傭兵部隊との戦いで同時に対峙することになるのは、イタリア都市国家の背後にいるスペインであった。とりわけ1516年になると、前年の1515年に王位に就いたフランソワ1世の宿敵として16世紀前半の西ヨーロッパの政治地図を描くことになるカールI世がスペイン王となり、続けて3年後の1519年には神聖ローマ帝国皇帝の位も継承して一気にフランスを東西から挟む形となり、フランスにとっては大きな脅威となる。

スペインのレコンキスタと新大陸発見が、ヨーロッパのアイデンティティの根源であるキリスト教的同一性を揺るがす契機となったことはすでに指摘したが、このキリスト教的同一性自体が、スペイン・神聖ローマ帝国の脅威を前にしたフランソワ1世の政治決断によって決定的に崩壊することになる。軍事的に進んでいた神聖ローマ帝国に1525年にパヴィアで壊滅的な敗北を喫したフランス軍は、10年後の1535年にオスマン帝国と同盟を結ぶのである。1453年にヨーロッパキリスト教共同体の片割れである東ローマ帝国を滅ぼした宿敵であるオスマン・トルコとの同盟は、イスラムという異教徒に対して、キリスト教共同体がヨーロッパのアイデンティティとして機能しなくなったことを意味する。急速に進行していた宗教改革という名の第三次教会大分裂²⁸と相俟って、キリスト教がヨーロッパの同一性を担保することにもはやなくなり、以降は敵の優れた戦術を取り入れる戦略・戦術の進化の過程が、16世紀以降戦乱の絶えなかったヨーロッパにおいて継続的に進行し、ヨーロッパというアイデン

ティティを保証する軍事的同一性²⁹ (=isomorphisme militaire) を構成していくことになる。

フランスの人文主義が破壊したもの

こうして、西ヨーロッパにおけるアイデンティティは、キリスト教という基盤を失いながらも、軍事的同一性に基づくアイデンティティを急速に構築していった。それと同時に、フランスの中央集権化が進み、フランス国家としてのアイデンティティも同時に生まれてきたのが、16世紀の前半である。この複雑に入り組んだ力学の中で醸成されてきたフランスというアイデンティティの出発点にいたのがラブレールであり、ラブレールの人文主義である。このアイデンティティの複雑さは、宗教がもはや絶対的に依拠できるものではない時代のものであり、すでに見た14世紀イタリア発祥の人文主義の16世紀における変容・進化を理解するのに不可欠な背景である。

ここで少し時代を遡って、先に述べたフランス・ルネサンスの開始時期の二つ目の考え方に基づいて1470年代に目を向けると、14世紀のペトラルカたちが始めた古代ローマの文献復興の動きは、15世紀には文化的な大きな潮流となり、とりわけ世紀中葉の印刷術の発明³⁰が拍車をかけ、1470年代にパリに導入されることで、知的運動が個人のネットワークを超えて、社会・国を超えた大規模な広まりを見せる契機となった。こうして人文主義が大きな知的ムーヴメントとなる中で、1486年に、イタリアのユマニスト、ピコ・デラ・ミランドーラによる、「人間の尊厳について」が書かれる。このマニフェストは1504年の死語出版によって、イタリア戦争を契機としてフランスにも流入して一気に広まり、肉体としての人間をありのままに肯定することで、現実否定のキリスト教に対する思想的な一つの転換点となったものである。

« 人間以外のすべての生き物は、我々によってその本性を決められており、我々が決めた制約から超えて存在することはない。人間たるお前だけが唯一、あらゆる制約を超えて、この私がお前に返してやった自由意思に従って自らの本性を決めることができるのだ。私はお前をこの世界の中心に据えてやった。それはお前を囲むこ

の世のすべての物事をより見やすくしてやるためだ。私はお前を天上人にも地上人にもしなかったし、不老不死にも死すべき定めにもしなかった。だから、自らの欲するところと名誉に従い、自分自身を刻む彫刻家、芸術家として、好きなように自分を作れ³¹。

ピコ・デラ・ミランドーラは、この論文において、人間の自由意思こそ、神からゆだねられた、人間の尊さの源泉であると主張する。ラブレーがトマス・モアの『ユートピア』に倣って作ったテレームの僧院も、その唯一の規則は「欲することをなせ³²」とあるように、ルネサンスという文芸復興・近代の幕開けに、この人間の尊厳を高らかに謳った宣言はユマニストたちにとって大きな希望となり、中世キリスト教によるイデオロギー支配に対する「解放者」としての強い使命感と意思の根源となった。何故なら、この自由意思を拠り所とすることによって、福音書の神の言葉に対して個人の自由解釈を正当化し、聖書に対する教会の解釈以外を許さないカトリックの教義への反旗を翻す根拠とできるからである。

こうして古代ローマへの郷愁から出発したイタリア人文主義は、フランスにおいては人間の自由意思を中世のキリスト教支配からの解放の契機とする動きへと進化していくことになった。公会議という教会制度による聖書の解釈のみが許され、逆に個人の解釈の「自由意思」が否定された中世の解釈主義キリスト教に対して、ユマニストの代表格であるエラスムスの1516年のギリシア語訳、1523年のルフェーブル・デターブルのフランス語訳が出版され、教会権威の解釈を通さずに聖書、すなわち神の言葉を個人が自由に解釈できるようになったのである。「印刷術を「後見人」とする³³」人文主義が、カトリックによる共同体・民衆支配を終わらせる武器として、カトリックの存立基盤たる聖書そのものを印刷術という武器によって最大限に活用したのだ。

この進化したユマニスムは、当然カトリックとの対立を生み出す。フランスでユマニスム = humanisme の言葉が認められるのは実は17世紀になってからで、最初に用いられていたのはユマニスト = 人文主義者の語のみであったが、

この言葉の使い方は、否定的なものであった。1526年にはソルボンヌ神学部長として、ルネサンスの反動権力代表の筆頭に挙げられるノエル・ベダ（Noël Bédard）が上記のルフェーブル・デタープルやエラスムスとその一派をユマニストと呼んでおり³⁴、そこには、反キリスト、無神論者に対するカトリックからの非難³⁵の意味が込められていた。

人文主義の果たした役割は、古代文明の栄光の復興ではなく、人間のカトリックからの解放の戦いであった。さらに一步踏み込んでいえば、西ヨーロッパを支配した中世キリスト教秩序の破壊であった。ガルガンチュアがパンタグリユエルに宛てた手紙の中でラブレールが語った時代の空気は、この人文主義者たちの希望と明るさを表している。

「だがおまえも話に聞いてよく知っているだろうが、時代はまだ、現在のように人文学には適しても便利でもなく、わたしは、おまえのように多くの家庭教師を持っていなかった。時代はいまだ暗く、ゴート族の不幸な災厄が感じ取れた。やつらがすべての良き文芸を破壊してしまったからだ。しかし神の慈悲によって、今の我が世に光と尊厳が文芸に再び戻ってきた。その改善の程度は、この私が今の小学生のクラスに入ることも難しいくらいになってきたほどだ。これでも私は、かつては誇張なく最も優れた学者と言われていたというのに³⁶。」

ゴート族により蹂躪されたものはなんであったか。ここで言及されているのはキリスト教ではなく、古代ギリシア・ローマの自由学芸であり、それらを復興させることで人間をキリスト教の軛から解放して新たに「優れた学者」たちを生み出す基盤をつくるのがここで述べられている。それはJ. ミシュレがルネサンスという名前をこの時代につけた価値観である。中世を暗黒時代と捉え³⁷、16世紀前半を明るい解放と文芸の時代というイメージをつくったミシュレの歴史観は、このラブレールの人文主義の歴史観を反映している。

アイデンティティとしてのフランス語

この人文主義の進化形が、中世から近代への転換という急速な変容の時代に

果たした役割が人間のキリスト教からの解放の他にもう一つある。フランス語の顕揚である。西ヨーロッパがキリスト教以外の新たなアイデンティティを必要とし、中央集権国家が誕生していく中でそれぞれの国家もアイデンティティを必要とするようになった時代に、この人文主義の進化形が言語面でのフランスのアイデンティティ³⁸を培う役割を担っていく。

すでに見てきたように、北イタリアに侵攻したフランスは、イタリアの成熟したルネサンス文化に触れて、一気にその影響がフランスとその王宮に流入する。16世紀初頭のフランスと言え、日本でいうところの戦国時代の戦いに明け暮れた時代からようやく天下統一を成し遂げたばかりのところで、王侯貴族とはいえ戦士としての粗暴さが生活様式に染みついてところに、優雅なイタリア文化の影響は絶大であった³⁹。16世紀前半のフランスの政治・軍事・社会・文化、すべての領域でその後の近代フランスの原型に欠かせない要素を植え付けることになる。

このイタリアに対する当時のフランスのライバル意識・焦り・劣等感などは、負の出発点ではありながら、統一国家としてのフランスのアイデンティティの形成を促す要因の大きな一つとなっていることも否定できない。このイタリア文化、その源流にある古代ローマへの劣等感から、ラブレーを含めたフランスの人文主義者たちがフランスのアイデンティティ確立を言語に求めた。

それまで、西ヨーロッパの公用語としてラテン語が言語面でのアイデンティティを担保していたが、ローマ・カトリックの権威の失墜と中央集権国家の成立は、各国のアイデンティティの基盤として自国言語の整理を急いだ。100年戦争の時代（1339～1453）まで、オック語とオイユ語⁴⁰の二つで南北に分かれていたフランス⁴¹は、1491年のブルターニュの併合と統一国家の誕生の過程で、急速に言語の統一が進んでいたが、1539年のヴィレル・コトレ勅令で行政文書・公文書をラテン語に代わりフランス語で書くことが決定された⁴²。ラブレーが「ガルガンチュア（1534年）」、「パンタグリュエル（1532年）」を書いた直後である。

この辺りから、現代のフランス語に通じるフランス語が急速に生まれる時代⁴³

である。またその成立条件としての統一国家が確立され、新しい統一国家の新しい統一言語としてのフランス語がマグマのように湧き上がってきた時代であった。その時代に『ガルガンチュア』と『パンタグリュエル』を書いたラブレールは、語彙、表記、文法の面で新しい試みを採用し、フランス語の発展に大きく貢献している。ローマ数字の代わりにアラビア数字を文書（作品）中で用いたのもラブレールが最初であり、作品中に記号の自己増殖のように、洪水のようにあふれ出す様々なジャンルの語彙の列挙は、それがいまだフランス語になっていない時代にギリシア語学のフランスにおける第一人者としてのラブレールが積極的にギリシア語から移植したもので現在に至るものも多い⁴⁴。

ヴィレル・コトレの勅令の10年後の1549年には、ジョアキム・デュ・ベレー⁴⁵の『フランス語の擁護と顕揚⁴⁶』が出版されることになる。プレイアード派の宣言として、ラテン語と同じレベルに格調高い詩をフランス語で書くことを宣言しているこの本文自体がイタリアのラテン詩の剽窃であることが、フランスのイタリアに対する文化的劣等感の深さを物語ってはいるが、デュ・ベレー兄弟と近かったラブレールが、その息子の著作につながるフランス語顕揚運動に意識的であったことは必然であり、作品中のあらゆる言語的実験もその流れで読みとるべきである。

加えて、V.-L. ソーニエが指摘するように⁴⁷、16世紀の後半にはフランス語のラテン語化に対抗するためにギリシア語が美化され、イタリア宮廷文化の影響をイタリアかぶれと蔑む動きがでてくるように、フランス語を古典ギリシア・ローマの言葉のレベルにまで高めることをラブレールたちはみずからの使命と感じていたのであろう。

しかしながらこのフランス・ユマニスト運動の帰結は、次の17世紀には失敗が明らかになる。L.-F. セリーヌが指摘するように⁴⁸、ラブレールがけん引した豊かな語彙のフランス語生成の動きは、古代ローマのセネカの弁論術をモデルとした簡潔で論理明快なフランス語を目指す世紀後半のJ. アミヨらが主導する動きの中に収斂していき、次の17世紀の明晰・簡潔を美とする古典主義文学の中に葬られていく。

古代ローマを範とし、反フランスの動機を持つ元祖イタリアの人文主義に対して、ラブレーらフランスのユマニスト達がギリシア古典に比重を置いたのは偶然ではないが、同じ古典文明の中でもよりフランスに直接の流れをもつ古代ローマのラテン語文化の影響には抗えず、イタリア戦争を契機とするイタリア・クワトロチェントの流入の影響はあまりに大きかったのである。

結論

P. ジュルダが A. ルフランに倣って指摘するルネサンスの特徴としての、「人類の知性の脱宗教化、及びキリスト教的理想の減退を前提とする人間の解放⁴⁹」は、まさにユマニストたちによって思想的に準備されたといえるのであり、ラブレーはフランスにおけるその第一人者であった。

本稿前半で見たように、ラブレーの作品の属性であり研究の主要なテーマともなっているグロテスク・リアリズム、記号的実験は、新しい創造を前提とする既成秩序の破壊という文化的役割を担っていた。この役割は、現代においても読者に対してその機能を失っていないが故に、ラブレーの作品が現代まで読み継がれている所以となっているともいえる。

ラブレーの人文主義も、「人間の解放」という大義名分の下でのキリスト教秩序の破壊という役割を担っていた。総じて、ラブレーの文学は、破壊をその本質としているとっていいだろう。ただし人文主義に関しては、その歴史的経緯を見ると、当時の複雑な利害関係の対立の中で迷走・孤立の道を歩むことになった。キリスト教は分断がいよいよ深刻化し、西ヨーロッパの新たなアイデンティティも戦乱の世紀において必然的に軍事的同一性が担保するようになる中で、ラブレーの人文主義はカトリックとプロテスタントの対立だけではなく、カトリックの中の王権派、ソルボンヌ神学部、教皇派の対立が生まれる混沌状態の中で、その役割を見出すことが難しくなっていったのである。

本来であれば人文主義者はプロテスタントとの連合が必然に思えるが、エラスムス、ラブレー達はカルヴァンの急進性を否定し袂を分かつことになる。神

学部禁書・弾圧を逃れるためにも、カトリック王権派として王の庇護を求めることになる。この必然が反映されたのが、ラブレの作風の大きな変化である。笑いとスカトロロジーの世間のイメージをもつ第一・第二の書に比して第三・第四の書は笑いが影を潜め、人文主義の圧倒的な古典知識の洪水で埋められた晦渋さは、古代ギリシア・ローマの高い素養を要求するために、現代一般読者からは受け入れられないであろう。

本稿の冒頭で提起したラブレ研究の飽和と今後の展望について考える際に、そもそも現代にも読み継がれる古典という前提でのラブレ研究であるが、この人文主義の難解さは、時代が新しくなるにつれてますます新しい読者を拒絶するような懸念もはらんでいる。

新時代における読みなおし

ラブレ研究の概観のところで見たとおり、こうした閉塞状況の中でフランス、イギリス、アメリカ、日本でも過去の研究の集大成のような作業に入っている段階であるが、しかしそれは同時に、作品が内包するこれらの普遍的価値を、新たな時代にあわせて読み換えていく作業が必要になってきたともいえる。文学作品の提示する意味は、作品が世界と切り離されて独立したテキストとして持つものではない。それは異なる時代・文化・社会を背景とする読者が作品を「読む行為」を通じて構築するものであり⁵⁰、個々の読む行為に発生する意味は、時代・社会・個人によって異なるのである。

現在は、21世紀もすでに四半世紀が経過し、19世紀末、西洋帝国主義の世界制覇と同時に始まった近代学問としての文学研究の時代はすでに過ぎた。近代の後、現代、ポスト・モダンという言葉で言い表された時代も過ぎ去り、世界の変化に呼称がしっかり対応できていない状況ではあるが、AIの時代であり、デジタルの時代であり、文学作品を「読む行為」そのものが変容していく時代に、ラブレ研究が迎えている閉塞状況というのは、文学研究という制度自体が、これまでの限られた120年間という近代的価値で読み取ってきた意味の書き換え作業を要求されるようになってきたのかもしれない。

そこで改めてラブレの今後の研究の可能性について考えることは、ラブレのグロテスク・リアリズム、記号増殖、人文主義という三つの破壊的属性を新たな時代で読み直す作業となるであろう。その際に、とりわけ日本の研究においてラブレの人文主義に関して留意しなければならない課題がある。この人文主義が、その難解さで現代読者を拒絶する懸念に対して、人文主義の意義をどのように伝えるかが重要になってくるのであるが、日本では、ユマニズムと日本語のヒューマニズムの混同が起きている。人文主義者とは⁵¹、現代のヒューマニズムという語に引きずられる形でイメージされる博愛主義的人道主義のようなものではない。すでに見てきたように、第一義的に破壊者である。しかし第一次大戦、第二次大戦という二つの世界大戦がもたらした悲劇は、「人道主義」の意味のヒューマニズムを近代社会に強く醸成する契機となっていた。M. ハイデッガーはヒューマニズムについて「人間が人間的なものであるようにと […] 思いを致し、気遣うこと⁵²」としている。ラブレ研究の第一人者たる渡辺一夫は当初より「わかったようなわからないような、ほんやりと⁵³」した博愛主義的人道主義と人文主義の混同に警鐘を発していたが、ルネサンスの知的ムーヴメントとしての人文主義は、その名前の類似から人道主義のヒューマニズムに飲み込まれてしまった感がある。ラブレの作品に初めて触れる読者が、先入観なく読むことは難しいが、この人道主義の先入観で読まれることは、研究者が一番望まないことである。

すでに述べたように、ラブレの人文主義は、グロテスク・リアリズム、記号増殖と相俟って、文学の領域で圧倒的な創造と破壊のモーメントを展開するのであり、この人文主義を博愛主義的人道主義と読み違えてラブレの作品に触れると、その創造・破壊の文学体験を自ら拒否することになりかねない。

従って日本では、研究の入り口のところでラブレのユマニズムから、近代の垢のついたヒューマニズムを洗い落としてやることが肝要になる。加えて、今後のラブレ研究が、仮に新たな時代における新たな意味の読み直しを要求するならば、それにあわせた新たな研究者が育つ土壌を可能な限り簡潔にすることが我々近代の文学研究の徒に残された道であろう。今後の新しい研究者が、

120年の先行研究を読む途中で一生を終えることのないように、それと同時に、その重荷を避けてラブレを研究対象から回避するような現状が繰り返されないようにしなければならない。

- 1 https://www.lemonde.fr/culture/article/2024/09/17/le-poete-joachim-du-bellay-identifie-dans-un-cercueil-retrouve-a-notre-dame-de-paris_6321666_3246.html
- 2 この後の議論で展開していくように、ラブレ研究の概観を見ていくと、研究が始まって半世紀を過ぎたあたりから、ラブレ研究の飽和が始まり、同時代のその他の作家の作品群に目が向けられるようになっていき、1世紀近くなる辺りから、ラブレ研究の集大成の動きも出てくるようになり、同時進行的にその他の一般には無名の作家、思想家などの研究がより活発になった時期が見られた。筆者のように1990年代に16世紀研究に身を投じた研究者たちの間では、いかにまだ研究されていない、それと同時に価値のある作家・作品を手掛けるかは、その後のキャリア・生活に直結するものとして認識されていた。その辺りからは、学会発表などで若手の研究者がいかにみずからの選んだ無名作家・思想家が重要かを主張する、あたかも香具師の口上のような傾向が出てきたことは否定できないどころか、フランス文学界の今後を考える際に深刻に受け止めるべき事実であろう。
- 3 フンボルト理念を出発点として現代に至る大学の歴史については、以下参照。潮木守一『フンボルト理念の終焉？現代大学の新次元』、東信堂、2008年、広島大学大学院総合科学研究科（編）『世界の高等教育の改革と教養教育：フンボルトの悪夢』丸善出版、2016年。
- 4 フランス大学制度に関しては、以下参照。向井一夫「フランス高等教育の変遷 大学と学部を中心に」椋山女学園大学生生活科学部 生活の科学 8号1986年、pp. 77-93; 大場淳「フランスにおける大学教育改革」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）第53号、2005年3月、pp. 341-350。
- 5 実在も疑う異論が多く、ここではあえて作者にホメロスの名前は出さない。口承での流布が紀元前8世紀、口承のテキストが固定されたのが紀元前6世紀とされている。（cf.）Ph. Brunet, *La naissance de la littérature dans la Grèce ancienne*, Paris, Livre de Poche ; P. Carrier, *Homère*, Paris, Fayard, 1999.
- 6 *Études rabelaisiennes* は、1903年の創刊以来、現在まで62巻が継続して出版され続けている。最新版は、S.Rawles, *A Census of Rabelais Copies (1532-1626) with some Additions and Corrections to the New Rabelais Bibliography*, *Études rabelaisiennes*, LXII, Genève, Droz, 2024.
- 7 F. Rabelais, *l'Oeuvre*, (éd. par) A. Lefranc, 5 volumes, Paris, Honoré Champion, 1913-1931.
- 8 M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et*

- sous la Renaissance*, 1940, (trad. de russe par) A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993.
- 9 M.-A. Screech, *Rabelais*, Londres, 1979, trad. par M.-A. de Kisch, Paris, Gallimard, 1992 ; *Rabelais et le mariage : Religion, morale et philosophie du rire*, traduit en français par Ann Bridge, *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992 ; *The Rabelaisian Marriage*, London, Cambridge University Press, 1958 ; *A New Rabelais Bibliography*, Genève, Droz, 1987.
- 10 F. Rigolot, *Les Langages de Rabelais*, *Etudes Rabelaisiennes*, t. X, Genève, Droz, 1972 ; « Cratylisme et Pantagruélisme : Rabelais et le statut du signe », dans *Etudes Rabelaisiennes*, t. XIII, Genève, Droz, 1976, pp. 115-132 ; M. Jeanneret, *Le défi des signes : Rabelais et la crise de l'interprétation à la Renaissance*, Orléans, Paradigme, 1994 ; J. Paris, *Rabelais au futur*, Paris, Etidions du Seuil, 1970 ; J. Parkin, « Comic Modality in Rabelais : Baisecul, Humevesne, Thaumaste », *Etudes Rabelaisiennes*, t. XVIII, 1985, pp. 57-82.
- 11 70年代の当時では、G.-A. Pérouse が名付けた「雑多なジャンル = genre bigarré」と一括りの扱いをされていた。G.-A. Pérouse, *Nouvelles françaises du XVI^e siècle. Images de la vie du temps*, Genève, Droz, 1977; 《De Montaigne à Boccace et de Boccace à Montaigne : Contribution à l'étude de la naissance de l'essai », dans *La nouvelle française à la Renaissance*, éd. par L. Sozzi, Genève, Slatkine, 1981, pp. 13-40.
- 12 (Cf.), R. Cooper, « Outline bibliography of works on chivalry published in France before 1600 » dans *Chivalry in the Renaissance*, éd. par Sydney Anglo, Woodbridge, Boydell press, 1990 ; M. Rothstein, « Le genre du roman à la Renaissance » dans *Le Roman chevaleresque tardif, Etudes françaises*, Montréal, Presses de l'Université de Montréal, vol. 32, n° 1, 1996 ; P. Mounier, *Le roman humaniste : un genre novateur français 1532-1564*, Paris, Honoré Champion, 2007 ; *D'une fantastique bigarrure : Le Texte composite à la Renaissance*, éd. J.-R. Fanlo, Paris, Champion, 2000
- 13 V.-L. Saulnier, préface de *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, Genève, Paris, 1981 ; *Le Roman français au XVI^e siècle : ou le renouveau d'un genre dans le contexte européen*, M. Clément et P. Mounier (sous la dir. de), Strasbourg, Presses Universitaires de Strasbourg ; P. Mounier, *Le roman humaniste : un genre novateur français 1532-1564*, Paris, Champion Editeur, 2007 ; J. Dauphiné et B. Périgot (éd. par), *Conteurs et Romanciers de la Renaissance : Mélanges offerts à G.-A. Pérouse*, Paris, Honoré Champion, 1997.
- 14 F. Rabelais, *l'œuvre complète*, éd. par M. Huchon, Paris, Gallimard, collection « Pléiade », 1994. 2022年には、ラブレー研究の重鎮たる G. ドゥメルソンの逝去(2020年)を機に新たなラブレーの全集が出版されたが、ユション版に比べて註の数は大幅に減らされ、M. ユションの校訂版に代わるものとはなっていない。(cf.), R.

Menini (éd. par), *Tout Rabelais*, Paris, Bouquins, 2022. この「ラブレールの全て」というタイトルが示すように、ラブレールの全てをなるべく多くの読者に、という趣旨の出版であり、普通のラブレール作品の出版には含まれない小作品も全て含み、現代語訳も付記されているが、註の量・詳細さは研究者向けではなく、一般向けの範囲となっている。

- 15 M. Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011.
- 16 T. W. Reeser (éd. par), *Approaches to Teaching the Works of François Rabelais*, Modern Language Association of America, 2011.
- 17 J. O'Brien, *The Cambridge Companion to Rabelais*, Cambridge University Press, 2010.
- 18 M. スクリーチ著、平野隆文 訳、『ラブレール 笑いと叡智のルネサンス』, *Rabelais, op.cit.*, 1979, 白水社, 2009年。日本では、2009年の M. スクリーチのラブレール概説書の翻訳が刊行されたが、スクリーチの概説書自体が1979年のものである。これは裏を返せば、スクリーチの著作が概説書として十分であり、それ以降の半世紀にラブレールの読み方に大きな変化はないということを意味する。また、ラブレールの作品の翻訳としては、渡辺一夫の和訳（岩波書店 1973年）が絶対的なものとしてあり続けたが、宮下志朗が2005年から2012年にかけて、全五巻の新訳を刊行する。フランソワ・ラブレール『ガルガンチュアとパンタグリュエル1～5』, 筑摩書房, 2005年～2012年。渡辺一夫の訳以外に日本語へ翻訳は不可能と言われるほどの高い評価を得ていた渡辺訳も、日本語の古さが徐々に難解さにつながり、現代読者にとってラブレールへの敷居がやや高くなってきていたのは事実である。宮下訳では平易な新しい日本語での翻訳に努めているが、二つの和訳が共存していくか、どちらかが淘汰されるかは、今後に委ねられる。
- 19 以下、すべて引用テキストの翻訳は筆者による。F. Rabelais, *Gargantua*, dans *l'œuvre complète*, éd. par M. Huchon, *op.cit.*, Ch. 11, pp. 33-34 : « Gargantua, depuis les troys jusques à cinq ans, feut nourry et institué en toute discipline convenente, par le commandement de son père, et celluy temps passa comme les petitz enfans du pays, c'est assavoir : à boyre, manger et dormir ; à manger, dormir et boyre ; à dormir, boyre et manger. Toujsours de vaultroit par les fanges, se mascaroyt le nez, se chauffourraoit le visaige, aculoyt ses souliers, baisloit souvent aux mousches, et couroit volentiers après les parpaillons, desquelz son père tenoit l'empire. Il pissoit sus ses souliers, il choyoit en sa chemise, il se mouschoyt à ses manches, il mourvoit dedans sa soupe et patroilloit par tout lieux, et beuvoit en sa pantoufle, et se frottoit ordinairement le ventre d'un panier.
- 20 無記名の大文字の身体に関しては、拙論参照。『パンタグリュエルにおける身振りのエピソードの解釈』, 日本大学法学部桜文論叢106号, 2022年, pp.1-21.
- 21 M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et sous la Renaissance*, trad. de russe par A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993.

- 22 イタリア人文主義に関しては、以下参照。池上俊一編、『原典・イタリア・ルネサンス人文主義』名古屋大学出版会、2009年；E. Garin, *L'humanisme italien*, (trad. en français) Paris, Albin Michel, 1947, 2005。
- 23 池上俊一編、『原典・イタリア・ルネサンス人文主義』, *op.cit.*, pp. 36-37.
- 24 A. Jouanna, Ph. Hamon (éd. par), *La France de la Renaissance*, Paris, Robert Laffont, 2001, p. 18.
- 25 ヨーロッパのアイデンティティーの生成過程に関しては、以下参照。J. Hale, *La civilisation de l'Europe à la Renaissance*, 1993, trad. Par R. Guyonnet, Perrin, Paris, 1998.
- 26 フランス・ルネサンスの歴史は、エポック・メイキングな出来事が重なるケースが散見される。1453年と1543年は、それぞれに極めて象徴的な出来事が起きている。コンスタンティノーブルの陥落と東ローマ帝国の滅亡が、100年戦争の終結と同じ1453年に起きたことは、西ヨーロッパがその後500年つづく西洋文明の覇権の出発点として象徴的なものである。また1543年は、コペルニクスの『天球の回転について』とヴェサリウスの『ファブリカ』が出版された年であり、天動説と解剖学という、ルネサンスのエピステーメにおける科学の根幹にあるマクロコスモスとしての宇宙とミクロコスモスとしての人体に関する近代科学が同時に出発した象徴的な年である。
- 27 A. Jouanna, *La France du XVI^e siècle : 1483-1598*, Paris, PUF, 2006, p. 4.
- 28 二つのシスマ（＝断裂）と呼ばれるカトリックとギリシア正教の決別、アヴィニョンへのローマ教皇の捕囚によるカトリック権威の内紛に対して、このカトリックからのプロテスタントの分離を改革と呼ぶのは、ヨーロッパの同一性・アイデンティティーを保証するキリスト教がこれ以上毀損されることを忌避する意図の表れとも言えるだろう。
- 29 拙論参照。『フランソワ・ラブレーの作品に見る近代軍事革命』, 日本大学法学部紀要桜文論叢101号, 2020年, pp. 1-23.
- 30 書物の歴史に関しては、以下参照。L. Febvre, H-J Martin *L'apparition du livre*, ; A. Parent, *Les Métiers du livre à Paris*, 1974 ; H.-J. Martin, *L'apparition du livre*, Paris, Albin-Michel, 1958, 1999 ; A. ベティグリー, 『印刷という革命・ルネサンスの本と日常生活』, 2010年, 桑木野幸司 訳, 白水社, 2017年 ; J. ヘリッシュ, 『メディアの歴史・ビッグバンからインターネットまで』, 2011年, 川島健太郎, 他 訳, 法政大学出版局, 2017年 ; 大黒俊二 『声と文字』, 岩波書店, 2008年。
- 31 Pic de la Mirandole, le Discours de la dignité de l'homme, traduction de A.-M. Schmidt, cité par Jean-Yves Boriaud, *La littérature française du XVI^e siècle*, Paris, Armand Colin, 1995, p. 33 : « Toutes les autres créatures ont une nature définie contenue entre les lois par nous prescrites ; toi seul, sauf de toute entrave, suivant ton libre arbitre auquel je t'ai remis, tu te fixeras ta nature. Je t'ai placé au centre de l'univers afin que tu regardes avec d'autant plus d'aisance à l'entour de toi tout ce qui est au monde. Je ne t'ai fait ni céleste ni terrestre, ni mortel ni

immortel ; d'après ton vouloir et pour ton propre honneur, modeleur et sculpteur de toi-même, imprime-toi la forme que tu préfères. »

- 32 Rabelais, *Gargantua*, *op.cit.*, Ch. LVII, p. 149 : « *Fay ce que voudras* ».
- 33 宮下志朗, 『フランス・ルネサンス文学集 1』, 白水社, 2015年, 「解説」 pp. 500-501.
- 34 (Cf.) E.-L. Eisenstein, *La révolution de l'imprimé à l'aube de l'Europe moderne*, Paris, La Découverte, 1979, 1991 ; R. Chartier, H.-J. Martin, *Histoire de l'édition française*, t. I, *Le Livre conquérant, du Moyen Age au milieu du XVIIe siècle*, Paris, Fayard, 1989.
- 35 16世紀において, 無神論は存在しない。Athée = 無神論者という非難は, 神を信じていない者への非難ではなく, 思想的に最も糾弾すべき相手に用いられる最上級の非難の言葉以上の意味を持たない。(cf.) L. Fèbre, *Le problème de l'incroyance au 16^e siècle*, Paris, Albin-Michel, 1942, 2003.
- 36 Rabelais, *Pantagruel*, *op.cit.*, ch. 8, p. 243 : « toutesfoys comme tu peulx bien entendre, le temps n'estoit tant idoine ne commode es lettres comme est de present, et n'avoys copie de telz precepteurs comme tu as eu. temps estoit encores tenebreux et sentant l'infelicite et calamité des Gothz, qui avoient mis à destruction toute bonne literature. Mais par la bonté divine, la lumière et dignité a esté de mon eage rendue es lettres et y voy tel amendement que de present à difficulté seroys je receu en la premiere classe des petitz grimaulx, qui en mon eage virile estoys (non à tord) réputé le plus sçavant dudict siecle. »
- 37 J. ミシュレ, 『フランス史 VII・ルネサンス』, 1855年, 桐村泰次 訳, 論創社, 2019年。
- 38 フランスのアイデンティティーについては以下参照。F. ブローデル, 『フランスのアイデンティティー』, 1986年, 桐村泰次 訳, 論創社, 2015年。R. Muchembled, *L'invention de la France moderne : monarchie, cultures et société (1500-1660)*, Paris, Armand Colin, 2002.
- 39 フランスにおけるイタリア・ルネサンスの影響に関しては, 以下参照 : J. Balsamo, *L'Italie française. Italianisme et anti-italianisme en France à la fin du XVIe siècle*, thèse Paris IV, 1988, - éd. par, *Passer les Monts ; Français en Italie-l'Italie en France (1494-1525)*, Xe colloque de la Société française d'étude du Seizième Siècle, Paris, Honoré Champion, 1998 ; C. Billot, « Les Italiens naturalisés français sous le règne de François Ier (1514-1517) », *Strutture familiari, epidemie migrazioni nell'Italia medievale*, p.477-492 ; I. Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, Paris, Albin Michel, 1986 ; J.-F. Dubost, *La France italienne*, Paris, Aubier, 1997 ; E. Picot, *les Italiens en France au XVIe siècle*, Rome, Vecchiarelli, 1995.
- 40 オック語とオイユ語の歴史的・地理的關係に関して, 以下参照。F. ブローデル, 『フランスのアイデンティティー』, *op.cit.*, pp. 72-79.
- 41 F. Cornillat, A. Berthelot, *Littérature Moyen Age / XVIème siècle*, Paris, Nathan, 2007, p. 3.

- 42 2023年10月30日に、パリ北東のヴィレル・コトレ城において、フランソワ・マクロン大統領の肝いりで作られた国際フランス語博物館が開館した。1539年のヴィレル・コトレ勅令をフランス語の原点と捉える意識が現代フランスにも脈々と受け継がれている証である。 <https://www.cite-langue-francaise.fr/>
- 43 16世紀のフランス語の歴史に関しては、以下参照。M. Huchon, *Histoire de la langue française*, Paris, Le livre de poche, 2011.
- 44 ラブレールの言語面での影響に関しては、以下参照。F. Rigolot, *Les Langages de Rabelais*, Genève, Droz, 1972 ; F. Giaccone (éd. par), *La langue et les langages dans l'œuvre de François Rabelais*, Genève, Droz, 2021.
- 45 本稿の冒頭で紹介した通り、つい先日遺体がパリのノートルダム寺院で発見されたが、プレイヤード派の一人として、最初の組織的なフランス語文学運動を担ったデュ・ベレーは、ラブレールの庇護者であったジャン・デュ・ベレーの兄、ギヨームの息子である。
- 46 デュ・ベレーに関しては、以下参照。Bruno Roger-Vasselín, *Du Bellay, une révolution poétique ? La Deffence, et illustration de la langue françoise & l'Olive (1549-1550)*, Paris, PUF, 2007. 邦訳に関しては、以下参照。ジョアシャン・デュ・ベレー, 加藤美雄 訳『フランス語の擁護と顯揚』白水社, 1943年。この有名な作品自体が、イタリアの作品の模倣であることは実に皮肉なことであるが、逆に言えば、当時においては作品の模倣・剽窃ということにためらいがない時代であり、著作権という、個人を前提とする概念が存在しなかったことの証でもある。
- 47 V.-L. ソーニエ『十六世紀フランス文学』二宮敬 訳, 白水社, pp. 95-99.
- 48 L.-F. Céline, *Rabelais, il a Raté son Coup*, Librairie Axel Benadi, Broy, 1994.
- 49 P. Jourda, *Marguerite d'Angoumème : Duchesse d'Alençon, Reine de Navarre (1492-1549) ; Etude biographique et littéraire*, Paris, Honoré Champion, 1930, rééd., Genève, Slatkine Reprints, 1978, I, p. XII.
- 50 拙論参照「小説における身体の在り処」日本大学法学部紀要桜文論叢103号, 2021年, pp.205-221。
- 51 人文主義についてはフランス・ルネサンスを語るのと同義であり参考文献も同様に多くあり、以下の参照はそのわずか一部である。A. グラフトン, 『テキストの擁護者たち・近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』, 1991年, ヒロ・ヒライ, 福西亮輔 訳, 勁草書房, 2017年 ; A. Bidar, *Histoire de l'humanisme en Occident*, Malakoff, Dunod, 2021 ; G. Gadoffre, *La Révolution culturelle dans la France des humanistes*, Genève, Droz, 1997 ; E. Garin, *L'humanisme italien*, Paris, Albin Michel, 1947, 2005 ; N. Journet (sous la dir. de), *Humanisme : Le destin d'une grande idée*, Auxerre, Sciences Humaines Editions, 2024.
- 52 M. ハイデッガー『「ヒューマニズム」について』, 渡邊二郎 訳, 筑摩書房, 1997, 2018年, p.30.
- 53 渡辺一夫『ヒューマニズム考：人間であること』講談社, 1973年, 2023年, p. 29.

La compréhension du français par le prisme de l'anglais chez les Japonais

Camille Lepeltier

1. Introduction

Le début de l'apprentissage de la langue française peut être difficile pour les apprenants étrangers, en particulier pour les apprenants japonais dont la langue maternelle diffère grandement de cette langue européenne. Les Japonais n'étudient généralement le français qu'à partir des études supérieures. L'unique langue seconde qu'ils ont habituellement l'occasion d'apprendre pendant leurs études au primaire, collège et lycée est l'anglais. Or l'anglais a de nombreuses ressemblances avec le français et les similitudes entre ces deux langues peuvent donc être utilisées en cours de FLE (Français Langue Etrangère) avec des apprenants japonais.

Nous proposons ici une étude portant sur la compréhension du français par les Japonais, afin d'évaluer combien un débutant en français ou un Japonais non-locuteur de la langue française est capable de comprendre celle-ci. Nous avons réalisé une enquête auprès d'étudiants japonais, en leur proposant un texte de français à lire et à traduire dans leur langue. Nous avons ensuite analysé les résultats obtenus en nous demandant combien de mots du texte ont pu être compris correctement par les interrogés et si cette compréhension est due au biais de l'anglais.

Nous expliquerons tout d'abord les tenants de la méthodologie appliquée, puis nous analyserons les résultats obtenus en plusieurs parties, en commençant par les mots

correctement traduits, les traductions erronées, les mots non-traduits et pour finir la compréhension globale du texte et l'avis des étudiants sur cet exercice.

2. Méthodologie

Nous avons organisé cette étude en deux temps, dans un premier temps avec des étudiants japonais de première année d'université ayant chacun choisi une langue seconde différente parmi les suivantes : allemand, chinois ou français, puis dans un second temps avec une classe d'apprenants de français de deuxième année.

Dans la première classe, les étudiants ont été séparés en groupes en fonction de leur langue seconde : les apprenants d'allemand, de chinois et de français. Ces étudiants étaient tous en début d'apprentissage de ces langues, mais nous avons préféré séparer les débutants en langue française des autres, afin d'éviter un biais d'apprentissage. Les étudiants de français avaient déjà commencé à apprendre quelques mots de base qui étaient possiblement inconnus des autres étudiants. Les étudiants étaient au nombre de trente-cinq et ont été divisés en quatre groupes d'apprenants d'allemand, trois groupes d'apprenants de chinois et cinq groupes d'apprenants de français. Chacun de ces petits groupes étaient composés de deux à trois personnes.

Dans la deuxième classe, les interrogés avaient déjà plus d'un an d'apprentissage du français derrière eux, mais restaient malgré tout à un niveau débutant A1-A2, n'ayant eu que trois heures de cours de français par semaine, pendant seulement trente semaines de cours universitaires. Les étudiants étaient au nombre de cinq et ont chacun travaillé seul sur le texte. L'étude comprend par conséquent les réponses de Japonais non-apprenants, de Japonais débutants en langue française et de Japonais de niveau de français A1-A2.

Pour cette étude, nous avons choisi d'utiliser un texte de français qui n'a pas pour but d'être destiné à un public d'apprenants en langue, mais un essai écrit en français comprenant à la fois des mots simples et d'autres plus complexes que des niveaux

débutants de français n'auraient pas encore étudiés. L'essai porte sur l'apprentissage des langues, la difficulté de celui-ci et des barrières qu'on s'impose à nous-mêmes. Il parle de l'expérience de l'auteur qui évoque sa relation avec le Japon, sa culture et l'apprentissage de sa langue. Il a été écrit dans le cadre de la création d'un recueil d'essais rédigés par plusieurs professeurs de faculté, joint à la fin du manuel publié par l'Université de droit Nihon sous le titre 「テキストブック 自主創造の基礎」. Ce livre a pour objectif d'aider les étudiants à entrer dans le monde universitaire et la partie des essais leur permet d'apprendre à connaître leurs professeurs.

Les apprenants soumis à cette enquête ont reçu comme consigne de souligner les mots dont ils pensaient comprendre le sens, puis de noter la signification en japonais de ces mots. Les non-apprenants n'ont pu comprendre qu'une minorité des mots du texte, comparé aux apprenants de deuxième année, mais à la fin de l'exercice, lorsque nous leur avons demandé de débriefer sur leur expérience, plusieurs de ces étudiants ont trouvé amusant et intéressant d'essayer de déchiffrer un texte dans une langue inconnue.

3. Résultats

Le texte a été lu par les étudiants interrogés, puis ils ont souligné et traduits les mots qu'ils pensaient comprendre et enfin ils ont rédigé en japonais un résumé de ce qu'ils pensaient avoir compris du texte et leur avis sur l'exercice qui leur a été proposé. Nous commencerons ici par étudier les occurrences des traductions correctes et erronées des mots français, proposées par les interrogés.

Le texte comprend en tout 349 mots et en prenant en compte tous les mots soulignés par l'ensemble des étudiants, nous obtenons un total de 318 mots relevés, soit 91% du texte, et 31 mots qui n'ont été soulignés ni traduits par aucun des interrogés dans cette étude. Néanmoins, ce pourcentage comprend toutes les données mélangées. Si nous séparons les données obtenues par les non-apprenants des étudiants

ayant déjà un niveau A1-A2, nous observons les résultats suivants :

- 82 mots ont été proposés par les étudiants des groupes d'allemand, ce qui correspond à un total de 23% de mots relevés dans le texte ;
- 61 mots pour les étudiants des groupes de chinois, équivalent à 17% des mots du texte ;
- 82 mots pour les étudiants des groupes de français débutants, avec 23% de mots relevés ;
- et pour finir, 311 mots pour les apprenants de français niveau A1-A2, ce qui équivaut à 89% des mots du texte.

Les mots relevés par les étudiants sont ceux dont ils pensent en avoir compris le sens, mais la signification notée pour chacun de ces termes est un mélange de bonnes et de mauvaises interprétations combinées. Nous étudierons maintenant les données obtenues pour connaître le taux de traduction correcte des mots japonais proposés par les interrogés.

3.1. La traduction correcte des mots français par le biais de l'anglais

Dans le tableau suivant, nous avons relevé une liste de mots traduits en japonais par les étudiants interrogés. Sur les 337 mots ayant été traduits, ce tableau ne contient que les trente premiers qui ont été le plus correctement compris et qui ont été associés à une traduction japonaise appropriée. Ces mots français et leurs traductions ont été organisés dans l'ordre du pourcentage d'occurrence de ces mots et de leur bonne traduction.

Mot français	Traductions correctes proposées en japonais	Pourcentage de traduction correcte
langue	言語	100%
Japon	日本	
culture	文化	
passion	情熱、感情、熱意、パッション	94%
simple	単純、普通、簡単、簡素、簡潔に、簡順、シンプル	
distance	距離	88%
possible	可能、可能な、できる	76%
différents	違い、違う、異なる	
kimono	きもの、着物	
difficile	難しい	71%
long	長い、長く	
traditionnel	伝統、伝統的な	
naturel	自然、自然な、ナチュラル	65%
connectée	繋がり、繋ぐ、繋げる、接続	59%
voyagé	航海、航旅、旅行、旅、旅する	
chance	機会、チャンス	
opportunités	機会、オポチュニティー	53%
histoire	歴史	
plus	プラス、足す、もうひとつ、もっと、より	
français	フランス、フランス語、フランス人、フランスの	47%
physique	物理、物理的、身体、身体的な、体格	
classe	クラス、授業、教室	
japonais	日本語、日本人、日本の	41%
littérature	文学、読みもの、識学	35%
marketing	マーケティング、商売	29%
barrière	壁、障害、バリア	
planète	地球、惑星	
développer	発達、発展、開発、生み出す	
linguistique	言語の、言語的な、言語学	
accessible	接続できる、接近、受入可能な、手に入る	

Nous pouvons observer que les mots les mieux compris par les étudiants interrogés sont des termes qui ont une grande ressemblance avec des mots anglais. Les trois mots ayant été compris par tous les interrogés sont « langue » qui ressemble à

l'anglais « language », « Japon » qui est à une lettre près le même mot qu'en anglais « Japan » et « culture » qui est identique au terme anglais. Les mots « passion » et « simple » ont été relevés par 94% des étudiants et sont également semblables, de même pour les termes « distance », « possible », « différents » sans l'accent en anglais, ou encore « long » qui sont aussi similaires à leurs équivalents anglais. Le mot « difficile » a été traduit correctement par 71% des interrogés alors qu'il diffère légèrement de l'orthographe anglaise « difficulty ». Il en va de même pour les termes « traditionnel » et son équivalent anglais « traditional », « naturel » et « natural », « connectée » et « connect / connected » ou encore « opportunités » et « opportunities ».

Les mots « français » et « japonais », un peu éloignés de leurs équivalents anglais, ont tout de même été compris respectivement par 53% et 47% des interrogés. Les étudiants ayant saisi le sens de ces deux mots ne sont pas uniquement les apprenants de français, mais également certains étudiants parmi les apprenants d'allemand et de chinois. Ces deux termes ont plusieurs sens et ont été correctement traduits par leurs différentes significations, comprenant 「フランス語・日本語」 la langue française / japonaise, 「フランス人・日本人」 le peuple français / japonais ou il a été simplement noté qu'ils correspondent à l'adjectif créé à partir des mots « France » et « Japon », 「フランスの・日本の」.

Le mot « kimono » est évoqué plusieurs fois dans le texte et vient directement du mot japonais 着物 /*kimono*/. Cependant ce terme n'a pas été souligné et traduit par la totalité des interrogés : seuls 76% des étudiants l'ont relevé. Nous pouvons supposer que le terme étant japonais, il ne semblait pas nécessaire aux étudiants de montrer qu'ils l'avaient compris et certains interrogés ne l'ont donc tout simplement pas traduit.

Nous avons pu relever que certains mots n'avaient pas été traduits en japonais, mais en anglais par les étudiants. Par exemple le mot « apprentissage » a été souligné et traduit : 「acquisition ? 習得」 ou encore le terme « difficile » noté : 「難しい difficulty」. Parfois la traduction n'était proposée qu'en anglais comme « dans » qui a

été traduit par « in ». L'anglais étant une langue plus proche du français que le japonais, il est peut-être plus pratique pour les apprenants Japonais qui utilisent l'anglais comme une aide à la compréhension du français, de laisser les mots tels quels en anglais sans les traduire dans leur langue maternelle. La traduction anglaise d'un mot français a possiblement plus de sens pour certains apprenants qu'une traduction japonaise qui peut parfois s'éloigner beaucoup du sens premier du mot français. C'est le cas pour les mots d'ordre grammatical, comme les articles définis et indéfinis qui ont leurs équivalents directs en anglais, mais aucune traduction possible en japonais, à part une explication de leur utilisation. Par exemple, le verbe « avoir » a été relevé par deux étudiants et a été noté 「動詞」 par l'un d'eux, ce qui signifie « verbe » en japonais et « have » par l'autre.

Cependant, certains apprenants ont également souligné des mots parce qu'ils leur semblaient connus et qu'ils ressemblaient à un mot d'anglais, sans pour autant savoir quel pouvait être le sens de ce terme en japonais. Dans ces cas, l'étudiant a simplement noté le mot français suivi d'un point d'interrogation ou bien a laissé un vide à côté. Ils ont conscience que ce mot a un équivalent proche en anglais, mais ne se rappellent plus de sa signification. Il est donc difficile dans ce cas présent d'utiliser l'anglais comme aide à l'apprentissage du français, car le terme anglais n'est pas forcément acquis par tous les apprenants.

Il existe plusieurs méthodes de français pour un public japonais, qui utilisent ces ressemblances entre le vocabulaire français et anglais, afin de faciliter l'étude de cette nouvelle langue en s'aidant de l'anglais déjà acquis. Par exemple, une de ces méthodes nous propose le mot « danger » qui est identique au mot anglais, tout en l'incluant dans une phrase pour illustrer ce mot dans un contexte, tout d'abord en français, puis en anglais : « *La petite fille est en danger* » et « *The little girl is in danger* ». (Hisamatsu, 2022 : 10).

D'autres manuels de français destinés aux Japonais proposent de vraies leçons

avec des dialogues miroirs anglais-japonais, des parties explicatives en japonais formant des ponts avec l'anglais, ainsi que des encadrés de vocabulaires reliant les mots japonais, anglais et français (Fujita, Seito, 2013 : 38).

	招待	招待状	招待客	受ける	～を断る
英	invitation	invitation card	guest	to accept	to refuse
仏	invitationf.	carte d'invitationf.	invitén.	accepter	refuser

Figure 1 : exemple d'une leçon de vocabulaire alliant français et anglais

(Apprenons le français et l'anglais, Hyoronsha)

Néanmoins, le vocabulaire de la langue anglaise n'est pas parfaitement identique au français. Cette méthode ne propose que des ponts entre les mots similaires des deux langues, mais il existe d'autres livres qui enseignent également le français à un public japonais en s'aidant de l'anglais. L'un d'eux utilise les deux langues en prenant comme exemple des expressions ou des formes grammaticales dans lesquels l'ordre des mots est identique. Nous pouvons observer cet énoncé : « *She must be ill* » accompagné de la phrase « *Elle doit être malade* ». Aucun des mots ne se ressemble orthographiquement, mais le nombre de mots est le même, ainsi que l'ordre de ces mots. La forme de la phrase est bien commune aux deux langues, contrairement au japonais écrit au dessus des deux énoncés : 「彼女は病気に違いない」 (Hisamatsu, 2017 : 74).

De plus, l'existence de certains mots anglais identiques ou très similaires à des mots français, mais divergeant dans leur sens, peut compliquer la tâche aux apprenants.

3.2. Les traductions erronées

Dans certains cas, des mots ont été relevés dans le texte, mais n'ont pas été traduits par le mot japonais adéquat. Les significations proposées par les étudiants interrogés n'étaient pas toujours correctes. La majorité de ces erreurs est due à de faux-

amis anglophones, comme c'est le cas pour les vingt exemples suivants (présentés dans l'ordre d'apparition dans le texte).

- Le mot « difficile » a été majoritairement bien traduit par le terme 「難しい」 mais également une fois par le mot 「違い」 qui signifie « différent ». L'erreur ici peut être due à la ressemblance entre ces deux mots de français, orthographe également similaire entre les deux mots d'anglais correspondants, « difficult » et « different ».

- Le mot « barrière » a également été bien traduit par les termes 「壁」 ou 「障害」 par autant de non-apprenants que de niveaux supérieurs, mais un interrogé de deuxième année a proposé la traduction 「種類」 qui signifie « sorte », « type » ou encore « variété ». L'erreur provient probablement d'une analogie avec le terme anglais « variable », le son /v/ étant parfois perçu comme un /b/ par les japonophones.

- Le mot « pourtant » a été traduit par un non-apprenant en 「大事なこと」, signifiant « chose importante ». La faute semble venir de la ressemblance entre les mots « pourtant » et « important ».

- L'article défini pluriel « les » a été relevé par un étudiant de deuxième année et noté par l'explication 「複数形の冠詞」 (article pluriel). Cependant, un des élèves n'ayant jamais étudié le français l'a également relevé en proposant la traduction 「レス (減ってる)」 « less (diminuer) », mot d'anglais qui signifie « moins » en français. La confusion est facilement compréhensible du point de vue de la similarité orthographique.

- Le mot « pour » a été mal compris par les non-apprenants à cause de l'homonyme anglais « to pour » signifiant « verser » et la proposition de traduction japonaise 「注ぐ」 apparaît trois fois dans les données relevées. Un groupe de non-apprenants a également proposé le mot 「貧しい」 (pauvre), en lien avec le mot anglais « poor ».

- Le verbe « faire » a été bien compris par les étudiants de niveau A1-A2, mais n'a pas été souligné par les non-apprenants ou les débutants, sauf dans les données d'un groupe d'apprenants de chinois qui a proposé le terme 「公平」 (équitable, impartial), qui a été probablement déduit du mot « fair » en anglais.

- Le mot « entre » a été compris comme le terme « entry » anglais, avec les termes japonais 「入る、エントリー、入口」 signifiant le verbe « entrer », une « entrée » sur un formulaire d'inscription ou encore le sens de « porte d'entrée ». La traduction n'est pas entièrement erronée dans ce cas présent, mais le sens dans le texte était différent et portait sur « *la distance physique entre ses différents pays* ».

- Le mot « pays » a d'ailleurs souffert du même problème. Le mot a été compris dans son sens anglais « to pay » qui est également utilisé en français avec le verbe « payer ». Cependant, il est question ici, dans le cadre de cette phrase, de pays dans le sens d'Etat ou de nation. Les propositions des interrogés japonais sont les suivantes : 「払う、支払う、支払い、買う」 dans le sens de « payer », mais aussi 「注目」 (faire attention) de l'anglais « to pay attention ». Seuls quelques élèves de deuxième année ont proposé les sens corrects de « pays » avec les termes de 「国、国々」.

- Le mot « actualité » a subi l'influence du faux-ami anglais « actually » et a été traduit par les mots 「アクチュアリー」 qui est le mot « actually » retranscrit tel quel en alphabet japonais, 「つまり」 utilisé pour dire « autrement dit, en d'autres termes, c'est-à-dire » ou bien par les termes japonais 「現実、実物、真実」 signifiant « réalité, réel, vérité » qui proviennent du mot « actual ».

- Le mot « Terre » a été traduit par les mots japonais 「テラー、恐怖」, littéralement « terreur, peur », l'étudiant y ayant vu une ressemblance avec le mot « terror ».

- Le mot « soi » dans la phrase « *tout en restant chez soi* » a été relevé par un non-apprenant et traduit par le terme 「大豆」, le mot japonais pour « soja », en confusion vraisemblablement avec le terme anglais « soy ».

- Le mot « son » que l'on peut lire dans l'extrait « *son écran d'ordinateur* » a vu comme proposition de traduction le mot 「息子」 signifiant « fils », le contraire de « fille », par sa similitude orthographique avec l'anglais « son ».

- Le verbe « avoir » a été bien reconnu par les étudiants de niveau A1-A2, mais un non-apprenant a proposé le sens de 「避ける」 (éviter), en liaison avec le verbe anglais

« to avoid ».

- Le mot « pendant » a été également bien compris par les étudiants de français, mais les non-apprenants ou encore débutants l'ont traduit par l'homonyme anglais « pendant » 「ペンダント」 « le pendentif ».

- Le verbe « développer » a été interprété comme un nom et traduit par les mots 「開発者、デベロッパー、成長する人」 (promoteur, développeur, une personne qui grandit). Ce concept de « personne qui... » vient de la terminaison en « -er » anglaise, qui en français est simplement la terminaison des verbes du premier groupe.

- Le verbe « participer » a connu la même erreur avec le mot 「参加者」 comme traduction, signifiant « participant ».

- Le verbe « attendais » conjugué à l'imparfait de l'indicatif a été compris par un étudiant de deuxième année qui l'a noté sous les termes 「attendre の過去」 (le passé d'attendre). Cependant, d'autres élèves y ont perçu le sens suivant : 「出席する、attend」 (dans le sens d'assister à un cours).

- Le mot de négation « pas » dans la phrase « *je ne m'attendais pas* » a reçu comme proposition de traduction par un non-apprenant, le mot 「パス」 de l'anglais « pass ». Seuls les étudiants de niveau A1-A2 connaissaient la formule négative « ne ... pas ».

- Le mot « comme » a été également traduit par le verbe anglais à l'orthographe similaire « to come » et deux groupes de non-apprenants ont proposé le verbe japonais 「来る」 (venir) comme traduction.

- Le verbe « tend » dans la phrase « *ce monde qui nous tend les bras* » a été traduit par l'expression 「傾向、傾向がある、傾く」 (avoir tendance à). Le français reconnaît aussi cette signification, mais la traduction correcte de l'expression ci-dessus serait plutôt avec les termes 「手を差し伸べる」 (tendre les bras / les mains).

La majorité des erreurs de traduction énoncées ci-dessus sont dues à des faux-amis anglais, des mots de français similaires à des mots anglais connus par les

interrogés, mais qui ne partagent pas la même signification. Dans quelques cas rares, les deux mots sont identiques en forme et en sens, mais dans un contexte différent de celui exposé dans le texte étudié. Les non-apprenants sont les interrogés ayant fait le plus de fautes de ce genre, mais certaines des données ci-dessus proviennent aussi des mots relevés par les étudiants de niveau A1-A2, les faux-amis induisent malheureusement en erreur les apprenants à tous les degrés de connaissances de la langue.

3.3. Les mots non traduits

Certains mots n'ont pas été traduits par les étudiants interrogés, soit par absence de ressemblance à un mot connu anglais, dans le cas des non-apprenants, soit par absence de connaissance du mot pour les étudiants ayant déjà suivi des cours de français. C'est le cas des termes complexes « répriment », « tarissent » ou encore « didactique ». Néanmoins, quelques mots comme « envie », qui possède un équivalent anglophone avec le terme « envy », n'ont pas été relevés par les interrogés. C'est aussi le cas des termes « autre » et « côté » qui ont déjà été étudiés en classe de FLE, mais qui n'ont pas été relevés par les apprenants de deuxième année.

Parfois les étudiants reconnaissaient un mot d'anglais, se rappelaient qu'il existait dans cette langue, mais sans se souvenir de sa signification, comme nous l'avons observé dans les cas notés précédemment. Quant aux petites particules ou articles spécifiques à la grammaire française, il était impossible pour les non-apprenants de les comprendre. Les articles définis et indéfinis (le, la, l', les, un, une, des), les adjectifs possessifs (mon, ma, mes, son, sa, ses), les adjectifs démonstratifs (ce, cet, cette, ces), ainsi que les particules comme « et », « de », « à » ou encore la négation en « ne ... pas », ne peuvent être que difficilement compris par des novices en études du français.

Il en va de même pour les verbes « être », « avoir » et « faire » qui apparaissent plusieurs fois dans le texte, à leur forme infinitive ou conjuguée. Ils n'ont jamais été traduits par les non apprenants sauf « avoir » qui a été mal compris et traduit par le

japonais 「避ける」 probablement par association avec le terme « avoid » anglais, similaire au niveau de sa graphie au verbe « avoir » français, mais différent en sens. De même pour le verbe « faire » qui avait été relevé une fois par un non-apprenant et traduit par le mot 「公平」 par sa ressemblance avec le mot anglais « fair », comme nous l'avons vu dans la partie précédente.

Les différentes formes de ces trois verbes ont été soulignées uniquement par les apprenants de français de deuxième année, mais pas par tous les apprenants A1-A2 et pas à chaque apparition d'une même forme déjà précédemment soulignée.

Le verbe « être » à l'infinitif apparaît une fois et a été relevé par deux interrogés ; la forme au présent de l'indicatif « est » apparaît six fois et n'a été notée que vingt-quatre fois sur la totalité du texte ; la forme à l'imparfait de l'indicatif « était » apparaît une fois et a été soulignée par trois apprenants. Quant à la forme au participe passé « été », elle apparaît une fois et a été relevée par trois apprenants, mais accompagnée d'une mauvaise traduction. Les interrogés ont traduit le verbe « été » par son homonyme saisonnier « été », 「夏」 en japonais.

Le verbe « avoir » à l'infinitif apparaît une fois et a été relevé par quatre étudiants ; la forme au présent de l'indicatif « ai » apparaît également une fois et a été soulignée par la totalité des cinq interrogés de deuxième année ; la forme au présent de l'indicatif « a » apparaît cinq fois et n'a été relevée par les étudiants que cinq fois sur vingt-cinq en tout dans le document ; la forme au présent de l'indicatif « ont » apparaît une fois et n'a été notée qu'une seule fois par un apprenant ; la forme à l'imparfait de l'indicatif « avait » apparaît une fois et a été relevée par deux étudiants et la forme au participe passé « eu » n'a été soulignée qu'une fois également.

Le verbe « faire » apparaît à l'infinitif une fois et a été relevé par les cinq interrogés et sa forme au présent de l'indicatif « fait » apparaît une fois et a été soulignée seulement par quatre de ces étudiants.

Les traductions proposées par les apprenants sont soit l'équivalent anglais correspondant avec « be » pour « être », « have » pour « avoir » et « do » pour

« faire », soit un simple 「動詞」 signifiant « verbe » à côté du mot ou encore simplement le mot recopié, sans traduction proposée car le japonais ne permet pas toujours une traduction fidèle à la signification de ces trois verbes. C'est le cas uniquement pour le verbe « faire » qui a été traduit par un apprenant avec le mot japonais 「する」, le verbe correspondant au sens premier de « faire ».

Certaines méthodes d'apprentissage proposent ce lien entre l'anglais et le français sur les points de grammaire similaires comme les verbes « être » ou « avoir » qui sont associés respectivement aux verbes « be » et « have ». On peut y trouver un autre exemple similaire avec les pronoms personnels « je, tu, il, elle » qui sont mis en corrélation avec les pronoms anglais « I, you, he, she », déjà connus par les Japonais en apprentissage du français (Chujo, 2018 : 90-93).

3.4. La compréhension globale du texte

Pour chacune des quatre différentes catégories d'étudiants interrogés, nous avons calculé le taux de justesse dans la traduction des mots relevés :

- le groupe d'étudiants en allemand a traduit correctement 51 mots sur les 82 relevés, ce qui équivaut à 62% de bonnes traductions proposées, mais seulement 14% de compréhension globale du texte.
- le groupe d'étudiants en chinois a traduit correctement 50 mots sur les 61 relevés, avec un total de 82% de bonnes traductions proposées et également 14% de compréhension globale des mots du texte.
- le groupe d'étudiants débutants de français a traduit correctement 57 mots sur les 82 relevés, pour un score de 70% de bonnes traductions proposées, ce qui correspond à 16% de compréhension du texte.
- le groupe d'étudiants de deuxième année aux niveaux A1-A2 en français a traduit 304 mots correctement sur les 311 mots relevés et obtient un pourcentage de 98% de bonnes traductions proposées, ce qui équivaut à 87% de compréhension globale du texte.

Cependant, ce qui nous importe ici, au delà de la traduction littérale des mots français, c'est ce que les interrogés ont retenu de leur déchiffrement. Les étudiants qui ont lu le texte, souligné les mots qui leur semblaient connus, puis en ont proposé une traduction et ont ensuite proposé des résumés en japonais du texte dans son sens global. Nous allons vérifier ci-dessous ce qu'ils ont retenu ou déduit de leur lecture et de leurs traductions, malgré une absence totale d'étude de la langue française pour une grande partie d'entre eux.

Pour les interrogés en études d'allemand, le texte traite de « l'importance de comprendre la culture et les efforts nécessaires pour apprendre une langue étrangère », des « traditions japonaises, [des] kimono et [des] relations avec la France », de l'auteur qui « a ressenti les différences de culture et d'histoire à travers la barrière de la langue et a effleuré la culture et l'histoire japonaise en venant au Japon », ou encore des « différences culturelles et différences linguistiques. Le thème principal était le Japon, par exemple les traditions et les kimono ».

Les étudiants en début d'apprentissage du chinois ont noté avoir compris qu'il « est difficile d'apprendre une langue, [que] les mots nous protègent, [que] la culture nous offre des possibilités », que « les langues c'est difficile, la barrière de la langue est haute, c'est difficile », que le texte parle de « la difficulté des langues, [de] la culture traditionnelle japonaise » et que l'auteur « a eu l'occasion de porter un kimono pour une fête au Japon ».

Les étudiants débutants de français ont expliqué que « l'essai parle des langues, des différentes cultures, les connexions entre le monde », que « c'est difficile de comprendre les langues. Il y a la barrière de la langue, mais que l'auteur a pu découvrir de nouvelles cultures », que « c'est difficile de comprendre les langues », que le texte parle des « mots et [des] langues d'un point de vue culturel [et que] c'est plus difficile d'apprendre une langue ou une culture » et enfin qu'en « se basant sur son expérience personnelle, l'auteur du texte parle des différences culturelles entre la France et le Japon et de la difficulté des langues ».

Les apprenants de niveau A1-A2 ont résumé leur lecture du texte en évoquant « l'intérêt pour les langues, l'étude du Japon et de la linguistique, la recherche sur la langue et la culture, une occasion d'élargir son monde connu ! », un autre étudiant décrit que « le deuxième paragraphe parle du vécu de l'auteur et [que] le troisième paragraphe parle des recherches que l'auteur a faites sur la linguistique ». Un autre pose l'hypothèse selon laquelle « peut-être que c'était sur la culture française et japonaise, les langues et une comparaison sur l'utilisation des mots. L'auteur est intéressé par la culture japonaise (kimono) et le deuxième paragraphe était sur le vécu de l'auteur et ses réflexions », ou encore que le texte parle de « la compréhension des langues [qui] est difficile, [de] la barrière des langues, [et que] si on comprend une langue, le monde s'élargit ». Le cinquième étudiant explique qu'il a « compris que l'auteur avait écrit sur les kimono et sur l'importance d'apprendre une langue ».

Nous pouvons observer que les mots les plus retenus et les mieux traduits par l'ensemble des interrogés se retrouvent dans ces résumés, avec les concepts de langue, culture, différence, difficulté et de traditions japonaises avec l'exemple du kimono. Les étudiants ont compris que le texte portait sur la difficulté d'apprendre une langue à cause de la barrière linguistique et des différences culturelles, mais également l'importance d'apprendre des langues, tout en ayant compris que le texte parle plus particulièrement du Japon et de la France.

3.5. L'avis des interrogés sur l'exercice

L'exercice de lire un texte dans une langue étrangère est difficile pour un public qui d'autant plus, n'a jamais appris cette langue. Mais les étudiants se sont penchés avec amusement sur l'exercice proposé et une fois la tâche terminée, nous leur avons demandé d'écrire ce qu'ils avaient pensé de cette activité.

Les avis qui en sont ressortis sont partagés en deux catégories : les étudiants qui ont trouvé que l'expérience était amusante ou intéressante et ceux qui ont pensé que l'exercice de lire en français était difficile. Malgré cette difficulté, le fait que le travail

pour les non-apprenants ait été réalisé en groupe, l'aide des autres personnes, le fait de pouvoir discuter et partager ses idées, leur a permis d'identifier des mots et comprendre le sens global, ce qui était amusant.

La majorité des interrogés ont évoqué dans leur compte-rendu que le français ressemblait beaucoup à l'anglais, que les langues étaient différentes, mais qu'il y avait étrangement plusieurs mots similaires. Ils se questionnaient également pour savoir si ces mots semblables à l'anglais avaient bien le même sens dans cette langue nouvelle. Le sentiment de trouver, pendant sa lecture d'un texte de premier abord incompréhensible, un mot enfin connu était réjouissant. L'exercice semblait ardu au début de la tâche, mais le fait de rencontrer des mots familiers dans leur lecture a rendu l'activité amusante selon certains groupes. Cette sensation de réussir à lire et à comprendre quelques passages d'un texte en français, langue encore inconnue pour ces interrogés, a donné envie à quelques-uns de s'y intéresser.

Pour les élèves qui débutaient en langue française, cela les a confortés dans l'idée qu'il fallait continuer à étudier afin de comprendre plus de mots que les 23% de termes relevés par ces groupes débutants et les 16% de mots correctement compris, mais que cela leur donnait l'envie d'en apprendre davantage pour mieux comprendre le français.

4. Conclusion

L'exercice de déchiffrement d'un texte dans une langue inconnue est difficile et paraît même insurmontable à première vue. Néanmoins, les étudiants interrogés ont rapidement réussi à relever des mots qui leur semblaient connus par leur similarité orthographique avec l'anglais. Malgré la barrière de la langue, les non-apprenants de français sont parvenus à réaliser des ponts avec l'anglais : cette ressemblance d'un point de vue lexical et grammatical entre les deux langues française et anglaise est un atout bénéfique pour un apprentissage plus rapide, plus intuitif, plus amusant et surtout moins démoralisateur.

Il est important, en particulier en début d'apprentissage du français, de mettre l'accent sur les mots connus et compris par les nouveaux apprenants, plutôt que sur ce qui n'est pas encore acquis. Il faut malgré tout faire attention aux faux-amis, mais plutôt que de s'attarder sur ce qui diffère, il est plus intéressant de jouer sur la ressemblance avec d'autres langues connues, ici l'anglais, pour faciliter l'étude de la langue. Une étude similaire réalisée auprès d'apprenants de nationalités différentes et niveaux de français disparates, avait également constaté que l'anglais peut être utilisé comme langue d'appui dans l'apprentissage du français langue étrangère (Bailly et alii, 2009 : 56). Cependant les apprenants d'origine japonaise participants à l'enquête avaient répondu à la négative à la question posée, à savoir : « l'anglais vous aide-t-il pour apprendre le français ? ». Nous avons pu démontrer ici, que même des japonais n'ayant jamais appris la langue française étaient capables par le biais de l'anglais de comprendre dans les grandes lignes un texte entièrement rédigé en français.

Dans cette étude, nous remarquons bien une différence de compréhension entre les non-apprenants et les étudiants qui ont déjà une année de cours de français derrière eux. Ce qui a réellement causé ce grand écart entre les différents pourcentages de compréhension du texte par les étudiants interrogés, ce sont les petits mots grammaticaux et autres particules qui nécessitent d'être étudiés pour être compris. Il serait néanmoins intéressant d'observer les résultats obtenus sur une étude comprenant un plus grand nombre d'interrogés, ainsi qu'analyser le cas de Japonais n'ayant jamais appris le français, mais pour qui l'anglais est une langue déjà maîtrisée et acquise.

Pour conclure cette étude, nous pouvons observer que le concept de déchiffrer des langues étrangères est un exercice amusant lorsqu'il est fait dans un cadre léger sous forme de jeu. L'apprentissage d'une langue n'a pas à être fait uniquement par du bachotage et du par-cœur, mais peut être réalisé de manière plus légère tout en stimulant l'intérêt des apprenants par des concepts déjà connus.

Bibliographie :

CHUJO, S. (2018), *世界一簡単なフランス語の本*, Gentosha.

BAILLY, S., BOULTON, A., CHATEAU, A., DUDA, R., TYNE, H. (2009), *L'anglais langue d'appui pour l'apprentissage du français langue étrangère. L'anglais et le Plurilinguisme : Pour une Didactique des Contacts et des Passerelles Linguistiques.*, G. Forlot. L'Harmattan, p.35-57.

HISAMATSU, K. (2017), *これは似ている！英仏基本構文*, Surugadai.

HISAMATSU, K. (2022), *英単語をフランス語単語へ橋渡しする*, Goken.

FUJITA, Y., SEITO, T. (2013), *Apprenons le français et l'anglais. 英語もフランス語も比較で学ぶ会話と文法*, Hyoronsha.

LEPELTIER, C. (2023), College of Law, Nihon University, *テキストブック 自主創造の基礎*, Keisoshobo, p.213.

保健室登校の高校生の時間的展望の特徴

—— 心理的時間と精神的健康 ——

和田 万 紀

はじめに

日本の保健室登校の高校生の精神的健康支援が、喫緊の課題と指摘されている（文部科学省，2023）。本論では，保健室登校の高校生を対象として，その時間的展望の特徴を明らかにして，その特徴から保健室登校の高校生の心理的時間と精神的健康に関する考察を試みることを目的とする。

その際に時間的展望の測定には，過去，現在，未来を表す3つの円を描画することで時間的展望を表現して評価するサークル・テスト（Cottle, 1967）を行う。そしてサークル・テストの評価に際して，描かれた3つの円の面積，周長，位置などの定量的解析を行い，検討することとする。

時間的展望とその測定

第1節 時間的展望とは

心理的な時間の概念や定義は多岐にわたる。特に「時間」を対象とする研究においては，必ずしも同一の対象として時間研究がなされているとは言えない現状があり，松田・調枝（1996）は，心理的時間には多様性と複雑性が存在することを指摘している。その中で，心理的時間の複雑性を示す時間的展望がある。時間的展望（time perspective）とは，ある一定の時点における個人の心理

学的過去及び未来についての見解の総体（クルト・レヴィン著，1942 末永（訳）1966, p.134-164.; 1943 猪俣（訳）1979, p.65-66.）と定義される。

また時間的展望は，主観的に捉えられた過去，現在，未来という時間の流れを意識することで構築される一方で，過去，現在，未来を区切り，現在との関連でそれらの時間を位置づけることによっても構築される。この点について白井（1996, p.384-386）は，時間的展望においては，時間が過去から現在，未来という特定の3つの時間として特定方向へ流れる一方で，それらの3つの時間の関連性が時間的展望に示されるという。そして白井（1996）は，それが時間的展望の複雑性となり，しかし同時に，この様に時間を意識することが自己の存在を意識することにつながる，と指摘している。

時間的展望は，その構造や内容の特徴を示す認知的側面だけではなく，個人の感情や動機づけ，行動などにも影響する機能的な側面も含んでいる（白井，1995）。例えば勝俣（1995）は，時間的展望における機能的側面について，自己に対する過去へのフィードバックシステムと未来へのフィードフォワードシステムを持つことを指摘した。機能的側面のこの2つのシステムは，相補的關係にあり（勝俣，1995, p.311），フィードバックは過去展望へ，フィードフォワードは未来展望へ適用されて，両機能ともにそれぞれ自己に対して肯定的及び否定的な両方の影響を与えることが指摘されている（勝俣，1995）。さらに，時間的展望の主に機能的側面は，そのフィードバックシステムによって，個人の適応的行動にまで影響することを示している（勝俣，1995, p.315）。

千島（2021）は時間的展望を，感情や動機づけを通して行動に影響する機能を持つ心理的特性の1つとしている。小塩（2021）は，その心理的特性が「良い結果」をもたらすことと，変容可能性を備えていることを指摘した（小塩，2021, p.253）。小塩（2021）は，心理的特性の1つとしての時間的展望を非認知能力の1つと位置づけている。非認知能力とは，「何かの課題に対して懸命に取り組み，限られた時間の中でできるだけ多く，より複雑に，より正確に物事を処理することができる」といった心理的な機能ではないもの，または思考や感情や行動について個人が持つパターンのようなもの」（p.2, l. 9-12.）と定義した。

そして小塩（2021）は、このような非認知能力は、「「良い結果（学力や健康、幸福、社会的活動など）」へとつながる心理特性であること、教育や訓練によって伸ばすことができる心理特性であること」（p.9, 14-6.）という条件を満たすことが重要であるという¹。時間的展望を「良い結果をもたらして変容可能な心理的特性」（千島，2021）として非認知能力の1つと位置付けるならば、前述した時間的展望の認知的側面と機能的側面とを合わせて、時間的展望を通して精神的健康と適応的行動を導く可能性を示唆することになる（和田，2019, p.18）。

第2節 時間的展望の測定 ―サークル・テスト（Cottle, 1967）を中心に―

時間的展望の測定方法には、時間的展望の定義や焦点を当てる側面によって

1 高等学校学習指導要領（平成30年告示），第1章総則より「育成を目指す資質・能力（第1定款3）」に以下の点が示されている。

① 高等学校教育の基本と教育課程の役割（第1章総則第1款）

従前、「教育課程編成の一般方針」として規定していた内容を再整理し、教育課程編成の原則（第1章総則第1款1）を示すとともに、生徒に生きる力（確かな学力、豊かな心、健やかな体）を育む各学校の特色ある教育活動の展開（第1章総則第1款2）、育成を目指す資質・能力（第1章総則第1款3）、就業やボランティアに関わる体験的な学習の指導（第1章総則第1款4）、カリキュラム・マネジメントの充実（第1章総則第1款5）について示している。

そして、「育成を示す資質・能力（第1章総則第1款3）」には、

3 豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体及び各教科・科目等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。その際、生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

(1) 知識及び技能が習得されるようにすること。

(2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。

(3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

(https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf 2024年8月12日閲覧)

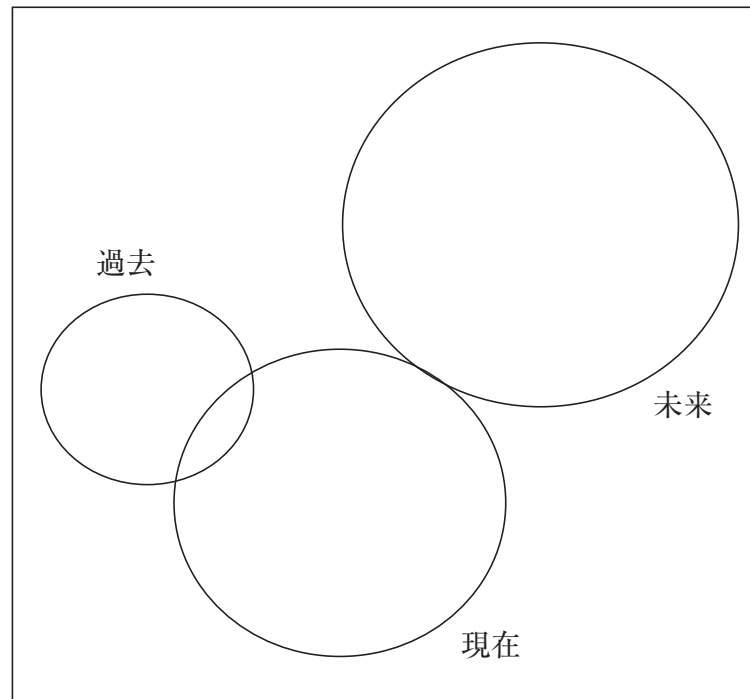
と記述されている。この中でも特に「(3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること」に「非認知能力」が相当して、その教育的な支援の指標の1つに時間的展望を定めることができると小塩（2021）は主張している。

多くの尺度が開発されて使用されている（例，都築，1982：千島，2021：Mohammed & Marhefka, 2020）。例えば，時間的態度に焦点をあてた白井（1994）の時間的展望体験尺度がある。白井（1994, 1996）によると，時間的態度とは時間的展望の中に含まれる概念の1つであり，「過去・現在・未来に対する感情的評価，あるいは，将来または過去の事象に対する肯定的あるいは否定的評価の総体」としている。白井（1994）のこの尺度は，過去受容，現在の充実感，希望，目標指向性，の4つの下位尺度から構成され，合計18項目の質問項目から構成されている。一方，日本語による質問から構成される尺度であるため，言語や社会，文化の多様性の中での実施は難しくなる。

時間的展望の測定で言語を使用しない投影的方法として，Cottle（1967）はライン・テスト²やサークル・テストを提案している。その中でサークル・テストは，個人の主観的な時間が過去，現在，未来をそれぞれ表す3つの円で描画できると仮定して，白紙にこの3つの時間を表す3つの円を自由に描くものである（Fig.1）。その評価は，3つの時間を示す3つの円の視覚的な特徴を指標として行う。例えば，3つの時間を表す3つの円の大きさやそれぞれの円の重なり等が指標となる。この様な3つの円の視覚的特徴を指標とする評価は，過去，現在，未来という時間を区切られた時間として個別に評価するだけではなく，3つの時間を包括的に捉えて，その関係性から時間的展望の特徴を評価することになる。

2 ライン・テストは，限定された長さの直線上に，自分の誕生・過去と現在の境界・現在と未来の境界・自分の死，の出来事について，各時間の重みづけを時間の区切りの間隔として相対的に示すものである。言語を使用しない投影的方法となる。

Fig.1 サークル・テストの例（著者作成）



3つの円の大きさや重なり等を指標にして評価する。なお本研究では円の面積，周長，中心点座標，中心点間距離を計算して評価する。

そして評価には，描かれた3つの円の中で最も大きい円を示す時間から，時間的優位性（Temporal Dominance）を，各円の重なりの有無や重なる時間から，時間的関連性（Time Relatedness）を，円の大きさの順番が時間の重要性を示す時間的发展性（Temporal Development）^{3 4}等から，各自の時間的展望の特徴を数値化する。この様な言語を使用せず投影的方法によって時間的展望を評価することで，多様性のある対象について時間的展望の測定を可能にする利点を持つ

3 過去，現在，未来の重要性についての順序づけられた方向性を示しており，価値観に基づくものである（白井，1996, p.389）。

白井利明（1996）．第7章 第1節 時間的展望とは何か 松田文子・調枝考治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編 心理的时间 北大路書房，p.377-442.

4 白井（1995）．では，時間的指向性（time orientation）と示されており，時間的展望，時間的態度から区別される，と述べている（p.199）。

白井利明（1995）．時間的展望と動機づけ ―未来が行動を動機づけるのか― 心理学評論 38, 2, p.194-213.

ことになる（例，Wada, 2021）。

園田（2011）は，このサークル・テストを基本にして，過去，現在，未来の各時間と自己概念との関係を言語で記述して，それらの関係を明確化するという展望地図法を開発した。それは，サークル・テストで示される過去，現在，未来の各時間に関連づけて自己概念を記述し，3つの時間と自己概念がどのように関連付けられるのかを図示して明らかにするものである⁵。この展望地図法は，自己概念の中での時間のまとまりを1つの「概念」と定義して，自己概念のなかの時間のまとまりを「概念地図」として視覚的に表すことになる。

園田（2011）は，「自己と時間の概念地図」を描くことが，「過去，現在，未来の時間に関わる自己を物語る取り組みとなり，自己再構成にもつながる」（p.23）という。この様に展望地図法を実施すること自体が，その過程において「自己と時間との関係を意識化させる」ことになる。そしてその意識化によって，時間的展望の過去展望へのフィードバック機能と同時に未来展望へのフィードフォワード機能が働き，「自己再構成」として自己変容⁶をも可能にすることが示される。

第3節 サークル・テストの定量的解析

サークル・テストの視覚的特徴の指標から時間的展望の特徴を評価することに加えて，Shigemune et al., (2021) は，サークル・テストに描かれた3つの円の面積について画像解析を行い，脳腫瘍の患者と健康な大人の時間的展望の

5 園田（2011, p.22）によると，まず「自己概念に関する命題」を過去，現在，未来の3時間で表現することが求められる。その手続きは，自己概念を直接表現する方法の1つである「20答法」を応用したものである。つまり，「過去の私は」「現在の私は」「（現在からみた）未来の私は」のそれぞれから始まる文章を，自分を表現する単語や短文を記述して完成させる。そしてその完成した「自己概念」に関する文章を，3つの各時間の「自己概念に関する命題」とする。次にそれらの文章を，各文章同士が有意味な関係を持つように空間的に配列して図示し，そのつながりや関係について記述する。

6 「命題としての自己概念」以外に「主体としての自己」及び「対象としての自己」も含むものとする。

特徴を検討すると同時に、時間的展望を介した精神的健康の支援策を明らかにしている。

まず、脳腫瘍で鬱状態または鬱ではない状態の患者の手術の前後と、健康で鬱ではない大人の参加者に対して、サークル・テストを実施して、従来の知覚的特徴を指標とする時間的展望の特徴を評価した。サークル・テストの結果は、描かれた3つの円についての時間的優位性と時間的関連性の指標から、過去、現在、未来の3つの時間の視覚的特徴が、脳腫瘍鬱群、脳腫瘍非鬱群、健康な参加者群、及び、脳腫瘍群の手術前後という条件間で比較された。なお健康な参加者は、脳腫瘍鬱群と脳腫瘍非鬱群の手術前後と同時期にサークル・テストを2回行った。その結果、従来の視覚的特徴の時間的優位性と時間的関連性には、群間での統計学的有意差は認められなかった。

次に Shigemune et al., (2021) は、サークル・テストの3つの円について、生物画像解析に使用される画像解析ソフト ImageJ（三浦・塚田, 2016）を用いて、円の面積等の画像解析を行った。そして3つの円のそれぞれの面積、3つの円の面積全体に対する各円の面積との比率等を求めた。その結果、3つの円の各面積の差に、過去、現在、未来という3つの時間、鬱群、非鬱群、健康な参加者、及び手術前後、の各要因について統計学的に有意な主効果が認められた。鬱群は非鬱群よりも3円の全体の面積が小さく、過去の円の面積が現在と未来の円の面積よりも大きく、手術前の面積全体は手術後の面積全体よりも小さかった。また過去と未来の面積の比率は、鬱群が非鬱群よりも過去の比率が大きいことが明らかになった。

Shigemune et.al., (2021) は、サークル・テストの従来の視覚的特徴の指標以外に、3つの円の面積を指標として時間的展望を検討することで、次の点を明らかにした。

第1に、脳腫瘍で鬱状態を改善するために、時間的展望の未来展望を肯定的に促すための支援が有効である。これは、時間的展望の機能のフィードフォワード機能を利用して未来展望をより肯定的に捉えられるような支援が、精神的健康の促進に寄与することを示している。

第2は、サークル・テストの3つの円の面積の画像解析⁷によって、従来の視覚的特徴の指標による評価だけでは認められなかった新たな知見が明らかにされたことである。つまりサークル・テストの3つの円に関する定量的分析の有効性が示された。

保健室登校の高校生の時間的展望と精神的健康

第1節 高校生活への適応促進要因

和田・小野村・須永 (2023), 小野村・須永・和田 (2024) は、新高校1年生を対象にして、時間的展望と精神的健康との関係について、登校回避感情 (鈴木, 2017) や自尊感情, 心身のストレス反応等の要因間の関係性について検討した。

高校入学時には、中学生の時には未来である高校生としての自分が現在に、中学生としての自分が過去になることで、時間的展望の再構築が必要とされる (都筑, 2009)。そこで和田・小野村・須永 (2023) と小野村・須永・和田 (2024) は、まず高校新1年生について、中学の登校傾向の差が高校生活への適応要因に与える影響を検討した。その結果、中学での登校に困難が無い群では、現在展望と感情ストレス反応が登校回避感情に直接影響した。中学では困難なく登校可能でも、高校入学時に現在展望が否定的で感情ストレス反応が高いと、登校回避感情が高まり、高校への適応困難が予想される。一方、高校入学時の現在展望は、肯定的過去展望が自尊感情を介することで現在展望に影響し、否定的過去展望が感情ストレス反応を介して現在展望に影響していた。過去をより肯定的に受け入れることが自尊感情を高揚させ、現在展望を肯定的にできるこ

7 Yabe and Yamada (2023) は、過去、現在、未来の3つの時間を3次元空間上に球体で表現して、その画像解析を行い時間的展望について考察している。

Yabe, Y. and Yamada, S. (2023). A pilot study of how the past, present, and future are represented in three – dimensional space. *Frontiers in Psychology*, Volume 14 – 2023. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2023.1071917>

とになり、過去を否定的に展望すると感情ストレスの高まりから現在展望が否定的になることが示された。学校移行期に新たな時間的展望の構築が求められる時、過去を肯定的に捉えるか否定的に捉えるかが、自尊感情や感情ストレス反応を介して、現在展望に影響して、その結果形成される現在展望が否定的であるほど、登校回避感情が高まることが示された。高校生活を始める際の新たな時間的展望の構築には、過去を肯定的に捉えるか否定的に捉えるかという過去展望が、高校生活への適応に影響することを明らかにした。

伊藤（2013）は、高校生を対象にして、中学で不登校を経験したことを肯定的に捉える群、否定的に捉える群、どちらでもない群、不登校経験のない群間で、時間的展望、自尊感情、中学の学校適応等を比較している。その結果、高校生となった現在、中学での不登校を肯定的に捉えたと、つまり肯定的過去展望を持つと、現在の自尊感情が高く、将来への自信を持ち、肯定的現在展望から肯定的未来展望を形成できることを示している。そして時間的展望の構築には、過去を肯定的に捉えられるか否かは重要であり、肯定的過去展望が現在の自尊感情を高めて、過去の不登校を肯定的に捉えなおす傾向が強くなるというスパイラルな関係を明らかにした（伊藤，2013, p.27）。

山本（2008）は、高校生の不登校の経過、回復過程の事例について、時間的展望の変化から検討している。そしてその回復過程では次の様な時間的展望の変化が起きるという。それは、「今日登校できるかどうかということが全てとならざるをえない否定的な現在指向、不登校を避けることができない、または改善の機会を逃してしまったことの後悔が生じる否定的過去指向、未来への不安とそれに対処ができない否定的な未来指向、過去や未来を自身で扱える単位に置き換えて各時間の関連性を意識して課題解決に取り組もうとする肯定的な現在指向と肯定的な未来指向を回復する時期」（山本，2008, p.300）を経るという。

さらに不登校からの回復過程での時間的展望の転換時には、「過去や未来への展望が広がることで、逆に葛藤が生じること、その葛藤の克服と自分を取り巻く環境や課題を直視すること、そしてそれを支援する家族や援助者の支援が、時間的展望の変化の契機となること」（山本，2008, p.300）を指摘している。和

田・小野村・須永（2023）や小野村・須永・和田（2024）が指摘する様に，高校入学という学校移行期に時間的展望の再構築が求められる時に，山本（2008）の指摘する様に，過去や未来への展望の拡がり，振り返り，見通しをすることが，逆に葛藤を生じさせて，それが不適応を生じさせることが示唆される。

第2節 保健室登校の高校生の時間的展望

小野村・須永・和田（2024）は，高校での教室登校群の中で中学の登校傾向の差による2群と，高校での保健室登校の1群とについて，時間的展望，自尊感情，登校回避感情，ストレス反応等の差を検討した。なお時間的展望は否定的過去展望，肯定的過去展望，現在展望，未来展望について，質問紙による回答から評価している。その結果，高校の保健室登校群は，現在展望が他の群よりも否定的であった。しかし過去展望と未来展望は，他の群との差はなかった。高校の保健室登校群が，過去展望と未来展望において，高校での教室登校群との間に差が認められないことは重要である。

サークル・テストの定量的解析による時間的展望の検討

第1節 目的

保健室登校の高校生の時間的展望の特徴について，サークル・テストを行い，描かれた3つの円の画像分析による定量的な検討を行う。

和田・小野村・須永（2024）は，保健室登校と教室登校の高校生の時間的展望を，サークル・テストの従来の指標である視覚的特徴を指標として検討した。その結果，保健室登校群は，過去，現在，未来を表す3つの円の視覚的特徴として，3つの時間を示す3つの円をそれぞれ個別に，またいずれも交わりが無く描いた。しかし教室登校群は，3つの円のいずれかに交差を描いた。つまり保健室登校群は，過去，現在，未来の間に時間的な関連性が円の描き方には示されず，教室登校群は円の描き方において関連性が示された。

また時間的優位性については、保健室登校群と教室登校群との差がなく、両群共に各群の半数が未来を最大円として描くことが示された。保健室登校群は、時間的優位性には教室登校群と差が無いが、過去現在未来の3時間の時間的関連性が認められず、各時間を切り離してとらえていることが特徴であることを明らかにした。

この結果を小野村・須永・和田（2024）の結果と総合すると、保健室登校群の時間的展望は、過去、現在、未来を関連づけながら統合せず、それぞれの時間を単独に捉えており、否定的な現在展望の中にある、といえよう。

そこで、保健室登校群と教室登校群のサークル・テストに描かれた3つの円について、面積や周長等の画像解析を行い、保健室登校群の時間的展望の特徴をさらに検討する。

第2節 方法

調査対象と倫理審査

2022年4月から12月にX 高等学校保健室登校群8名と教室登校群25名を対象に調査を行った。日本大学大学院総合社会情報研究科倫理委員会（承認番号HP21S008）、また高等学校、教育委員会の承諾を得た。さらに保護者と本人の両方の承諾書を得た場合のみを、分析対象とした。

手続き

縦横各16cmの枠組みが描かれたA4版白紙を各自に配布して、自分自身の過去、現在、未来を表す3つの円を枠組みの中に自由に描くように教示した（Fig.1参照）。枠組みの正面左上を原点にして、直交する横軸と縦軸を設定した。横軸は、原点から右方向に正の目盛り（cm）を、また縦軸は、原点から下方向に正の目盛り（cm）を設定した。なおこの2軸の目盛りは、調査の際には描かれていない用紙を配布して、記述を求めた。そして描かれた3つの各円について、この枠組みの中での縦横の位置から、各円について中心点座標、面積、周長をImageJで計算した（National institutes of health, Bethesda, MD, USA; <https://>

imagej.nih.gov/ij/: 三浦・塚田, 2016)⁸。統計解析には、SAS 9.4と R2.2を使用した。

第3節 結果と考察

Table 1に、サークル・テストの3つの円についての画像解析の結果、円の面積、円の中心点座標、周長の平均値と標準偏差を示した。そして各円の面積、各円の中心点座標、周長について、保健室登校群と教室登校群との間での t 検定を行った。しかしいずれの指標も、両群間に有意差はなかった。なお、現在を示す円の縦軸中心座標に、両群間の傾向差が見られた。

次に3つの円の面積比について、Table 2に、サークル・テストで円の重なりが描かれた教室登校群のみの重なりの面積、中心座標、周長の平均値と標準偏差を示す。なお保健室登校群は、過去と現在の重なりを描いた1名を除いて、3つの円のそれぞれの重なりを描いた人数は0人であった。従って各円の重なりの面積の平均値と標準偏差は0となり、変動は無い。

次に、Table 3に、保健室登校群と教室登校群について、3つの円全体の面積に対する各円の面積の比率と、各時間同士の円の面積の比率の平均値と標準偏差を示した。教室登校群の円の面積の比率の平均値と標準偏差が大きいため、中央値に対してマン・ホイットニーの U 検定を行った。その結果、いずれの面積比においても、両群間に有意差はなかった。

また両群間での円の書き方の差を検討するために、各時間における円の面積の分散にレビン検定を行った。しかし両群間に各円の面積の分散の有意差はなかった（過去 $F=.339$, $p=.565$: 現在 $F=.252$, $p=.619$: 未来 $F=1.470$, $p=.235$ ）。

Table 4に、保健室登校群と教室登校群の3円の中心点間距離の平均値、標準偏差、 t 検定の結果を示す。過去と現在の円の中心点間距離に、両群間に有意差が認められた。保健室登校群は教室登校群よりも、過去と現在の円をより離して描いた。

8 サークル・テストの画像解析に際して、濱田淳子氏の協力を得ました。ここに記して感謝いたします。

Table 1 3円の面積 (cm²), 横・縦中心座標 (cm), 周長の平均値, 標準偏差, *t*検定

		過 去			現 在			未 来					
		面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長
保健室登校群 8 名	<i>M</i>	1283	4.34	7.26	11.78	13.56	7.72	8.65	12.56	22.43	9.62	7.44	15.07
	<i>SD</i>	14.08	1.77	3.46	7.91	12.73	2.21	1.86	6.75	23.22	2.46	3.26	11.00
教室登校群 25名	<i>M</i>	17.17	4.77	6.53	13.24	17.63	7.02	6.96	14.00	39.96	9.66	7.19	19.24
	<i>SD</i>	22.46	2.10	3.01	8.87	18.02	2.52	2.27	7.56	58.45	2.28	1.83	14.46
<i>t</i> 値 (<i>df</i> =31)		-.51	-.52	.58	-.42	-.59	.71	1.91	-.48	-.82	-.05	.28	-.75
<i>p</i> 値		.612	.610	.567	.680	.559	.486	.065	.635	.418	.963	.785	.461
効果量 <i>d</i>		-.21	-.21	.24	-.17	-.24	.29	.78	-.20	-.33	-.02	.11	-.30

Table 2 教室登校群の3円の重なりの面積, 中心座標, 周長の平均値と標準偏差

		過去現在の重なり			過去未来の重なり			現在未来の重なり			過去現在未来の重なり		
		面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長	面積	横中心	縦中心	周長
教室登校群 25名	<i>M</i>	2.98	3.94	4.21	4.41	2.15	2.52	2.17	2.28	1.09	5.58	4.72	3.38
	<i>SD</i>	7.51	3.58	3.64	5.30	8.64	4.01	3.31	5.68	1.39	4.20	3.51	3.08

(注) 中心座標は直交座標の原点からの距離 (cm) 面積 (cm²)

Table 3 円の面積比の中央値とマン・ホイットニーの検定

		円の合計面積に対する各円の面積の比率				2つの円の面積の比率			
		過去 / 合計	現在 / 合計	未来 / 合計	過去 / 現在	過去 / 未来	現在 / 未来	過去 / 現在	過去 / 未来
保健室登校群 8 名		.305	.283	.319	1.405	1.275	1.470	1.275	1.470
教室登校群25名		.158	.292	.369	.630	.930	1.910	.930	1.910
<i>U</i>		113.000	102.000	88.000	111.000	106.000	85.000	106.000	85.000
<i>P</i> 値		.606	.951	.636	.659	.817	.542	.817	.542

Table 4 各円の中心点座標間の距離 (cm) の平均値, 標準偏差, t 検定

	過去と現在		過去と未来		現在と未来	
	M	SD	M	SD	M	SD
保健室登校群 8 名	5.360	1.967	8.288	1.589	5.225	2.196
教室登校群 25 名	3.209	2.178	6.253	3.693	4.232	2.791
t 値 ($df=31$)	2.483		1.502		0.916	
p 値	0.019		0.143		0.367	
効果量 d	1.008		0.610		0.372	

以上の結果より, 保健室登校群と教室登校群とは, 過去現在未来を表す 3 つの円の面積や, 円の中心座標, 周長に, 有意差は認められなかった。また 3 つの円の面積全体に対する各時間を表す円の面積の比率, さらに各時間同士の円の面積間の比率に, 両群間の有意差は認められなかった。また保健室登校群は, 3 つの時間を表す円にいずれも重なりを描かず, 単独で 3 円を描き, 時間の関連性を示す円の交差をどの関係においても描いていなかった。

しかし, 過去と現在の円の中心点間距離に両群間の有意差が認められた。保健室登校群は教室登校群よりも, 過去と現在の円を離して描いたことが明らかになった。

以上より, 3 つの円が示す過去現在未来の描き方については, 円の面積や中心点座標, 周長には, 保健室登校群と教室登校群に有意差は無かった。また保健室登校群は 3 つの円を単独に描き, 交差も描かなかったが, 教室登校群は交差を描いていた。

過去現在未来の 3 つの時間を表す 3 円が分離して描かれるよりも, 円の重なりや接点が描かれる場合は, 時間の統合度や関連性が高いことが示されている(例, 日潟, 2008; 白井, 1996)。本結果も, 保健室登校群は教室登校群と比べると, 各時間が独立して描かれており, 時間的関連性や統合性が見られないことが支持された。さらに, 過去と現在の円の中心点間距離において, 保健室登校群の方が教室登校群よりも, 2 つの円をより離して描いており, 時間的展望について過去と現在を関連させずに, 距離を離して位置づけていることが明らか

にされた。

サークル・テストの3つの円の画像解析の結果から、保健室登校と教室登校の高校生の時間的展望の特徴が認められた。保健室登校群と教室登校群は、円の面積や周長、円の面積比などに有意差がみられなかったことから、これらの指標を基にすると、3円が表す過去現在未来の描き方は同じであることが示された。小野村・須永・和田（2024）も保健室登校群と教室登校群は、過去展望と未来展望に差がみられないことを示しており、本結果を一部支持している。

また保健室登校群は教室登校群とは異なり、時間的展望の3つの時間を独立して描き、時間の統合の不十分さを示唆している。しかし、保健室登校群が過去と現在をより離して描いたことは、過去を受け入れたと解釈するのか、それとも過去を受け入れるかどうかとは無関係に、過去を現在と切り離してとらえようとしているのか。

例えば樹木画テストの1つのバウムテスト（コッホ K. 1957：岸本・中島・宮崎 訳, 2010）は、白紙に1本の実のなる木を自由に描く、というサークル・テストと同様の投影法の心理テストの1種類である。そして、描かれた木の形やその位置などについて分析をして評価する。最近、この描画テストの1つであるバウムテストの分析に、描かれた木の画像解析を行い、その分析結果に対する臨床心理学的解釈も試みられている（高崎・竹村・岩満, 2005：岩満他, 2013：川杉他, 2020）。

確かにサークル・テストに描かれた3つの時間を示す3つの円の画像解析から、保健室登校の高校生の時間的展望の特徴について、本研究結果から新たな知見が得られた。しかし、サークル・テストの定量的解析の結果の解釈には、時間的展望についての他の測定結果も加えて、本研究結果の考察が必要である。

総合考察

第1節 過去と未来を通して見る現在

石川（2017）は、過去のとらえ方を重視した時間的展望の構築の重要性を指

摘した。そして、大学生を対象として時間的展望と精神的回復力との関係を明らかにしている。精神的回復力については、「困難状況において苦痛に感じながらも、その後の適応的な回復を導く心理的な特性および能力」（小塩・中谷・金子，2002）と定義され、「肯定的な未来指向，新奇性の追求，感情調整の3要因から構成される」という。

石川（2017）は、過去を連続的にとらえて、過去へ受容的態度であると、新奇性追求と正の相関が認められた。また感情調整は、過去を割り切り、現在と連続的であると考ええると正の相関が認められ、肯定的に未来へ指向することとの正の相関が見られた。しかし、過去に否定的な態度の時には、感情調整との負の相関が認められた。つまり、過去を割り切り、過去を否定しないで受容的態度をとることで、過去，現在，未来を連続して捉えて、精神的回復力を増しながら肯定的な未来指向が可能となることが示された。しかし、石川（2017）は、過去のとらえ方と肯定的に未来への指向ができることの因果関係については、明らかにしていない。

もちろん未来に価値を置いて肯定的な未来展望を形成できるならば、希望や自己効力感，自尊感情も高まり，精神的健康も高くなることが予想される。山本（2008）や伊藤（2013）の結果も，不登校の生徒の回復過程において未来展望がより肯定的になることを示している。不登校と保健室登校の高校生の時間的展望について，本研究結果だけでは，直接比較することはできないが，不登校と保健室登校の間では，時間的展望の特徴が異なることが示唆される。

さらに和田（2019）が指摘するように，未来に価値を置き，未来を志向して，肯定的な未来展望であったとしても，必ずしも精神的健康を促進するとは限らない。

日潟・齋藤（2007）は，高校生では未来にのみ肯定的な態度を示すと精神的健康度が低いことを指摘している。また日潟（2008）によると，高校生はサークル・テストに描かれた未来優位性が必ずしも精神的健康とは関連していなかった。

本研究結果からは，保健室登校群が過去，現在，未来を単独にとらえており，

過去と現在を離して位置付けていること、面積や周長、中心点の座標軸の位置を指標とした分析からは、保健室登校群も教室登校群も差がみられないことが明らかになった。しかし本研究結果のサークル・テストの定量的解析結果から明らかにされたことと、従来の評価指標からの解釈との関連性については、今後の課題となる。

さらに和田・小野村・須永（2023）や小野村・須永・和田（2024）が示すように、自尊感情やストレス反応等の精神的健康に関連する要因と、時間的展望との関係を加えて、本研究結果に表れる保健室登校群の時間的展望の特徴を検討する必要がある。

第2節 保健室登校の高校生への支援

小野村・須永・和田（2024）は、高校での保健室登校群は、中学で登校に困難が無かった高校生群と比べると、身体と感情にストレス反応がより高く、また承認欲求や登校回避感情がより高いことを明らかにした。特に承認欲求は、対人関係に関するスキルと負の関係が示されている。つまり承認欲求が高いにもかかわらず、対人スキルが低いために、承認欲求を満たすだけの対人スキルをもって対人関係を構築することができていないことが示唆されたのである。

山本（2008）や和田・小野村・須永（2023）、小野村・須永・和田（2024）は、親が自分をどれ程理解してくれているかという認知が、過去展望と現在展望へ直接影響しており、また自尊感情へも影響することを示した。さらに和田・小野村・須永（2023）、小野村・須永・和田（2024）によると、対人スキルと承認欲求がそれぞれ親の理解認知と正の相関関係が有り、親の理解が少ないという認知が直接的に本人の身体的ストレス反応を高めることが示された。

和田（2019）は、時間的展望と精神的健康を考える視点として、他者の存在の重要性を指摘している。白井（2008）は、「他者とのかかわりにより、過去が過去化され未来が立ち上がる。過去と未来に向き合うことで生きられる現在が作られる。他者との一体感が時間を止めるが、そこで育まれる安心感に支えられることにより未来に向かい過去を過去化して時間が流れる」（p.69）という。

親のサポート要因を加えて、時間的展望を通した精神的健康への支援は、学校適応という視点からも今後の課題となる（大対・大竹・松見，2007；渡邊，2020）。

保健室登校は、教室で授業を受けたり活動をすることには困難が有るが、学校という場所に居ることは可能であり、その点が不登校とは大きく異なる。和田（2019）は、「時空間の場の変化に応じながら、変化と安定のゆらぎの中にある自己の有り様こそが現在を拓けることに繋がり、その揺らぎの中で変化する過程にこそ時間的展望と精神的健康を考える必要が出現するのであろう」（p.16）と述べている。保健室登校の生徒は、学校という場所の中での「保健室」という時空間に自分を置くことで、まさに自己と時間の「揺らぎ」の中にいるのではないか。そして山本（2008）が指摘する様に、その「揺らぎ」の中で「時間の葛藤」が生じて、その葛藤の解決から安定へと向かう過程に保健室という時間と空間を必要としているのではないか。

保健室には、「学校」に流れる時間とは異なる時間が存在する。その異次元の時間と空間の中で、保健室登校の高校生は、過去を過去として独立させて、現在と過去との距離を置き、未来を見ようとしているのではないか。しかしその時間的展望の意識化が、逆に時間の葛藤を生じさせているのではないか。未来に逃避するのではなく、過去と未来を通して現在を展望することで、現在の拓がりも得られるのではないだろうか。

第3節 本研究の限界と今後の課題

本研究は、調査対象を、「（現在、）保健室登校の高校生」と「（現在、）教室登校の高校生」として、その時間的展望の特徴を比較しながら、時間的展望の認知的側面と機能的側面の両側面に焦点をあてて、精神的健康の支援や促進を検討した。

対象となった生徒の中には、過去に保健室登校や不登校を経験した生徒や、将来多様な登校が必要となる生徒も存在するだろうが、今回は調査をしていない。また、比較検討する登校の状況として、上記2つの登校の状況以外に、不登校の検討が考えられる。しかし本研究では調査対象としておらず、直接に比

較考察することができなかった。

さらに本研究では、時間的展望を1回の時点ではしか調査しておらず、個人の登校の状況の変化と時間的展望の変化を検討することができてはいない。

すでに保坂（2002）も指摘するように、登校の状況は多様であり、個人の登校の状況も変化する可能性がある。すると、本研究で検討した2つの登校の状況、つまり保健室登校と教室登校の比較だけではなく、多様な状況の中での時間的展望の特徴とその比較が必要となる。さらに、佐藤他（2023）が明らかにしたように、生徒個人の登校の状況の多様性とその変化に応じた精神的健康の促進と支援が必要となる。

本研究のこのような限界について、登校の状況そのものの多様性の中での時間的展望の特徴の抽出とその比較、さらに生徒個人の登校状況の変化に応じながら、時間的展望を通じた精神的健康の促進と支援の検討が、今後の課題となる。

引用文献

- 千島雄太（2021）. 時間的展望 小塩真司（編）非認知能力（p.115-132）北大路書房
- コッホ, K. (1957). バウムテスト：心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究
カール・コッホ著；岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳 2010, 誠信書房
- Cottle, J. (1967). The Circles Test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 31 (5), 58-71. <https://doi.org/10.1080/0091651X.1967.10120417> 2024年8月11日参照
- 日潟淳子・齋藤誠一（2007）. 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, 2, p.109-119. <https://doi.org/10.11201/jjdp.18.109>
- 日潟淳子（2008）. 高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討—時間的態度代精神的健康との関連から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, 2, p.11-16. <https://doi.org/10.24546/80060019>
- 保坂亨（2020）. 不登校をめぐる歴史・現状・課題 教育心理学年報, 41, p.157-169. https://doi.org/10.5926/arepj1962.41.0_157
- 石川茜恵（2017）. 青年期後期における過去のとらえ方と精神的回復力の関連 立正大学社会福祉学部紀要, 31, p.1-10. <http://hdl.handle.net/11266/6354>
- 伊藤美奈子（2013）. 不登校経験者の「過去」「現在」「未来」—チャレンジ高校に在籍する生徒を対象とした調査より— 慶應義塾大学教職課程センター年報, 20, p.113-128.
- 岩満優美, 竹村和久, 松村治, 王雨晗, 延藤麻子, 小平明子, 轟純一, 轟慶子（2013）.

- 精神障害患者の描画とその画像解析：テクスチャー解析，フーリエ解析，特異値分解を用いて 知能と情報 25, 2, p.651-658. <https://doi.org/10.3156/jsoft.25.651>
- 勝俣暎史 (1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 44, p.307-318. <http://hdl.handle.net/2298/1047>
- 川杉桂太・竹村和久・岩満優美・西澤さくら・塚本康之・延藤麻子・小平明子・轟純一・轟慶子 (2020). 統合失調症患者による臨床描画のファジイエッジ推論による分析 人間環境学研究, 18, 1, p.63-71. <https://doi.org/10.4189/shes.18.63>
- レヴィン, K. (1942). 末永俊郎訳 (1966). 社会的葛藤の解決 グループ・ダイナミックス論文集 創元新社
- レヴィン, K. (1943). 猪俣 佐登留訳 (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房
- Mohammed, S.M., & Marhefka, J.T. (2020). How have we, do we, and will we measure time perspective? A review of methodological and measurement issues. Journal of Organizational Behavior, 41, p.276-293. <https://doi.org/10.1002/job.2414>
- 松田文子・調枝考治 (1996). 序章 現代のアウグスティヌス 松田文子・調枝考治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編 心理的時間 北大路書房, p.1-27.
- 三浦耕太・塚田祐基 (2016). ImageJ で始める生物画像解析 学研メディカル秀潤社
- 文部科学省 (2023). 令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf 2024年8月11日参照
- 小野村樹美・須永範明・和田万紀 (2024). 中学の登校傾向が高校入学時の時間的展望と精神的健康に与える影響 —中学登校群の高校適応促進要因— 応用心理学研究 49, 3, p.236-237. https://doi.org/10.24651/oushinken.49.3_236
- 大対香奈子・大竹恵子・松見淳子 (2007). 学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み 教育心理学研究 55, 1, p.135-151. https://doi.org/10.5926/jjep1953.55.1_135
- 小塩真司・中谷素之・金子一史 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 —精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, 35, 1, p.57-65.
- 小塩真司 (2021). 非認知能力 —概念・測定と教育の可能性— 北大路書房 「終章」 p.253-260.
- 佐藤主馬・宮川拓人・末吉彩香・柘植雅義 (2023). 不登校に関する研究の主題とその動向 —過去30年間の文献に対するテキストマイニングを用いた検討— 障害科学研究, 47, p.13-24. <https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/2006868>
- Shigemune, Y., Saito, S., Hiromitsu, K., Hamamoto, K., Ochi, R., Shinoura, N., Yamada, R., & Midorikawa, A. (2021). Depression and time perspective in patients with brain tumors: Novel measurements in the circle test. Journal of Affective Disorders Reports, 4, <https://doi.org/10.1016/j.jadr.2021.100084>
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究 65, 1, p.54-60. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.65.54>

- 白井利明（1995）. 時間的展望と動機づけ —未来が行動を動機づけるのか— 心理学評論 38, 2, p.194-213. https://doi.org/10.24602/sjpr.38.2_194
- 白井利明（1996）. 第7章第1節 時間的展望とは何か 松田文子・調枝考治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編 心理的時間 北大路書房, p.377-442.
- 白井利明（2008）. 自己と時間 —時間はなぜ流れるのか— 心理学評論, 51, 1, p.64-75. https://doi.org/10.24602/sjpr.51.1_64
- 園田直子（2011）. 時間的展望を形成する方法としての「展望地図法」の開発とその効果の検討 久留米大学心理学研究, 10, p.22-30. <http://hdl.handle.net/11316/438>
- 鈴木美樹江（2017）. 高校生における不適応徴候と不登校傾向および登校状況との関連 人間と環境 8, p.29-36. https://doi.org/10.24648/uheok.8.0_29
- 高崎いゆき・竹村和久・岩満優美（2005）. 描画から「心理」を解釈する —樹木テストの画像解析と臨床心理学的解釈— 感性工学研究論文集 5, 3, p.155-164. https://doi.org/10.5057/jjske2001.5.3_155
- 都筑学（1982）. 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究 30, 1, p.73-86. https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.1_73
- 都筑学（2009）. 中学校から高校への学校移行と時間的展望 —縦断的調査にもとづく検討— ナカニシヤ出版
- 渡邊仁（2020）. 高校における学校適応研究の過去10年の動向と課題 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 137, p.1-30. <https://doi.org/10.14943/b.edu.137.1>
- Wada, M. (2021). SELF AND TIME – An Asian perspective on cultural Psychology – From the Era of National identity to the Era of the Asian Community that Citizenship Creates. Lecture Paper Collection 2020-2021. p.95-109. Bangkok University International Donation Course Supported by Eurasia Foundation from Asia (formerly One Asia Foundation).
- 和田万紀（2019）. 時間的展望と精神的健康 —過去, 現在, 未来から立ち現れる「現在の拡がり」— 桜文論叢 100, p.1-22.
- 和田万紀・小野村樹美・須永範明（2023）. 高校入学時の時間的展望と精神的健康が登校回避感情に与える影響 —高校入学時オリエンテーションでの調査より— 日本応用心理学会第89回大会（亜細亜大学）発表論文集 1A-3
- 和田万紀・小野村樹美・須永範明（2024）. 保健室登校の高校生の時間的展望の特徴 —サークル・テストによる分析— 日本応用心理学会第90回大会（帝塚山大学）発表論文集 2D-16, p.97.
- 山本奨（2008）. 時間的展望の変化に見る不登校の経過・回復過程 —高校生事例による検討— 心理臨床学研究, 26, p.290-301.

宋代軍事史研究と「東部ユーラシア」

伊 藤 一 馬

はじめに

近年の日本の宋代史研究において、「宋代中国」を時間的・空間的により広い視野のもとで位置づける必要性が提起されている¹。宋代史研究を取り巻くこのような学界動向のなかで、特に注目されるのが「東部ユーラシア（ユーラシア東方）²」という空間から「中国」を含むユーラシア大陸東方域の歴史展開を捉え直そうとする視座であろう。この「東部ユーラシア」という枠組みは、2000年代ごろより複数の研究者によって提起されてきた。最近では、「東部ユーラシア」論と一括りにされたり、「統一見解がない」と批判されることもあるが、そもそも「東部ユーラシア」は中央ユーラシア史・海域アジア史・日本史・中国史の研究者が、それぞれの研究の立場から提起したものであり、共通点も含まれてはいるものの本質的な相違も見られ、統一見解を見出すのは困難であり、その必要もないと筆者は考えている³。

さて、宋代史研究と「東部ユーラシア」の関係について言えば、かつて提起された、東ユーラシアという枠組みのもとで周辺勢力との関係を念頭に置きながら宋朝を捉え直す視点〔飯山ほか2009〕は、「東部ユーラシア」という枠組みとの親和性が極めて高いと思われる。実際に、古松崇志・廣瀬憲雄・山内晋次各氏が宋代、すなわち10～13世紀の「東部ユーラシア」を対象とする研究を発表している⁴。しかし一方で、これらは中央ユーラシア史・日本古代史・海

域アジア史の視点から提示されたものとも言え、「東部ユーラシア」に対する宋代史研究者の反応は概して乏しい。「東部ユーラシア」には中国史の相対化という意図が見られることが指摘されており〔古畑2021; 2022〕、中国史研究者からの応答が必要ではないかと感じられるが、宋代史に限らずそのような動きはあまり見られない。筆者は、宋代とくに北宋の軍事史研究を進めるうえで、軍事と国際情勢の関係にも着目し、「東部ユーラシア」の展開に位置づけることを試みてきた。本稿では、以上の学界動向も踏まえながら、筆者自身の問題意識に引き付ける形になるが、宋代史研究における「東部ユーラシア」の有効性・必要性について考えてみたい。

1. 「宋代中国」と東部ユーラシアの国際情勢

(1) 東部ユーラシアの政治的関係

「東部ユーラシア」と前後するように、宋代史研究を取り巻く潮流として近年活況を呈しているのは、国際情勢をめぐる研究であろう。

8世紀半ばの安史の乱以降、東部ユーラシアは唐・ウイグル・チベット（吐蕃）による三国鼎立状態にあったが、9世紀半ばにウイグル・チベットが相次いで瓦解するとその均衡は崩れ、諸集団の流動化・自立化が促進された。その後10世紀初頭における唐の滅亡も相俟って、東部ユーラシア情勢は大きく変動していく。その中で台頭したのが、キタイ（契丹）と沙陀、およびタンゲート（党項）であった。そして10世紀後半から11世紀半ばにかけて契丹・（沙陀を受け継いだ）北宋・タンゲート（のち西夏を建国）によって東部ユーラシアの三国鼎立状態が再現するのである。

このような東部ユーラシア情勢において注目されるのが、1004年に契丹・北宋間で成立した澶淵の盟に代表される「盟約」である。澶淵の盟では、相互に誓書が交わされ、国境の画定とその遵守・不可侵、国外逃亡した犯罪者の引き渡し、軍事施設の増設禁止や、北宋から契丹への歳幣などが誓書で定められたほか、両国間の擬制的親族関係、国境での公定交易場（榷場）の設置と管理貿

易, 定期的な使節の交換も付随して定められた。これらの取り決めは, 契丹・北宋双方がその維持に努めたこともあり, 結果として約120年にわたって軍事衝突が生じない“平和共存”が実現した。

また, この澶淵の盟は北宋—西夏間の盟約にも踏襲されたほか, のちに勢力間の関係は契丹—北宋の対等関係とは異なるものの, 金—南宋, 金—西夏, 金—高麗間にも踏襲・援用されており, 10世紀以降の東部ユーラシアにおける国際情勢・国家間関係を特徴付けるものであったと言える。すなわち, 澶淵の盟を契機として, 東部ユーラシアの諸勢力間における盟約の締結に基づく関係と, その遵守・維持のための仕組みが成立し, 「澶淵体制」や「盟約の時代」「盟誓体制」などとも称される, 多国併存状況が現出したのである⁵。

10世紀以降の東部ユーラシア情勢において, 澶淵の盟をはじめとする盟約が重要な役割を果たしていたことは疑う余地がないだろう。いっぽうでこの時期の東部ユーラシアにおいて, 諸勢力間の関係やさまざまなヒト・モノの移動が盟約によってのみ規定されていたわけではないことも, 当然ながら事実である⁶。

すなわち, 例えば政治的関係という点で見れば, そもそも盟約を結んでいない関係も多く見られるほか, 婚姻関係や擬制的親族関係, 冊封や朝貢のような古くから見られる関係も併存していた⁷。また, 北宋とベトナムのように, 冊封・朝貢関係を形成するいっぽうで和議を結ぶなど, 複数の関係が共存する場合もあった。すなわち, 10～13世紀の東部ユーラシアにおいては, 新たに出現した盟約が重要な位置を占めつつも⁸, そのほかの関係も併存しており, それらが各勢力(間)の事情に応じて選択され, 結果として多様な関係によって織りなされる国際情勢が形成されたと言える。

そして, 中国(宋朝)側の視点に立てば, 東部ユーラシアの覇権を契丹が掌握していた北宋期, 金が掌握していた南宋期において, それぞれ自らなりの国際秩序を志向・編制しようとしていたことが, 宋代の外交文書の書式・文言に着目した廣瀬憲雄氏[廣瀬2018]や, 宋朝とおもに西域諸国や東南アジア・海域アジア・西南中国勢力との冊封・朝貢関係に着目した遠藤総史氏[遠藤2017; 2018]によって指摘されている。10～13世紀の東部ユーラシアにおける

国際関係・国際秩序はもはや一元的・一極的なものではなく、多元的・多極的な様相を呈していたのであり、東部ユーラシアにおける「宋代中国」の政治的立ち位置を考える際には、諸勢力との関係を多元的に捉える必要があるだろう。

(2) 宋代中国の軍事情勢と外交

宋代の国際関係をめぐっては、かつて軍事的な脅威であった契丹・金・西夏そしてモンゴルこそが国際関係の対象であり、例えば『宋史』外国伝に立伝されるその他の高麗や吐蕃、中央アジア・東南アジア諸国、日本などは宋にとってそれほど重大な存在でないとの見方が示されていた〔衣川1996: 43〕。北宋にとっての契丹・西夏および金、南宋にとっての金およびモンゴルが、実際に軍事衝突が生じた相手でもあり大きな脅威として警戒・注意すべき存在であったことはその通りであろう。しかしながら、その他の勢力との関係が北宋・南宋にとって重要でなかったと断ずることには、筆者は疑問をもっている。北宋・南宋の軍事・外交情勢を考える際には、脅威度・優先度やその継続性には当然ながら差異があるものの、契丹・西夏・金・モンゴル以外の多くの勢力をも視野に入れて捉えるべきであり、それらを見捨てることは結局のところ「宋代中国」を国際情勢に位置づけるための材料を欠くことになるのではないだろうか。

さて、以上も留意しながら、まず北宋期の軍事・外交情勢を概観してみよう。

960年に五代最後の後周から禪譲を受けて成立した北宋（宋朝）は、「十国」諸国を相次いで征服・併合して979年に「中国」の一応の再統一を達成する。それと同時に、自らを取り巻く新たな東部ユーラシア情勢への対応という課題に直面していくこととなった。北方では強大な軍事力を擁する契丹との間で燕雲十六州をめぐる軍事衝突が激化し、西北方ではオルドス地域に拠るタングート李氏の領袖・李繼遷による反宋独立戦争が生じていく。また、南方では唐滅亡後の混乱を経て北部ベトナムに独立王朝を建てた前黎朝に対して遠征を行い、10世紀末の北宋は北方・西北方・南方における軍事的緊張を同時に抱えていた。かつ、これらの軍事的緊張はいずれも北宋側の失敗・劣勢に終わり、北宋は対

外的な拡張路線から防衛路線への方針転換を余儀なくされた。三勢力との軍事的緊張は、11世紀初頭にいずれも緩和に向かっていくが、契丹・タングート（のち西夏を建国）・ベトナム（のち前黎朝から李朝に交替）との軍事的・外交的緊張は断続的に生じており、それへの対応は北宋一代を通じた重要な課題であったと言える。

さて、11世紀初頭の緊張緩和をもたらした象徴的な出来事が、1004年に契丹・北宋間で成立した澶淵の盟であり、契丹—北宋関係の約120年間にわたる安定や東部ユーラシアの多国共存の国際情勢を現出したことは、上述の通りである。ただ、いっぽうで北宋の視点に立てば、強大な軍事力をもつ契丹に対してはその軍事行動を警戒する必要はあったし、西北方のタングートについては11世紀半ばに宋夏戦争が勃発して以降には和戦を繰り返すこととなり、南方のベトナムとの間においても11世紀半ばに宋越境界地帯で勃発した儂智高の乱をめぐる緊張や、11世紀後半のベトナムによる北宋侵攻や宋越戦争が生じるなど、これら三勢力に対する軍事的備えは不可欠であった。これらに対峙する地域は北宋朝廷でも「三方の急」として認識され軍事的にもつねに重視されていた[金成奎2000]。南方のベトナムについては、契丹やタングートと比べると脅威度や優先度は低くならざるをえなかったと考えられるものの、いっぽうで北宋にとって無視・放置できるものであったとは到底考えられない。むしろ契丹やタングート関係を優先せざるをえないという事情があるからこそ、南方における緊張や騒擾に対しては阻止・予防しようと神経を尖らせており、また速やかな対処が求められていた⁹。

これら三勢力への北宋の対応は、いわゆる「遠交近攻政策」であったとみなすことができる。すなわち、和戦の頻度はそれぞれ異なるものの、軍事衝突と和議（盟約）という直接的な軍事的・外交的対応が契丹・西夏・ベトナムに対しては基本路線であったと言える。また、この三方における緊張には共時性や連動性も見られ、北宋の軍事・外交情勢の展開については契丹・西夏・ベトナムの動向を踏まえたうえで、俯瞰して捉える必要があると言える¹⁰。

さらに、間接的な対応として、これらの勢力の“腹背”に位置する勢力との

連携という点も見逃すことはできないだろう。すなわち、契丹に対しては高麗やタタル、西夏に対しては甘州ウイグル・西ウイグル・敦煌帰義軍政権・西涼府チベット政権・青唐チベット王国、ベトナムに対しては占城・真臘・大理などとの連携を模索していた。これらがどれほど現実的であったのか、また実際に奏功したかは別として、北宋の軍事・外交政策を検討するには、これらの勢力の動向も視野に入れる必要はあるだろう。

以上を踏まえると、北宋の軍事・外交情勢において、契丹や西夏のみならず、直接的な軍事衝突を経験したベトナムはもとより、北宋と直接領域が接していない勢力も含めた近隣勢力の動向にも目を配る必要があるだろう。さらに言えば、北宋が介在しない諸勢力間の関係¹¹も含め、東部ユーラシアにおける入り組んだ諸勢力間関係のなかで「宋代中国」を位置づけるべきであろう。

また、南宋期においては、12世紀に入って勃興し契丹・北宋を相次いで滅ぼし、新たに東部ユーラシアに覇を唱えた金（女真）が最も重要な軍事・外交的勢力であったと言える。いっぽうで西北地域が斉国（劉斉／偽斉）を経て金の支配下に入ったために西夏とは境域が接しておらず、またベトナムとも11世紀後半以降は冊封・朝貢関係が安定して継続しており、南宋期に両者との軍事的緊張はほとんど生じていなかった。すなわち、南宋期に主に軍事的対応が必要であったのは金であり、金の滅亡後はその対象がモンゴル帝国に移る。実際に宋金境界地帯には総領所体制とも称される新たな軍事・財政体制が整備・確立され、南宋は金に備えていくのである¹²。

ただし、北宋期と同様に、直接的な軍事衝突のある金およびモンゴル以外との関係も、南宋の対外政策に影響していたと考えられる。例えば、南宋初期に海上を通じて高麗に使者を派遣して「仮道」「夾攻」を要請している〔姜吉仲2004〕。いっぽう、金の意を受けた斉国がベトナムに遣使し、南宋を牽制しようとする動きも見られる〔河原1975〕。また、北宋期には和戦を繰り返していた西夏との間には、金へ対抗するための連携を求めて通交が見られたことが確認できる〔佐藤2004〕。さらに、金によって西方に追われたカラキタイ（西遼）が中央アジアを中心に強大な勢力を有していたが、その金への遠征計画に南宋

が西夏を通じて協力関係を結ぼうとする動きも見られる [佐藤2004]。

当時の東部ユーラシアを見渡せば、金とカラキタイが東西に並び立つ二大国という構図であったが、12世紀末から13世紀初頭にはモンゴル高原がこの両者の“代理戦争”の状況にあったという近年の指摘がある [松田2015; 白石2017]。すなわち、モンゴル高原の統合を進めていたケレイト王国の最大の同盟相手が金であり、反ケレイト部族を通じてカラキタイがモンゴル高原に影響力を及ぼそうとしていた、という。これには否定的な見解もあり [宇野2023]、筆者に当否の判断はできないが、南宋の対金政策を考える際には、このようなモンゴル高原や中央アジア情勢の影響・関連にも注意する必要がある。13世紀初頭、チンギスの台頭によって金がモンゴル高原への対応に迫られるようになると、その機に乗じて南宋では韓侂胄が金への北伐を敢行する。また、モンゴルが金を攻めた際には、南宋も軍勢を派遣している。金の滅亡後に南宋がモンゴルの侵攻を蒙ると、高麗や日本との連携を模索していくようになる。

このように、南宋期には北宋期とはまた異なる軍事・外交情勢が形成されていたと言えるが、直接的な軍事衝突が見られた金・モンゴルのみならず近隣・周辺勢力の動向もやはり影響しており、それらを無視して南宋の軍事・外交情勢を捉えることには限界があると言えよう。

2. 北宋期の軍事情勢と軍事力

(1) 「軍事国家」としての宋

軍事史の視点から「宋代中国」を考える際に留意すべきと考えられるのが、宋朝の「軍事国家」という性格であり、その軍事力がいかなるもので、いかにして維持・運用されていたのか、という点であろう。

上述の通り、10～13世紀の東部ユーラシアにおいては多国併存状態が形成され、諸勢力の均衡が保たれていたと言える。いっぽうで、まったく緊張や衝突が生じなかったわけではないし、併存や均衡もある意味であくまでも“結果”であったと言える。北宋期について言えば、澶淵の盟以後も契丹は依然として

大きな脅威であり続けた。また、西夏との間では和戦が繰り返されて軍事的緊張を常に抱えていたし、ベトナムとの間でも緊張や衝突が生じていた。南宋期についても、1142年の紹興和議（皇統和議）成立以前の宋金戦争はもとより、その後の海陵王の南侵、韓侂胄の北伐、モンゴルと結んだ対金攻撃、対モンゴル防衛など、軍事力の維持は不可欠であったと言えよう。

このような軍事情勢に対応するために、当然ながら大量の軍事力を確保して配備する必要があるが、宋代の軍事力はときに100万を超えることもあった。宋代を通じて北方・西北方勢力を中心に対外的な軍事情勢は劣勢に立たされており、宋代は軍事的に弱体化した時代とのイメージは強い。ただ、そのような状況においても北宋・南宋を通じて約300年間宋朝が存続することができたのは、やはり軍事力に依るところが大きいと考えられる。また、周知の如く、北宋の創始者である太祖趙匡胤の即位は、後周の禁軍司令官たる殿前都点檢として掌握していた軍事力を背景としていた。さらに、太祖期・太宗（趙匡義）期における政権基盤や正統性の確立・安定には軍事力を掌握することが不可欠であった〔伊藤2019〕。

そして、軍事力や軍事体制の維持・運用、様々な軍需物資の調達・供給を支えるためには巨額の財源が必要であった。宋代では常時財政支出の8割を軍事費が占めており〔汪聖鐸1995〕、一代を通じて「戦時財政」であったと評される〔曾我部1941〕。そのため、宋代の経済・財政政策は軍事費の調達のために立案・施行されたと言えるという〔古松2013〕。

これらを踏まえると、強弱や勝敗はさておき、宋朝は軍事力を基盤として成立し、大量の軍事力の保持と軍事費に依って維持された「軍事国家」であったとみなすことができよう。

(2) 北宋の軍事基盤と東部ユーラシア

以上を踏まえ、主に北宋期に焦点を当てながら「宋代中国」の軍事情勢を支えた軍事力について考えてみたい。宋代、特に北宋軍事史については唐宋変革論の影響も強く、唐末五代以来の藩鎮跋扈・武人政治の弊害に鑑みての中央集

権・強幹弱枝や文治主義政策、それを支える禁軍や兵権の分掌などが注目されてきた。

これに対して、近年では中国・台湾を中心に唐宋変革論への批判的再検討も相俟って軍事史研究の新たな潮流が生じており、武人研究や軍事・武を再評価する成果が公表されている。また、北宋初期の軍事力においては非漢人・遊牧系の武人・軍事集団が多く見られることも指摘されており、中央ユーラシア史の展開や遊牧民の動向も視野に入れた北宋史という視点の必要性が提起されている¹³。

このような北宋軍事史研究の新潮流と密接に関連するのが、北宋を「沙陀軍団(王朝・政権)」の系譜に位置づける見方であろう。周知の通り、五代中原王朝のうち後梁を除く後唐・後晋・後漢・後周は、唐末に台頭したテュルク系沙陀の李克用軍団に淵源する。この沙陀軍団は李克用以来、拡大・再編を経ながらも後周まで至り、その王朝の交替や皇帝の継襲は、実質的には基盤であった軍団内部の指導者の交替であったと言える。そして、後周を継いだ北宋の趙匡胤も、李克用軍団から続く沙陀軍団内の政権交代の流れのなかから台頭したのであり、北宋もその系譜に位置づけられる¹⁴。その歴史的背景としては8世紀後半以降の北中国～中央ユーラシアにおける遊牧集団の動向が大きく影響していると考えられ¹⁵、このような時間・空間的視野から北宋の成立や展開を捉える必要もあろう。

澶淵の盟の成立によって契丹と対峙する北辺地域の軍事的緊張が緩和されて以降、北宋の軍事的重心は徐々に西北地域に移っていく。タングート李氏勢力との緊張は領袖・李繼遷が西涼府チベット政権を攻めた際に戦死し、後を継いだ李徳明が北宋との和議を選択して緩和されたが、西北地域に散在するタングート・チベット系諸集団(蕃部)の動揺・騒擾が生じていた。その後、李徳明を継いだ李元昊による称帝および西夏(自称は大夏)建国、北宋への宣戦布告による宋夏戦争(1038～1044年)が勃発すると、上述の通り両者の間で和戦が繰り返されて常に軍事的緊張を抱えることとなった西北地域が、北宋の軍事的最重要地域となったと言える。

このような北宋の軍事情勢の推移のなかで、その軍事行動を支える存在となっていたのが、蕃部から編制される蕃兵を含む、西北地域に展開する軍事力であった。彼らは北宋末には「西兵」と称され、精強さを備えた軍事力として大いに期待されるとともに、北宋にとって唯一頼れる軍事力であったことが金にも認識されるほどであった。実際に、西北地域の軍事力は対西夏戦線のみならず儂智高の乱や宋越戦争、四川瀘州蛮討伐にも投入されており、北宋末に至ると対西夏戦線から浙江で勃発した方臘の乱の鎮圧、金との同盟に基づく契丹の燕京攻撃、金の南伐に対する防衛、開封の救援・奪還などの軍事行動に立て続けに投入されていた。結局、金軍により北宋の都・開封は陥落して徽宗・欽宗をはじめとして宗室百官も連行されて北宋は滅亡するが（靖康の変）、西兵はその後も大きな存在感を示していた。例えば、南宋を復活させる高宗の下で軍事基盤となった御前軍、金・西夏の侵攻に晒される西北地域で軍備再建・抵抗を続ける曲端・張浚指揮下の軍団、川陝地域に後退した防衛体制を担った四川呉氏軍団などには西兵軍団が継承されていたと言える¹⁶。

以上、「軍事国家」としての北宋を支えた軍事力という視点に立てば、澶淵の盟を契機とする北方から西北方への軍事的重心の移行がみられるいっぽうで、北宋期を通じてその中核には遊牧系軍事力が含まれていたことが明らかである。また、その運用をめぐっては、西北地域のみならず北宋を取り巻く内外の軍事情勢も大きく影響していた。すなわち、多国併存状況において劣勢に立たされながらも約150年間に及んだ北宋の存続や、東部ユーラシアの均衡状態の維持の一端を担っていたとみなすことができる北宋軍事力は、その供給・運用に顕著に認められるとおり東部ユーラシアの歴史展開のなかに位置づけられる必要もあると言えよう。

3. 宋代の軍事・外交と経済・財政・交易

(1) 宋代軍事財政と物流¹⁷

上述の通り、宋代は財政支出の8割を軍事費が占めるほどの「戦時財政」で

あったと言える。その軍事費は、兵員の俸給をはじめとする人件費が大部分であり、その他様々な軍需物資の調達・輸送に係る財源も含まれている。

このような、軍事費の財源確保や投入、軍需物資の調達・供給などを支えていたのは種々の財政・経済・物流政策であったが、それは「中国」内部にとどまらず東部ユーラシアのネットワークとも無縁のものではなかったし、また当然ながら軍事・外交情勢とも密接に連動していたとみなすことができる。

唐後半期以降、「中国」の経済構造は南北をむすぶものへと転換していくが、「中国」再統一を達成した北宋期にはそれが決定的なものとなった。それは、とりわけ経済開発の進展が著しい江南の経済力をもって、北中国の軍需を支えるという構造であった¹⁸。その主要経路は、経済中心である江南から大運河によって国都開封へ物資が運ばれ、さらに開封から対契丹・対西夏前線地域を結ぶ「辺境(軍)―都(政治)―長江下流域(財源)」システム[妹尾1999]であり、北宋期については「開封システム」[平田2008]とも称される。また、対西夏前線地域と長江上流域の四川とを結ぶ経路も重要であった。北中国を喪失して南中国に領域が限定された南宋期には、淮河から秦嶺山脈にいたる防衛線を四つのブロックに分けて財務機関である総領所を設置するとともに、各総領所に軍糧調達地域が設定される補給体制が確立された[長井2008]。

このように、宋代においては全国的規模の市場・流通圏が形成され、「客商」と呼ばれる遠隔地商人の活動と、大運河を基軸とする水運による物流がそれを支えていた。北宋期においては全国的な物流は政府主導で編成されていたものであった(財政的物流)が、客商へ支払う対価として現金(銅銭)や銅銭・塩・茶などと引き換えることができる有価証券である鈔引(交引・塩鈔・茶引)を支給する方式が定着した。いっぽうで、江南から長距離・長時間の輸送は困難であり、むしろ軍事前線への軍糧納入は軍事路や数州程度の地域内部で現地商人(土人)によって大部分がまかなわれ、地域経済圏・物流圏の形成が指摘される¹⁹。これらの経済圏・市場圏・流通圏は重なり合っていたと理解されよう。

(2) 東部ユーラシアの交易ネットワークと宋代中国

このような構造を支える財源は現金（銅銭）のみならず各種鈔引であり、これらに加えて大量の絹織物や香薬も財源として投入されていたが、そのためには大量の銅銭や絹織物・香薬さらには鈔引の交換対象となる塩・茶などを確保しておく必要があった。銅銭は政府による大量鑄造・発行、絹織物・塩・茶は各地の生産、香薬は西域・南海諸国からの輸入により、それぞれ主に調達されていた。そして、これらの物品の動きは「中国」内部にとどまらず、交易ネットワークを介して東部ユーラシア各地にも及んでいた。

宋代すなわち10～13世紀の交易ネットワークについて、これまでは五代・宋代にかけて大きく発展した海上交易が陸上交易に取って代わり、ユーラシア東西を結ぶ主要幹線も陸から海へと転換したと述べられることが多かったように思われる。とりわけ「中国」は、契丹・西夏・金の勃興によって、西域との陸上交易が阻害されていたとされる。しかしながら、現在では10世紀以降においても、シルクロード交易を軸とする陸上交易は活況を保っていたことが明らかにされており、そこには「宋代中国」も結び付けられていただけでなく、「宋代中国」が東部ユーラシアにおける陸・海の交易ネットワークをつなぐ結節点の役割を果たしていたとも考えられるのである。

この時期の陸上・陸上交易を担っていた人々として注目されるのが、かつてユーラシア規模の交易ネットワークを形成して国際商人として活躍したソグド商人のネットワークを継承したウイグル商人である²⁰。9世紀半ば、モンゴル高原の東ウイグル可汗国の滅亡によって、河西地域や天山地域のオアシス地域に成立した甘州ウイグルや西ウイグルは、オアシス都市を結ぶ交易に積極的に関わるようになっていた。周知のように、ソグド人の交易活動において、突厥やウイグルなど遊牧国家との共生関係が重要であった。9世紀以降にはソグド人とトルコ系遊牧民との間の文化的・経済的交流や混血も深まっていたことが確認されるが、「ウイグル国内のソグド商人」すなわち「ソグド系ウイグル商人」が陸上東西交易の主要な担い手となっていたのである。

東部ユーラシアにおけるウイグル商人については、例えば契丹がウイグル商

人のために「回鶻營」と呼ばれる商業拠点を設定したことや、日常的に契丹領内をウイグル商人が訪れていたこと、北宋への契丹使節に随行して北宋領内でも交易活動を行っていたこと、金の燕京に西ウイグルや西夏からウイグル商人が訪れていたことなどが知られる。また、西ウイグルや甘州ウイグルからの宋・契丹への朝貢使節にはソグド姓を冠するものたちの名が多く確認できるほか、契丹からガズナ朝へ派遣された使節団にもウイグル商人が含まれていたと考えられている。ソグド商人の交易ネットワークを継承したウイグル商人は、北中国～モンゴル高原～河西地域～中央アジア～西北インドに及ぶウイグル・ネットワークを形成し、東部ユーラシアにおける陸上交易の活況をもたらしたと言えよう。

海上交易については、9世紀半ばに東シナ海域へ、10世紀半ばに南シナ海域へ、中国海商の進出が見られるようになり、12・13世紀には南インドにまで中国海商の活動を確認することができる²¹。中国海商の中には、東南アジアや日本・高麗などに居留区を形成するものも現れ、現地での華人社会が形成されるようになる。また、唐代に中国にもその活動域を伸ばしたアラブ・ペルシア系のムスリム海商は、唐末・黄巢の乱によってその活動が下火になったものの、その後再び活況を取り戻すと、宋代には広州や交州・福建・揚州などに来航し、なかには居住区（蕃坊）を形成するものもいた。宋代において、中国海商とムスリム海商の交易ネットワークは地域的な競合も見られたものの、基本的には重なり合いながら共存していたと考えられる。なお、このような中国海商・ムスリム海商の中には東南アジア・南海諸国による宋への朝貢を主導したり（時には朝貢を騙っていた）、上表文の翻訳を行うものも見られる〔遠藤2021; 向2024〕。

このような商人たちのネットワークのもとで東部ユーラシアを“動いて”いたのが、多様な“モノ”である。以下、いくつかを取り上げて、その動きを辿ってみたい。

まず、古くから交易品として知られる中国産絹織物は、宋代においても様々な形で東部ユーラシアに広く流通していたことが確認できる。そもそも、「中

国」(北宋・南宋)から契丹・西夏・金に対して歳幣(歳賜・歳貢)という形で絹織物が贈られていたが、それぞれ内部での再分配や、西域・内陸諸国に対する賜与・贈与、あるいは輸出に供されていた。中国産絹織物はトルコ語で「žünkim ジュンキム」や「loxtāy ロクタイ」と呼ばれており、ウイグル語文書やカラハン朝で編まれたカーシュガリー『トルコ語大辞典』・『クタドゥグ・ビリグ』などから西ウイグルやカラハン朝、さらにはガズナ朝にも流通していたことが知られる²²。また、カラホト(黒水城)出土の12世紀中葉の「榷場関連文書」からは、金・西夏間の榷場交易において取引される商品の中に「河北絹」「川絹」の名を確認できる[佐藤2006]。さらに、12世紀中葉に定められた西夏語法典『天盛改旧新定禁令』の交易関連規定において、西夏では中国産絹織物の輸出が禁止されておらず、西夏から西方への流入が想定される[佐藤2003]。このような歳幣絹に由来する流れのほか、西域諸国が宋に遣使・朝貢した際の回賜品としての絹織物も確認できるが、それは西域諸国に限られていたわけではなく、東南アジア・南海諸国や日本に対しても下賜されていた。

9, 10世紀以降の海上交易の発達を背景に、東南アジア・南アジア海域世界の熱帯・亜熱帯産物が窓口である市舶司を通じて「中国」にもたらされていた。中でも乳香・沈香・白檀などの香薬の類は「中国」で珍重されて広く流通し先述の通り軍事費の財源ともなっていたほか、北宋・南宋から契丹・西夏・金や高麗・日本などへ榷場交易や下賜・回賜を通じて転売されていた[古松2013]。

また、宋代には東部ユーラシアの各地で銅銭の鑄造・流通が見られる。上述の通り、宋代中国では大量の銅銭の鑄造によって財政が支えられていたし、契丹・西夏・金においても銅銭の鑄造が行われていた。すなわち、各国で銅銭が鑄造されていたのであるが、各国の貨幣経済・錢貨流通を支えていたのは、宋銭あるいは唐銭(開元通宝など)であったと考えられる。また、宋銭の流通範囲は、サハリンや沿海州、モンゴル高原、朝鮮半島、日本、ベトナム、インドネシアにも及んでいる。各地で発見された一括出土銭・個別出土銭の分析によれば[三宅2018]、朝鮮半島・日本やベトナム・インドネシアに流入した宋銭は、渡来銭として受容され、それぞれの経済圏に組み込まれたという。いっぽ

うで沿海州やモンゴルでは、地域内通貨としても通用しつつ、中国との交易での決済手段として使用されることで中国へ還流することが前提であり、サハリンでは装飾品としての経済外的使用の意味合いが強かったと考えられている。また、各地域では中国銭以外の銅銭も少量ながら発見されており、宋銭に限らず銅銭を受容・共有するようなゆるやかな経済圏が形成されていたとみなすことができよう〔宮澤2007〕。なお、それぞれの地域での銅銭の用途・機能については、上述の通り決済手段や装飾品のほか、船体の安定のために船底に積載されるバラストとしての役割も指摘される。

このほか、宋代以降、日本から「中国」への輸出が爆発的には増加した硫黄については、宋の軍事前線に配備する火器生産に要する火薬原料としての需要が背景にあったことが指摘される〔山内2009〕。さらに日本のほか、インドネシアのジャワ島、さらには西アジアのペルシア湾・紅海地域からも大量の硫黄が「中国」に流入しており、宋代における軍事受容を背景とした東部ユーラシア、さらには西アジアをも含む硫黄流通の広がり確認でき、山内晋次氏はこれを「硫黄の道 Sulfur Road」と呼ぶ²³〔山内2009〕。

以上のように、宋代の東部ユーラシアにおいては、陸上交易ではウイグル商人、海上交易では中国海商やムスリム海商による交易ネットワークが形成され、様々な物品が「中国」とも往来していたことが分かる。そして、このような陸上交易・海上交易を結びつける役割を果たしていたのが、「中国」内部における物流・交易を担う中国商人であり、沿岸都市に設置される市舶司や、内陸境界に設置される榷場（和市場、博易場なども）での「互市貿易」であった。「中国」内地で活動する中国商人には主に遠隔地交易に従事する「客商」と、地域内交易に従事する「土人」とがいたが、彼らが「中国」内部の物流や交易を支えていたことは、上述の通りである²⁴。海上交易を管理する市舶司は明州・福州・広州・泉州・杭州・密州などに設置されていた。陸上交易においては、契丹・西夏・金との境界地帯に榷場が設置されたほか、青唐チベットなどチベット諸族との間での互市場や、ベトナム境界地帯の博易場などが設置されていた。また、契丹—高麗、金—西夏、金—高麗間でも榷場が設置されていた。このよ

うに、市舶司や榷場を結節点として、東部ユーラシアの交易ネットワークは内陸―「中国」―海域世界と連結されていたのである〔Shiba 1983〕²⁵。

以上、宋代における東部ユーラシアにおける交易ネットワークをめぐって、ヒト（商人）とモノ（商品・貨幣）とに着目してその流れを概括してみた。「中国」に設置される市舶司や榷場を結節点とし、「中国」内部の流れも介しながら、内陸・海域双方の交易ネットワークが結びついていたことが確認されよう。また、交易に従事する商人が朝貢・外交使節としての一面も有すること²⁶、盟約およびその付随事項として定められた歳幣や榷場が重要な位置を占めていること、硫黄の流通に見られるように軍事情勢との関わりが見られることなど、東部ユーラシアにおける交易ネットワークは、諸勢力・地域（間）の政治・軍事・外交・経済的な関係と連動しており、これらが重層的に作用しながら様々なヒト・モノによって織り成されるものであったと言えよう。

おわりに

本稿では、「宋代中国」と「東部ユーラシア」との関わりについて、とりわけ軍事史および関連テーマに絞って取り上げた。言及したトピックや個々の事例は、それぞれについてさらなる検討が必要なものもあろうし、本稿では言及できなかったものも多く残されていよう。しかしながら、「宋代中国」の歴史展開を軍事の視点から眺めてみれば、「中国」内部で完結して理解するのはやはり難しく、「中国」の「外」にも目を向けておく必要があると、改めて強く感じられるのではないだろうか。また、軍事だけではなく、その他の情勢や政策などの展開との関連・連動も併せ見る必要もあるだろう。その際に、“「中国」の「外」”の空間的範囲をどこまで想定するかについては、検討する対象次第となるが「東部ユーラシア」はその有効な空間設定のひとつと言えるだろう。

なお、筆者が「東部ユーラシア」という枠組みや視点をもつことに肯定的・積極的な立場であることは明らかなと思われるが、宋代史研究において必ず

「東部ユーラシア」の視点を持つべきである、「宋代中国」のあらゆる事象が「東部ユーラシア」と関わっている、などと主張するつもりは毛頭ない。また、「東部ユーラシア」の定着にともない、それと対置されるようになった「東アジア(世界)」についても、否定する気はない。歴史研究においてどのような地域・空間を設定するか、そしてその必要性については、それぞれのテーマ・問題意識によるであろうし、それに応じて視点の切り替えが可能な選択肢として、「東部ユーラシア」・「東アジア」・「中国」や「中国」内部の各地域などの枠組みを意識するほうがよいように感じられる²⁷。

本稿は軍事面に絞ったものの、宋代史研究における「東部ユーラシア」という空間的枠組みの有効性が確認されるのであれば、今なお国内外の学界で大きな影響力を有しつつも批判的再検討の必要性が提起されている唐宋変革論²⁸について、「東部ユーラシア」の視点から歴史展開を捉え直すことも可能となろう。これまで提起されていた唐宋変革論の再検討については、時間的枠組みに重点が置かれていたように思われるが²⁹、空間的な枠組みについても考慮する必要がある³⁰。その意味で、完結したばかりの「岩波講座世界歴史」第3期第7巻において、唐宋変革期の東アジアとして、「東アジア」に北アジア・中央アジアも含めて時代・空間設定がなされ、その一体性・連動性を提示しているのは注目される[宮澤2022]。ただいっぽうで、ここでは「中国」を経済・文化的な中心として位置付け、その中心たる「中国」からの影響が一方的に「周辺」に及び、とくに文化的なまとまりとしての「東アジア世界」が想定されているように思われる³¹。このような見方は、軍事的・外交的な劣勢に立たされた「宋代中国」像の裏返しのように感じられるが、「東アジア」なり「東部ユーラシア」なり、「宋代中国」を含む空間がどのようなまとまりとして理解できるのか、今後も多角的な検討が必要となろう。

注

1 最近では飯山2019。このほか、飯山ほか2009; 青木2014なども参照。

2 「東部ユーラシア」と類似する語として「東ユーラシア」「ユーラシア東部」「ユーラ

シア東方」なども使用されているが、本稿では個々の所説に直接言及する場合を除き便宜的に「東部ユーラシア」に統一する。なお、これらの語が意味するところは、仮に同じ語であっても研究者によって異なる場合もあるので注意する必要がある。本稿では、おおむねユーラシア大陸の東半、および大陸東端・東南端の海域・島嶼部を広く想定している。

- 3 「東部ユーラシア」については、伊藤2023で整理を試みたので、関連する文献はそちらを参照されたい。伊藤2023以降に発表されたものとして、古松2024: 序章および終章や荒川2024も参照。
- 4 すべてを挙げることはできないが、例えば古松2024; 廣瀬2014; 2018; 山内2009; 2011。詳しくは伊藤2023を参照。なお、「東部ユーラシア」を使用しているものに限ってはいないが、その他の関連する研究（者）については Endo et al. 2018にて紹介されている。
- 5 北宋期には契丹が優位に立つ契丹—北宋関係が主軸となり、それが南宋期の金—南宋関係にも変化をとめないながら継承されていく。このような10～13世紀における東部ユーラシアの国際情勢をめぐる研究は枚挙に暇がないが、差し当たり古松2007; 2011; 2020b; 2024; 毛利2008; 2020; 井黒2010; 金成奎2015; 山崎2017; 廣瀬2018を挙げておく。
- 6 無論、この時期の東部ユーラシア情勢が盟約によってのみ規定されていたと論じている研究者がいるわけではない。
- 7 例えば、契丹と近隣勢力との関係について、北宋・高麗・西夏・青唐チベット・西ウイグル・カラハン朝・タタルなどが、いずれも契丹と盟約・通婚・冊封・朝貢など何らかの政治的関係を結んでいたことが指摘される [古松2024: 560]。
- 8 なお、澶淵の盟の先駆としては820年代の唐・ウイグル・チベットの三国会盟、10世紀初頭の契丹—沙陀間の雲中の会盟、974年の契丹—北宋間の和議などが指摘されている [毛利2006; 井黒2013; 古松2020a; 2020b など]。
- 9 北宋にとっての南方情勢や対ベトナム関係の重要性については、例えば河原1984; 岡田1993を参照。
- 10 三方の対外軍事情勢の共時性や連動性については、伊藤2018; 2021で概観ながら指摘している。
- 11 いくつか例を挙げれば、大越と占城・真臘との抗争、契丹と西夏の抗争・冊封関係、契丹・ウイグルとカラハン朝との抗争など。
- 12 南宋期の総領所体制、および関連研究については長井2008; 雷家聖2013を参照。
- 13 北宋軍事史研究の展開については、極めて簡略であるが伊藤2019: 1-2で述べた。個別の研究については伊藤2019所引文献を参照。
- 14 このような見方は、近年「沙陀（系）王朝」論などと言われ定着しつつあるように思われるが、ここでいう「沙陀（系）王朝」とは、支配者が沙陀系であること、遊牧国家であることなどを主張するものではない。富田孔明氏は、一連の研究によって、五代後唐・後晋・後漢の創始者（李存勖・石敬瑭・劉知遠）がそれぞれ沙陀系

であること、五代各各皇帝あるいはその祖が李克用軍団に属していたこと、李克用軍団に属していた武人やその後裔がその後の五代諸王朝で重んじられていたこと、の三点に基づき、李克用軍団から後周に至る連続性を示し、さらに北宋の最高政務機関である二府（民政：中書門下省／軍政：樞密院）の起源が李克用藩鎮に遡ることから、その政権の連続性が北宋にも及ぶことを指摘する〔富田1986; 1987; 1989; 1991; 1994〕。また、このような連続性については、唐末五代期における非漢人・遊牧系の武人・軍事集団の存在や活動形態、北宋初期の軍事基盤への継承などを解明した、近年の沙陀・テュルク・ソグド研究などの成果によっても裏付けられている。ここでは代表的なものとして森部豊氏の一連の研究〔森部2010所収〕を挙げるに留めるが、その他については伊藤2019: 注9も参照。また、「沙陀（系）王朝」については、古松2020a: 83-100; 森部2023も参照。

- 15 このような見通しやそのもととなった関連研究は、伊藤2019: 21-25を参照。
- 16 このような西北軍事力・「西兵」の意義や展開・動向については伊藤2018; 2021で概観した。また、河原1984; 岡田1993; 伊藤2011; 鄒笛2019; 古松2020; 張哲饒2021a; 2021b; 森本2024なども参照。
- 17 以下、財政・物流をめぐることは古松2013に多く扱っている。また、基本的な研究は到底挙げきれものではないが、斯波1968; 1988; 宮澤1998; 島居2012など。
- 18 周知の如く、このような「中国」における南北構造は宋代以後にも続いていくが、北中国は中央ユーラシア世界と、南中国は東南アジア・海域世界とそれぞれ連続しており、南北経済構造もさらに北方・南方まで連結されていたとも考えるべきであろう。このような見方を明確に示しているのが岩波新書の「中国の歴史」シリーズであり、第2巻〔丸橋2020〕と第3巻〔古松2020a〕が宋代を対象としてそれぞれ扱っている。
- 19 地域経済圏や流通圏については、西奥2001; 2006; 後藤2002; 程龍2006などを参照。
- 20 以下、ウイグル商人については、森安1991; 2015; 畑地2012; 松井2013; 2014などを参照。
- 21 宋代の海上交易の概観については桃木（編）2008; 榎本2010; 山内2014; 中村2024など。
- 22 「žünkim」は「絨錦」「戎錦」, 「loxtāy」は「鹿胎」と対応し、それぞれ河北産絹織物、四川産絹織物と考えられる。これらの対応、および流通については森安1991; 2015; 松井2013; 2014などを参照。
- 23 なお、「中国」の硫黄の流入は、朝鮮半島や内陸アジアからも確認できるが、それは極めて小規模であり、火薬原料としてではなく薬用であったと考えられている〔山内2009〕。
- 24 例えば佐伯富氏は、このような中国商人の中でも山西出身の山西商人の重要性に着目している〔佐伯2000〕。
- 25 また、南宋期には海上交易の窓口となる市舶司では商人がもたらす情報が集積され、「南海交易ハンドブック」と呼びうるような書物が相次いで編まれていく。代表的なものに周去非『嶺外代答』や趙汝适『諸蕃志』などがある〔桃木1999〕。

- 26 本稿では言及できないが、商人は宗教伝道者という一面もしばしば備えている。
- 27 筆者自身、これまで「東部ユーラシア」を常に意識していたわけではない。
- 28 日本における唐宋変革論の展開や学説史の整理、海外の学界への影響については、丸橋2001; 山根2004; 妹尾2007; 青木2014; 山根2022などを参照。
- 29 唐宋変革論の対象とする時期をめぐっては、例えば山根2022を参照。唐宋間以外に画期については中島2005のほか、櫻井2023に国内外の研究動向がまとめられている。
- 30 唐宋変革論の対象とする空間をめぐっては、例えば青木2014; 山根2022などを参照。
- 31 本巻では、この「東アジア」と重なりつつも異なる空間として、船田善之氏が中央ユーラシアと東アジアを接合ないし統合した契丹・金・西夏・モンゴルに着目し、その勃興した空間、契丹・金・西夏の全域およびモンゴル帝国の中核部分を含む「東北ユーラシア」を設定し、その歴史展開を叙述している〔船田2022〕。

参考文献

Endo Satoshi, Iiyama Tomoyasu, Ito Kazuma, Mori Eisuke

2019 “Recent Japanese Scholarship on the Multi-State Order in East Eurasia from the Tenth to Thirteenth Centuries”, *The Journal of Song-Yuan Studies*, 47: 193-205.

SHIBA Yoshinobu

1983 “Song Foreign Trade: Its Scope and Organization”, Morris Rossabi (ed.) *China among Equals: The Middle Kingdom and Its Neighbors, 10th-14th Centuries*, Berkeley/Los Angeles/London, University of California Press: 89-115.

青木敦 2014 「宋朝の定位二：近世論と唐宋変革論」 青木敦『宋代民事法の世界』慶應義塾大学出版会：313-357.

荒川正晴 2024 「ユーラシア東部論再考：「世界」の一体化への胎動を如何に考えるか」『史学研究』318: 1-29.

飯山知保・久保田和男・高井康典行・山崎覚士・山根直生

2009 「『宋代中国』の相対化」宋代史研究会（編）『『宋代中国』の相対化』汲古書院：1-11.

飯山知保 2019 「ユーラシア東部における「唐宋変革」期」千葉敏之（編）『歴史の転換期4 1187年：巨大信仰圏の出現』山川出版社：256-277.

井黒忍 2010 「金初の外交史料に見るユーラシア東方の国際関係：『大金弔伐録』の検討を中心に」荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉（編）『遼金西夏研究の現在』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：31-45.

井黒忍 2013 「受書礼に見る十二～十三世紀ユーラシア東方の国際秩序」平田茂樹・遠藤隆俊（編）『外交史料から十～十四世紀を考える』汲古書院：211-236.

- 伊藤一馬 2011「北宋における将兵制成立と陝西地域：対外情勢をめぐって」『史学雑誌』120-6: 39-61.
- 伊藤一馬 2018「北宋期のオルドス地域とその軍事的意義」村井恭子(研究代表)『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究』平成27～29年度科学研究費補助金(基盤研究C)成果報告書, 神戸大学: 35-54.
- 伊藤一馬 2019「北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官：都部署を中心に」『大阪大学大学院文学研究科紀要』59: 1-34.
- 伊藤一馬 2021「北宋最強軍団とその担い手たち：澶淵の盟から靖康の変へ」京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター(編)『金(女真)と宋：12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交』研文出版: 67-108.
- 伊藤一馬 2023「「東部ユーラシア」の現在」『神女大史学』40: 53-81.
- 宇野伸浩 2023「初期グローバル化としてのモンゴル帝国の成立・展開」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史 10 モンゴル帝国と海域世界：一二～一四世紀』岩波書店: 3-39.
- 榎本渉 2010『僧侶と海商たちの東シナ海』講談社.
- 遠藤総史 2017「未完の「統一」王朝：宋朝による天下理念の再構築とその「周辺」」『史学雑誌』126-6: 36-61.
- 遠藤総史 2018「南宋期における外交儀礼の復興と再編：南宋の国際秩序と東南アジア・中国西南諸勢力」『南方文化』44: 1-23.
- 遠藤総史 2021「宋代の朝貢と翻訳：南の海域世界との関係を中心に」『東方学』141: 85-101.
- 汪聖鐸 1995『両宋財政史』上・下, 中華書局.
- 岡田宏二 1993『中国華南民族社会史研究』汲古書院.
- 河原正博 1975「李朝と宋との関係(1009-1225)」山本達郎(編)『ベトナム中国関係史』山川出版社: 29-82.
- 河原正博 1984『漢民族華南発展史研究』吉川弘文館.
- 衣川強 1996「両宋王朝をめぐり国際関係：時代の俯瞰図」佐竹靖彦ほか(編)『宋元時代史の基本問題』汲古書院: 43-67.
- 姜吉仲 2004『高麗与宋金外交経貿関係史論』文津出版社.
- 金成奎 2000『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院.
- 金成奎／洪性珉(訳)
2015「誓書：10－13世紀東アジアの安全保障策」『史滴』37: 7-28.
- 後藤久勝 2002「北宋における商業流通の地域構造：『宋会要輯稿』所収熙寧十年商税統計を中心として」『史淵』139: 63-94.
- 佐伯富 2000「中国近世における山西商人(宋代)(一)(二)(三)」『問題と研究』29-10: 63-89; 29-11: 51-76; 30-1: 33-70.
- 櫻井智美 2023「宋元明移行期論の受容と唐宋変革論の相対化」氣賀澤保規(編)『論集 隋唐仏教社会とその周辺』汲古書院: 323-344.

- 佐藤貴保 2003「西夏法典貿易関連条文訳註」森安孝夫・坂尻彰宏（編）『シルクロードと世界史』大阪大学大学院文学研究科：197-255.
- 佐藤貴保 2004「十二世紀後半における西夏と南宋の通交」『待兼山論叢（史学篇）』38: 1-24.
- 佐藤貴保 2006「ロシア蔵カラホト出土西夏文『大方広仏華嚴經』経帙文書の研究：西夏榷場使関連漢文文書群を中心に」荒川正晴（研究代表）『東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書，大阪大学：61-76.
- 斯波義信 1968『宋代商業史研究』風間書房．
- 斯波義信 1988『宋代江南経済史の研究』汲古書院．
- 島居一康 2012『宋代財政構造の研究』汲古書院．
- 白石典之 2017『モンゴル帝国誕生：チンギス・カンの都を掘る』講談社．
- 鄒笛 2019「北宋末の太原戦役の再考：北宋滅亡の軍事過程について」『東洋学報』101-2: 1-27.
- 妹尾達彦 1999「中華の分裂と再生」『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』岩波書店：3-82.
- 妹尾達彦 2007「世界史の時期区分と唐宋変革論」『中央大学文学部紀要』216（史学52）：19-68.
- 曾我部静雄 1941『宋代財政史』生活社．
- 張哲饒 2021a「北宋神宗朝における瀘州南部の開拓：瀘州義軍の成立と羈縻体制をめぐって」『歴史文化社会論講座紀要』18: 23-42.
- 張哲饒 2021b「瀘州涪井監の設置と塩資源：宋朝辺境統治の一側面」『史林』104-3: 33-66.
- 程龍 2006『北宋西北戦区糧食補給地理』社会科学文献出版社．
- 富田孔明 1986「五代の禁軍構成に関する一考察：李克用軍団の変遷について」『東洋史苑』26/27: 83-115.
- 富田孔明 1987「五代侍衛親軍考：その始源を求めて」『東洋史苑』29: 1-32.
- 富田孔明 1989「五代の枢密使：その沿革についての新たな考察」『龍谷史壇』95: 46-64.
- 富田孔明 1991「宋二府の沿革に関する考察：その起点と転換点を明確にして」『東洋史苑』37: 25-37.
- 富田孔明 1993「宋二府の沿革に関する考察（続）：五代宋における二種の相質について」『東洋史苑』40/41: 74-95.
- 長井千秋 2008「南宋の補給体制試論」『愛大史学：日本史学・世界史学・地理学』17: 1-24.
- 中島楽章 2005「宋元明移行期論をめぐって」『中国：社会と文化』20: 482-500.
- 中村翼 2024「前近代東アジア海域の性格をめぐる覚書：インド洋海域・東南アジア海域との比較から」『社会経済史学』89-4: 87-108.
- 西奥健志 2001「北宋の西北辺における軍糧輸送と客商」『鷹陵史学』27: 29-52.

- 西奥健志 2006「宋代の物流と商人：軍糧納入への関わりを中心として」『鷹陵史学』32: 1-26.
- 畑地正憲 2012『宋代軍政史研究』北九州中国書店.
- 平田茂樹 2008「日本の宋代政治史研究の新たな可能性：国家史・国制史研究との対話を求めて」『中国史学』18: 141-158.
- 廣瀬憲雄 2014『古代日本外交史：東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社.
- 廣瀬憲雄 2018『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』勉誠出版.
- 船田善之 2022「キタイ・タングト・ジュルチェン・モンゴル：覇権の遷移とその構造」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史07 東アジアの展開：八～一四世紀』岩波書店: 81-112.
- 古畑徹 2021『渤海国と東アジア』汲古書院.
- 古畑徹 2022「東(部)ユーラシア史という考え方：近年の日本における古代東アジア史研究の新動向」古畑徹(編)『高句麗・渤海史の射程：古代東北アジア史研究の新動向』汲古書院: 209-227.
- 古松崇志 2007「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』90-1: 28-61.
- 古松崇志 2011「十～十三世紀多国並存時代のユーラシア(Eurasia) 東方における国際関係」『中国史学』21: 113-130.
- 古松崇志 2013「宋遼金～元：北方からの衝撃と経済重心の南遷(10～14世紀)」岡本隆司(編)『中国経済史』名古屋大学出版会: 131-162.
- 古松崇志 2020a『草原の制覇：モンゴル時代まで』岩波書店.
- 古松崇志 2020b「十～十二世紀ユーラシア東方における「多国体制」再考」『唐代史研究』23: 14-40.
- 古松崇志 2024『ユーラシア東方の多極共存時代：大モンゴル以前』名古屋大学出版会.
- 松井太 2013「契丹とウイグルの関係」荒川慎太郎・澤本光弘・高井康典行・渡辺健哉(編)『契丹[遼]と10～12世紀の東部ユーラシア』勉誠出版: 56-69.
- 松井太 2014「ソグドからウイグルへ」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』勉誠出版: 261-275.
- 松田孝一 2015「チンギス・カンの国づくり」白石典之(編)『チンギス・カンとその時代』勉誠出版: 1-28.
- 丸橋充拓 2001「「唐宋変革」史の近況から」『中国史学』11: 149-169.
- 丸橋充拓 2020『江南の発展：南宋まで』岩波書店.
- 三宅俊彦 2018「10-15世紀東ユーラシアにおける錢貨流通」『東洋史研究』77-2: 1-40.
- 宮澤知之 1998『宋代中国の国家と経済：財政・市場・貨幣』創文社.
- 宮澤知之 2007『銅錢の世界：錢貨から経済史へ』思文閣出版.
- 宮澤知之 2022「東アジア世界の連動と一体化」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史07 東アジアの展開：八～一四世紀』岩波書店: 3-46.
- 向正樹 2024『クビライと南の海域世界』大阪大学出版会.
- 毛利英介 2006「澶淵の盟の歴史的背景：雲中の会盟から澶淵の盟へ」『史林』89-3: 75-

105.

- 毛利英介 2008「1099年における宋夏元符和議と遼宋事前交渉：遼宋並存期における国際秩序の研究」『東方学報』82: 119-167.
- 毛利英介 2020「十～十三世紀東アジア（Asia）国際関係史研究に関する随想」『中国史学』30: 131-145.
- 桃木至朗 1999「南の海域世界：中国における南海交易と南海情報」『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』岩波書店：109-130.
- 桃木至朗（編）
2008『海域アジア史研究入門』岩波書店．
- 森部豊 2010『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部．
- 森部豊 2023「後唐・後晋：沙陀突厥系王朝のはじまり」山根直生（編）『五代十国：乱世のむこうの「治」』勉誠社：43-53.
- 森本創 2024「南宋高宗朝期の都大提举茶馬司と四川行政機構：四川制置司・総領所との関係を中心に」『東洋学報』105-3: 31-66.
- 森安孝夫 1991「ウイグル＝マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32: 1-250.
- 森安孝夫 2015『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会．
- 山内晋次 2009『日宋貿易と「硫黄の道」』山川出版社．
- 山内晋次 2011「東アジア史再考：日本古代史研究の立場から」『歴史評論』26: 83-108.
- 山内晋次 2014「東アジア海域論」大津透ほか（編）『岩波講座日本歴史 20 地域論』岩波書店：89-114.
- 山崎覚士 2017「帝国の中世：中華帝国論のはざま」渡辺信一郎・西村成雄（編）『中国の国家体制をどうみるか：伝統と近代』汲古書院：187-208.
- 山根直生 2004「『唐宋政治史研究に関する試論：政治過程論，国家統合の地理的様態から』『中国史学』14: 187-207.
- 山根直生 2022「『唐宋変革』とはいつか，どこか」『七隈史学』24: 61-80.
- 雷家聖 2013『聚斂謀国：南宋総領所研究』萬巻楼．

【付記】本稿は日本大学法学部個人研究費，日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：24K00126）に基づく成果を含むものである。

デガールの芸術論の基本的な意図についても見つめなおしを図ると同時に、そこでは論じきれなかった側面についても補ってみようと思う。

(6) ここで「すでに現にー存在している (da-gewesen)」[既存の世界 (gewesene Welt)] という訳し方をした原語に含まれる *gewesen* は形容詞として付加語的には、やはり「過ぎ去った、かつたの」といったように *vergangen* とほとんど同じ意味で使われる言葉である。ところが、それは、もともと、ドイツ語の *sein* (存在する、ある) の過去分詞でもあることから、ハイデガーは、むしろ、その過去分詞としての意味合いを強調することと *vergangen* との使い分けを図ろうとしていると考えられる。その点を考慮し、ハイデガーの使う *Gewesenheit*、*gewesen* という用語については、「既存性 (既存のあり方、既存のこと)」、「既存の、既存的」というように訳し分けておくことにしたい。

(7) K. レーヴィット『ナチズムと私の生活——仙台からの告発』秋間実訳、法政大学出版局、一九九〇年、四八頁以下。

(8) その点について、たとえば、須田朗「歴史学と歴史性——ニーチェとハイデガー」(東北大学哲学研究会『思索 第四十七号』二〇一四年)では、ニーチェとハイデガーの歴史概念の比較考察を踏まえて、ハイデガーの歴史性に含まれる「時代批判」的姿勢を浮き彫りにしている。『存在と時間』でハイデガーは歴史性をニーチェの歴史学の見解に結びつけていることから見ても、そこから文明批判的な論調を読みとることもできるし、『存在と時間』の叙述の範囲内ではそう解釈するしかないのだろう。その指摘を貴重な手がかりにしながらも、本稿では、「存在への問い」「存在論の歴史の解体」という本来の目的という点から、その裏にあったはずのハイデガーの真意を掘り下げてみようと思う。

(9) その他の解釈の不十分さの内訳の要約説明については、上掲、拙論、岡山敬二(二〇一九)を参照されたい。

(1) ハイデガーの『存在と時間』からの引用箇所およびそれへの参照箇所は、本文中の（ ）内に、SZという略号によって当該著作を数字によってページ数を表示した。大部分の翻訳にもオリジナル版（単行本）のページが併記されていることから、ページ数はオリジナル版（Max Niemeyer Verlag）のページづけに従った。『存在と時間』を含めて、ハイデガーの著作からの引用文の中で傍点を付した箇所は原文でのイタリック体の強調箇所に相当する。なお、《 》という符号で括った箇所は原文で《 》という符号で括られた箇所に相当する。

(2) 一九三五／三六年というのは『全集』版に記載されている年号であるが、論文としての最終的な完成はもう少し遅い時期だと推定される。その事情や経緯については、関口浩「訳者後記」（マルティン・ハイデガー『芸術作品の根源』関口浩訳、平凡社、二〇〇八年、所収）を参照されたい。

この論文は、一九七七年刊行の『全集』第五巻と一九五〇年刊行の論文集『拙道』にも収録されているが、以下、この論文からの引用および参照箇所の指示については、一九六〇年刊行のレクラム文庫版、M. Heidegger, *Der Ursprung des Kunstwerkes. Mit einer Einführung von Hans-Georg Gadamer, Philipp Reclam jun. Stuttgart 1960.* に従って、引用文・参照箇所の直後の（ ）内に、UKという略号と原著の頁数を記すことにする。

(3) たとえば、高田珠樹『ハイデガー 存在の歴史』（講談社学術文庫、二〇一四年）第四章でも、歴史性と歴史学との関係や、歴史性の分析と存在の意味への問いとのつながりに注目し、すでに『存在と時間』の基本的な構想のなかには「存在の顕現と隠蔽とが一体となって生起する存在の歴史という洞察」が潜んでいたとする指摘が見られる。ただし、「これらのことが、ハイデガー自身によって比較的明確に語られ始めるのは、かなり先のことである」としてこれを指摘するだけにとどめている。その指摘の方向に沿いながらも、本稿では、『存在と時間』の文脈とは別にそれ以後に書かれた『芸術作品の根源』というテキストを手がかりにして芸術論という角度からその洞察の内実をより深く掘り下げてみようと思う。

(4) 木田元『ハイデガーの思想』（岩波新書、一九九三年）二二七頁以下

(5) 拙論、岡山敬二「人間への問いと思索の祝祭——ハイデガー『芸術作品の根源』の根源をさぐって——」（日本大学法学部『桜文論叢 第九十九巻』二〇一九年）でも、ハイデガーの芸術論が存在論であり、「存在の意味への問い」を基本的なモチーフにしているというこの方向に沿いながら、さらに、芸術論である以前にむしろ技術論、人間論でもあるという観点から、この論文の錯綜した論理構成や基本的な意図の不透明さに着目し、その意味や必然性を探ることを試みている。本稿では、その方向を踏まえつつ、ハイデガーの歴史性の真意を探るといっそう鋭い切り口から、ハイ

解決など望めない。謎に迫る問いを反復し、その謎に出くわすこと。「存在の意味が闇 (Dunkel) につつまれていることから、『存在』の意味への問いを反復するという決定的な必然性が示されてくる」(SZ.4)。序論で告げられたその意図は、歴史性の分析においても、息を潜めながら、じつとその出番の機会をうかがっていたのだろう。

そこでもすでに、ハイデガーが証言するように、本来的な歴史性、運命という生起の「特有の動かされ方 (Bewegtheit)」(SZ.375)‘、これを容赦なくつつみこむ謎や闇の暗さに出くわしていたはずなのだから。

現存在の歴史性の実存論的な解釈は、ひっきりなしに思いがけず、影に迷いこむ。これにふさわしい問いの可能な次元は解きほぐされずにいて、どの次元にも存在の謎、そしていまはつきりしたように、動き (Bewegung) の謎が暴れ回っている。そこからすると、なおいっそうのこと、その闇の暗さ (Dunkelheiten) を拭い落とすことはできなくなる。(SZ.392)

「芸術そのものがそうである謎」。これも、『存在と時間』での歴史性の分析、その明るみを通してこそ出くわすことになりえた謎や闇であったのだろう。

しかし、現存在というこの存在者は、それ自身において《歴史的》(»geschichtlich«)であるのだから、そこからして、この存在者が存在論的に自らそれ自身にくまなく光を当てようというなら、それは、どうしても《歴史的》(»historisch«)解釈にならざるをえない。(SZ.39)

「歴史学が現存在をその本来的な歴史性から疎外させる試みである」(SZ.396)と言われたことの意味も見えてくる。ハイデガーが「創作されるものそのものは、見守る者たち (die Bewahrenden) なしにはほとんど存在するこ
とになりえない」(UK. 67f.) というのも、その意味でのことなのだろう。

となると、「歴史的な開示は、運命的な反復に根ざしている」(SZ.395) というよりは、むしろ、歴史的な開示、つまり歴史的な問いがあつてこそその運命的な反復ということになってくる。その順序を逆転する語り口になつてしまったこと、そこに『存在と時間』の失敗、つまり存在の意味を問うために歴史的な問いを展開するという本来の目的を果たせずに終わってしまったことの理由の一つがあつたと考えられはしないだろうか。なにしろ、序論の見定めでは、「存在の意味への問いは、その問いそのものからして歴史的な問いとして理解されるようになっていく」(SZ.21) はずであつたのだから。そうとらえなおせば、その「歴史的な開示」が「ほとんど《主観的》なものではなく、ひとえにそれこそが歴史学の《客観性》を保証する」(SZ.395) ということの意味も見えてくる。

真理の生起、そこで存在がなりたち、それがそのまま芸術となり、そこで歴史がなりたつ。そして、そのなりたちを見つめなおすためには歴史的な問いが必要となる。『芸術作品の根源』の「あとがき (Nachwort)」で謎ということをおくのも、その意味でのことなのだろう。

芸術そのものがそうである謎。その謎の解決を要求するのは筋違いである。課題のために残されるのは、その謎に
出くわすことである。(UK. 83)

そのような「運命的な反復」がなりたつためにも、やはり、歴史学をはじめとする歴史学的な解釈が必要になる。その手がかりとしては、古文書や記録、伝聞、報告、それらをめぐる既存の解釈も含めた文献や、遺跡、記念碑、骨董品などといった歴史資料を頼りにしていくしかない。そうになると、まさに『芸術作品の根源』という作品そのものが、本来的な歴史学の試作品という姿をしていることになる。なにしろ、伝統的な美学や論理学、そして哲学における既存の見解や解釈の可能性と限界を見つめなおし、絵画や神殿、詩作といった記念碑的作品をとおして存在の謎に迫ろうとしているのだから。その試みこそ、歴史資料を手がかりにした歴史学的な解釈の具現化にほかならない。

それを言いだすなら、どうだろう。すでに『存在と時間』の人間存在の分析そのものからして、歴史学的な解釈を先取りしてこそなりたっているはずなのだろう。少し列挙するだけでも、プラトン、アリストテレス、アウグスティヌス、デカルト、カント、ヘーゲル、キルケゴール、ニーチェ、デイルタイ、フッサールなど、既存の哲学の方法や見解への言及が多く認められもするからだ。

真理の生起としての芸術。そこになりたつ運命という歴史に身をさらされながら、見通しを確保して生きていく。そのためには既存の見通しの足跡としての歴史資料に向き合うしかない。その必然性から、本来、歴史学がなりたってきたはずで、そしてすでに歴史資料そのものも芸術としてなりたってきたこと。これを見失い、目先の都合や計算という有用性に目を奪われてしまうことになれば、ハイデガーの見るように、「現代を心にとめおく」と (Gegenwärtigung) に気をとられ、『過去』 (Vergangenheit) を『現在』 (Gegenwart) から理解することになる」 (SZ.391) のだろう。こうして歴史が隠蔽、曲解されてしまう。

歴史を因果系列の一つに見立てようとする歴史主義の考え方も、そうした理解からなりたつのだとすると、

「先駆的覚悟性」「本来的な時間性」というあり方も、真理の生起に身をまかせ、その不気味さを受けとめるしかない人間の有限性や無力さ、儚さのことをいうのだとすると、それはそれで納得がいく。

ところが、「実存」、「先駆」、「覚悟」、「時間性」、あるいは「気がかり」、「投企」、「了解」も含めていいだろう。そうした語り口のままでは、どうしても「主観による決然とした行為」「主観による遂行や行動」といった意味を色濃く匂わせてしまう。それが最後まで邪魔をして、その真意をうまく伝えきれずに終わってしまった。そう考えられはしないだろうか。

むすび——存在、芸術、歴史という謎へ

だとすると、「きつぱりとした伝承のことである」(SZ,385) と言い表されたあの「運命的な反復」という言い方からも、既存の可能性を取捨選択するという主体的な振る舞いとはまた違った側面が見え隠れしてくる。真理の生起という芸術のあり方に身をさらし、「存在への問い」を「反復」するしかない人間のあり方。その必然性を示そうとする意図がすでに胚胎していたのだとしたらどうだろう。

大地の呼びかけに応じて開かれてきた見通し、その既存の世界にすでに投げこまれ、そこに身をゆだねて生きていくしかないあり方、この「運命」をしつかり受け止めなおすこと。そうすれば、既存の見通しのなりたちをふり返り、「存在への問い」を「反復」することでそのさきの見通しを定めてゆくしかないという生き方に気づかされる。「本来的な歴史学」がなりたつ地点をそこに見定めようとしていたはずなのだとすれば、「歴史学」と「現存在の歴史性」の分析をどう結びつけるはずだったのか、その真意も透かし見えてくる。

ための道の一つであった。そう考えれば、錯綜するかに見えるこのテキストからも、その影に隠された一本の道筋がくつきりと浮かび上がってくる。

そして、『存在と時間』でいう「運命」つまり「根源的な生起」としての「本来的な歴史性」、その言葉の裏側でも、すでにその意図そのものは脈々と受け継がれていたと考えられはしないだろうか。なにしろ、『芸術作品の根源』のなかでハイデガー自身がそれを裏づけるように『存在と時間』での用語の意味合いをふり返っているからだ。

つまり、人間存在のあり方を「覚悟 (Entschlossenheit)」や「実存 (Existenz)」と呼んだのも、「主観による決然とした行為 (dezierte Aktion) のことではなく」、日常の有用性という閉じられた (geschlossen) 見通しから離れ (ent)、その見通しに縛られた「自分の外へ出て行き (Übersichthinausgehen)」、真理の生起に身をまかせるという意味でのことだったというのだ (UK, 68)。「実存 (Existenz)」という言葉の由来がラテン語の *existere* にあるように、そうした意味での自分の外に (ex) 立っている (*sistere*) というあり方のことを考えていたと言いたいのだろう。ようするに、「自分自身を目的として設定し、それを手に入れようと努めるような主観による遂行や行動のことが考えられているのではない」(UK, 68f)、そうふり返ってみせるわけだ。

それがただの言い訳ではないのだとすれば、「先駆的覚悟性」つまり「本来的な実存」から「本来的な歴史性」がなりたつとしたその見通しの裏には、「芸術は、歴史を根づかせるといふ本質的な意味で歴史である」(UK, 80) という意味での歴史のあり方、これを示そうとする意図がすでに潜んでいたことになる。

死というものも、有用性という観点ではどうにもできず、否応なしにいつか身に降りかかってくる存在の御しがたさ、不気味さであり、その最たるもののことをいうのだろう。死へ向かう自由とされた「本来的な実存」

して日常を突き破る「衝撃 (Stoß)」を受け、真理の生起への望郷の念が呼び覚まされる。作品に出会うことで得も言われぬ感動を覚えてしまうことになるのも、そのためのことだとも考えられそうである。

ハイデガーは、その真理の生起そのものを「芸術 (Kunst)」としてとらえなおし、その意味での芸術こそ、人間存在のなりたち、「歴史的な現存在 (das geschichtliche Dasein) の根源」にほかならないという。

芸術作品の根源、ということは同時に、創作し守る者たち (die Bewahrenden)、つまりは一つの民族の歴史的な現存在の根源でもあるのは、この芸術なのだ。そうであるのは、芸術がその本質において一つの根源だからである。つまり、真理が存在するようになる、すなわち、歴史的になる一つの際立った仕方だからである。(UK, 80)

人間というものが、この歴史的な現存在、つまり、真理の生起 (存在) からなりたつ存在なのだとすれば、ハイデガーのいう芸術作品とは、個々の作品というよりはむしろ、人間のあり方そのもののことであることになりはしないだろうか。だとすれば、どうだろう。ハイデガーは、芸術作品のなかに一民族や、一時代の存在了解の予兆を見ようとしているのか、それとも、それぞれが独自の世界を開くと考えているのか。それは、どちらかというのではなく、むしろ、どちらでもあったということになる。

その底に貫かれている基本的な意図は、作品を手がかりに真理の生起 (存在) に迫ろうとすること、つまり、どこまでも、存在への問い、存在をめぐる人間のあり方への問いにあったのだろう。これは、すでに『存在と時間』の序論でそのまま告げられていた意図である。芸術作品の根源への問い、これも、ひたすら、そこへ向かう

作品になりたつ世界と大地との闘争とは、そうした隠れなさとしての真理の生起のことであり、そして、作品の創作に先だって、いつでもすでになりたっているはずのこの真理の生起そのもののことをハイデガーは「原闘争 (Urstreit)」(UK, 53) と言い表す。そうした意味でハイデガーは、「真理が生起するこのような仕方の一つが、作品が作品であること」(UK, 54) と考えようとするわけだ。

8. 歴史的な現存在のなりたちへ

ゴッホの作品の分析から気づかされたように、作品だけでなく、道具にしても、そのなりたちからすると、大地による拒絶、存在の御しがたさに否応なしに対処することを強いられているという事実、これを避けて通ることとはできないのだろう。

もともと、つつがない日々の暮らしのなかで物や道具に接するさいには有用性という見通しのままで事足りるかもしれない。作品にしても、興味をそそる刺激材料や鑑定のための商品として取り扱われることの方がむしろ多いのだろう。こうして、有用性という観点が独り歩きし、それを拒絶するはずの大地の御しがたさが置き去りにされてしまうことになる。有用性というその見通しを打ち砕く「衝撃 (Stoß)」、「途方もないもの (das Ungeheure)」(UK, 67)、それこそが作品の本質、作品らしさの由来であるとハイデガーは考えているわけだ。

真理が真理として生起している。そこから作品が作品としてなりたつ。というなら、これは、作品にかぎったことではない。道具どころか物にもそのままではまるはずなのだろう。なりたちとしては、そのどれもが芸術作品と重なり合うあり方をしていることになってくる。しかし、その上で、真理の生起、この出来事を一つの形に仕上げ、ひとときわ鋭く浮かび上がらせる、そこにこそ、作品の作品としての本分があるというのだ。作品を通

だとすると、作品において真理が生起するといふとき、その真理の隠れなきありようとはどういふことになつてくるのか。

世界が開かれているそのあり方をハイデガーは、「存在するものの全体（das Seiende im Ganzen）のただ中で一つの開けた場所（eine offene Stelle）がなりたつ」「一つの空き地（eine Lichtung）が存在する」といふふうにとらえなおす（UK, 51）。開けた場所、空き地がすでに隠れなきものとして生起している。だからこそ、その開かれた見通しに見合うような個々の可能性が見えだしてくることもなるし、それを見誤ることもなる。空き地が開かれているからこそ、見せかけの可能性に目を奪われもするし、その仮象に隠される面も生じてくるのだ。そして、その見せかけに気づけば、隠されていた可能性も見えだしてくるのだろう。こうして、空き地の見通しに見合う可能性について見晴らしがきくようになる。ところが、どうだろう。それで安心というわけにはいかない。その見晴らしのよさの向こうになおも、それを拒む闇があり、見たこともない景色が隠されているかもしれない。その可能性そのものはどこまでも残りつづけるからだ。

鬱蒼とした森の暗さ（Dunkelheit）。そのなかでこそ間伐（Lichtung）というものもなりたち、そこへ光（Licht）が差しこみ、闇（Dunkel）に明るみ（Lichtung）が生じる。空き地（Lichtung）があるからには、なおその奥に隠される未開の地もある。岩山を取り巻く大地のありよう。その闇に光が差しこみ、一つの見通しとして世界が開かれる。その見通しという明るみに合わせることはじめて、神殿なら神殿がその然るべき姿となりたつことにもなるのだろう。しかし、その一方ではまた、大地の持ち味そのものの、その奥底には、この見通しから覆い隠される面がどこまでも残されつづけることになる。ハイデガーがいうように、「隠れなさという真理の本質には二重に隠すという仕方でのこの拒絶が含まれている」（UK, 53）のだろう。

ハイデガーが見るように、「その世界とは、けっして、目の前に立っていて、そこに観察されうるような一つの対象ではない」(UK, 41)のだろう。それは、目の前にある事物の集まりでも、それを収める箱のようなものでもない。生きていくために身を委ねるしかない見通しのことである。畑仕事の靴が靴としてあるのも、すでに暮らしの見通し、農婦の生きる世界が開かれ、そこに身を置いているからである。ハイデガーが独特な言葉づかいで言い表すように、すでに「世界が世界となっている (Welt wellet)」(UK, 41)のだ。

ギリシア神殿という建築作品をとおして世界が開かれてくるのも、大地から生い立つ素材をもとにしてのことである。しかし素材といっても、それは、目先の用途に合わせて選定されるわけにいかない。岩の重みや堅さ、そこに隠し秘められた持ち味がそのまま発揮されてこそ、その神殿がそこに姿を現わしている。その持ち味は、人間の予測や意図を超えたところとなりたっているはずなのだろう。そうした岩のありようから、一つの見通しとして世界が開かれてくる一方で、その岩山を取り巻く大地の持ち味そのものには、その見通しから覆い隠される面も残りつづけているわけだ。

ハイデガーのいう大地とは、人間の手に負えないところで、物が物のままに醸し出す物らしさ、その存在の御しがたさのことをいうのだろう。作品をとおしてその御しがたさが顔を覗かせてくる。世界という見通しが開かれてくるからこそ、逆に、その裏に隠される大地の御しがたさにも気づかされることになるわけだ。こうして作品が作品としてなりたつこのありようのことをハイデガーは「闘争 (Streit)」と呼ぶ。

作品が作品であることは、世界と大地との間でその闘争が挑まれることになりたつ。(UK, 47)

と考えられてきた。ゴッホの作品の分析から見て、ハイデガーのいう作品の本質は、そうした美的享受のために仕上げられることにあるのではないことがわかる。しかしまた、「真理の生起」といっても、それは、現実の再現、現実に見合った模倣や模写というあり方のことではない。ハイデガーに言わせると、存在するものに合わせた描写、その合致が中世の哲学では「アデアクワートイオー(adaequatio)」、そしてすでにアリストテレスにおいても「ホモイオーシス(homoiotês)」と呼ばれていたように、その後、真理の本質はそうとらえられてきたことになる(UK, 31)。だが、ゴッホの作品における「真理の生起」というのは、そうした意味とはまるで違うこともわかるだろう。大地の呼びかけに応じることで隠されていた見通しが開かれてくる。真理ということでハイデガーはそうした見通しの隠れなきありようのことを考えているわけだ。

その点をいっそうはつきりさせる手がかりとして、ハイデガーは、やはりまた、芸術作品を頼りにする。しかし今度は、絵画ではない。ギリシア神殿という建築作品のあり方に目を向けてみようというのだ。

その神殿は、絵画のようにとくに被写体が想定されることもなく、海辺に聳え立つ岩山、その上にそのままの姿で横たわっている。それを目にすると、どうなるだろう。それを支える岩山の重みや堅さ、それを襲うことになる嵐の威力が身に迫ってくる。そして、それを映しだす昼夜の明るさや暗さ、空の広さ、大気、波のうねり、その周りに生息する生物たちの営み、そのありようが浮かび上がってくる。こうして、自然が織りなす大地の動向がその顔を覗かせることになり、その大地で暮らすために何ができるのか、生きる世界の見通しも開き示されてくるというわけだ。

ところが、ハイデガーによると、世界が開かれるといっても、そのさいには、「開かれてくるもののうちで、この大地は覆い隠すものとしてなりたつ」(UK, 38)のだという。これはどういうことなのか。

いる。そうした信頼性に根ざしてこそ、はじめて有用性が発揮されることになるというわけだ。

ところが、その使用が通例となり、習慣化されることになれば、それにともない、信頼性というありように気づかなくなり、有用性だけに目を奪われてしまう。道具を人間の意のままになる手段とする見方が独り歩きすることになってもおかしくない。こうして、「そのようなむきだしの有用性は、道具の根源は素材に形を刻印する単なる製作にある、という見かけを呼び覚ます」(UK, 28) ことになり、「素材と形、そして両者の区別は、よりいっそう深い根源からなりたつ」(UK, 28) ことが忘れ去られ、遠くに置き去りにされてしまうというわけだ。

ゴッホの絵のような芸術作品、それこそが、理屈抜きにこの「よりいっそう深い根源」へと連れもどしてくれる格好の道先案内になるのではないか。そう問いかけるわけだ。

Ⅳ. 真理の生起とは何なのか

7. 世界と大地の闘争

そこでハイデガーは、ゴッホのこの作品をとおして、道具のなりたちとして隠されていたはずの「真理(Wahrheit)」が「隠れなきありよう(Unverborgenheit)」つまり「アレーテイア(ἀλήθεια)」として「生起(ein Geschehen)」してくるという点から、芸術作品の本質を「真理の生起」(UK, 30)と定義する。そうすることで、芸術についての美学の考え方からだけではなく、真理についての論理学の考え方からも距離をとろうとする。では、その「真理の生起」とはどういう意味でのことなのか。

ハイデガーによると、伝統的な美学では、形づくられた素材に美的な価値が付加されることで作品がなりたつ

おそうとする。

その靴に響くのは、大地のひっそりとした呼び声、つまり、熟れた穀物をひそかに贈ってくれることであり、冬の畑の荒れた休閑地における言い知れぬ拒絶である。この靴を通り抜けるのは、泣きごとはいわずにパンの確保を案ずること、苦難をまたも切り抜けたという言葉にならない喜び、出産が近づくときの心配や、死がまわりに差し迫ってくるときの慄きである。この道具は大地に帰属し、農婦の世界のうちに守られている。

(UK, 27f.)

その靴を脱ぎはきしての暮らし。これを維持していくためには、あれこれの見通しや意図に先立ち、何よりもまずは、その暮らしが生い立つ大地のありように身をまかせていくしかないのだろう。大地から否応なしに差し出されてくる恵みや厳しさ。その呼びかけに応じるためには何をどうできるか。その道筋として、自分が生きていくしかない世界のありようが開かれてくる。いつでもすでに、大地に開かれる世界に投げ込まれてしまっている。その通り、そこから始めて、それに応じるために畑仕事や、そのための履物というものも必要になってくる。『存在と時間』での「被投的投企」つまり「実存」、「気がかり」というのも、まさに人間のそうした身のありようを示すあり方のことだったと考えられる。

そうになると、畑仕事のためという有用性は、大地の呼びかけと、そこから開かれてくる世界のありようからなりたっていることになる。有用性のこのなりたちのことをハイデガーは「信頼性 (Verlässlichkeit)」(UK, 28) と言います。その靴に頼り、身をまかせることで、大地の呼びかけに応じ、自分の生きる世界のあり方を確保して

こそ、要不要、使う使わずに関係なく、そのまま現存しているのだろう。道具は半ば物である。だとしても、人間の意図や目的に合わせて、人間によって製作、使用されるという有用性がともなっていてこそ、道具は立派に道具といえる。半ば物ではあるが、物以上の何かなのだ。人間の手によるものというのなら、芸術作品もそうである。とはいえ、作品の作品らしさは、有用性を越えたところになりたつはずなのだとすると、道具は、作品以下の何かなのだろう。ハイデガーが指摘するように、「そのように差引勘定して並べることが許されるなら、道具は、物と作品とのあいだの独特な中間的な位置を占めている」(UK, 23) ことになってくる。

こうしてハイデガーは、物の物らしさ、作品の作品らしさを問いなおすために、その中間の位置を占めるはずの道具の道具らしさ、「道具の真相は (in Wahrheit) 何なのか」(UK, 26) を問いなおそうとする。ところが、その手がかりとして取り上げるのは現物の道具ではない。一足の農婦の靴を描いたゴッホの絵、その芸術作品を眺めてみればいいというのだ。

靴は靴でも、それぞれの用途、つまり有用性の違いに応じて素材や形も変わってくる。畑仕事のための靴というなら、それを履くことで畑仕事を無事に進めることができてこそ、その有用性が発揮されるのだろう。だとすると、現場で使われている靴ではなく、どうして、ゴッホの絵なのか。

その絵に描かれる履き古された靴を眺めてみるとどうだろう。その内側の暗い穴からは、畑仕事のつらさが浮かび上がってくる。丈夫で重たい佇まいには、あぜ道をゆっくりと進む足どりの粘り強さが積み重なって見えてくる。革には土の湿っぽさと濃さが滞留し、靴底には夕暮れを通り抜ける野道の寂しさが漂っている。こうして、ものの見事に、その仕事や暮らしの赤裸々なありようが照らしだされてくることになりはしないか。ハイデガーは、そう問いかけて、そして、その赤裸々なありようを「大地 (Erde)」と「世界 (Welt)」という言葉でとらえな

ところが、ハイデガーによると、その不十分さにもかかわらず、「その材料―形―組み合わせは、たやすく、存在するもののいっさいをじかに理解できる仕組みとして振舞うことになりかねず」（UK, 22）、「物が物であることへの襲撃になっている」（UK, 23）のだという。生活にどう役に立つのか、それが、人間や人間が生きる社会にとって肝心な点なのだとすれば、道具にかぎらず、物や作品も含めたすべてを道具のように考えなくなる気持ちに襲われたとしてもしかたがない。

こうして、古代ギリシアのヒュレー（質料）とエイドス（形相）という概念にはじまり、中世から近代に至るまで、材料と形をモデルにした解釈が当たり前のものとなってしまったというわけだ。ハイデガーの見立てからすると、中世の信仰の哲学においては、神の被造物としてのエーンス・クレアートゥム（ens creatum）が材料としてのマテリア（materia）と形としてのフォルマ（forma）の統一と考えられていたし、近代でも、認識の材料と形式とを区別するカント的な哲学の考え方からすると、ニュアンスの違いはあってもその点はさほど変わりはないことになるからだ（UK, 22f）。

これは、「ただの物」という言い方をするときにも、なりたつことなのかもしれない。「ただの」というのが何の役にも立たないことを意味するのだとすれば、そこでも、どう役に立つのかという道具的な観点が忍びこんでいるのだろう。ハイデガーが見るように、その意味では、これも「一種の道具（eine Art von Zeug）」（UK, 23）ということになってくる。物らしさというよりは、使い物にならない不要物とみなされているわけだ。

6. 有用性から信頼性へ

なるほど、道具にも、その素材ということなら、物めいた面がそなわっていると考えられなくもない。だから

組上に載せる。⁽⁹⁾

作品にかぎらず、何であれ、現存するものには、それなりの姿や形があり、その姿や形が現実のものになるには、形づくられる材料がなければならぬ。このように、物が物としてなりたつ仕組みを、材料、つまり「質料」と訳される「ヒュレー (ὑλη)」と、形姿、つまり「形相」と訳される「エイドス (εἶδος)」との組み合わせと考えれば、なるほど、芸術作品における物めいた面をうまく示してくれるように思えてくる。なにしろ、作品とは、素材に手を加え、それを形にしたもののことを言うはずなのだから。ところがハイデガーは、それだけでは物の物らしさをとらえるためには不十分であるのだという。

たとえば、御影石や草木など、自然物のことを考えてみるとどうだろう。たしかにそれにも姿や形がある。しかし、その形というのは、素材そのものの空間的な広がりなのであって、どんな形だろうと、それが石や草木であることには変わりがない。形などどうだっていいわけだ。そうになると、材料とその姿や形をどこでどう区別すればいいのかよくわからなくなる。形づくられる材料というなら、そうした自然物ではなく、人間の手によって仕上げられる人工物のほうにこそ、ピッタリと当てはまることなのだろう。たとえば、靴の形というのは、ただ素材を寄せ集めただけではなりたらず、靴として使える形に仕上げなければならない。フィット感や丈夫さ、クッション性を考慮するなど、形状や配置、それに見合った材質の選定が必要となってくる。

となると、ハイデガーが指摘するように、その形と素材の組み合わせは、履物として役立つという「有用性 (Dienlichkeit)」(UK, 21) をもとにしてこそなりたつことなのだろう。形づくられた材料というのは、道具として製作されたものに当てはまる考え方ということになってくる。だとすると、これは、物の物らしさをズバリ言い当てるには不十分だというわけだ。

Ⅲ・道具のなりたち

5. 物らしさとは何なのか

さて、ハイデガーによると、「芸術作品の根源」のその「根源」というのは「本質の由来 (Herkunft)」のことである (UK, 7)。ようするに、この論文で、芸術作品が作品としてなりたつための条件を問いなおしてみようというのだ。そこで、さしあたり、ハイデガーは作品の現実のあり方を見定めることから始める。

美術館や展覧会に収蔵、展示されている作品の現実の姿を考えると、作品である以前にそれもほかの事物のように「現存して (vorhanden)」いるのだから、当然、「物めいた面 (Dinghaftes)」 (UK, 9) があってこそ、それとしてなりたつことになる。もっとも、ただの物ではなく作品とみなされるからには、物とはまた違った面も持ち合わせていなければならない。そうすると、作品の物めいた面とは、その上に何か別の面も付け加わるような「下部構造 (Unterbau)」 (UK, 10) と考えられてくる。では、これに何が付加されることで作品は作品としてなりたつことになるのか。その点を調べなおすためにハイデガーは、まずは、物めいた面、物の物らしさとは何なのか、これを問いなおそうとする。

そこで、『存在と時間』での手順とは打って変わって、古代ギリシアにまで遡り、それこそまさに歴史学的というべき解釈を頼りに進めていく。つまり、「西洋的な思索の経過のなかで支配的であり、長きにわたり自明なものとなり、今日、日常的に使われている、物の物としてのあり方についての解釈」 (UK, 13) を拾い上げ、その不十分さを指摘してみせるのだ。そして、そのなかでも、「物を解釈するうえで特別の支配権を獲得するまでになった」考え方として、「材料と形 (Stoff und Form)」という手びきから生起する (geschichte) 解釈」 (UK, 25) を

ればいいのか、よくわからないままになってしまふ。まして、この歴史性の分析が『存在と時間』の本来の目的であるはずの「存在の意味への問い」にどこでどう結びつくのか、その点についてはなおのこと、見通しは不透明なままというしかない。

すでに指摘したように、その点をめぐるハイデガーの意図や真意がうまく伝えられないままに『存在と時間』の叙述は終わってしまったているように見えてしまふ。そこからすると、それは目的を果たせず頓挫した失敗作だとする見方もなりたつ。だとしても、そう見るだけではすまされない意図や洞察が、すでにその論述の背後に見え隠れしているように思われるのだ。

そこで、これを補うための視点という切り口から、ハイデガーの講演論文『芸術作品の根源』の底を貫く意図に迫ってみようと思う。なにしろ、そこでもまた、「作品による真理の生起 (ein Geschehen der Wahrheit am Werk)」(UK.30) という点から「生起 (Geschehen)」というあり方に焦点が当てられ、しかも「芸術は、歴史を根づかせるという本質的な意味で歴史である」(UK.80) という視点や、「芸術は、われわれの歴史的な現存在における根源であるのか」(UK.80) という問いをめぐって考察が繰り広げられているからだ。

では、その「真理の生起」とは何なのか。芸術は歴史であり、それが歴史的な現存在における根源であるとはどういうことなのか。錯綜しているかに見えるその芸術論の底に沈む意図を鋭く驚掴みしなおしてみることである、『存在と時間』の歴史性の分析の真意も浮かび上がってくるように思うのだ。

ともかく、運命的な反復がともなわずしては本来の歴史学はなりたないというわけだ。ところが、どうだろう。それが「主観的」な選択ではなく、「客観性を保証する」というときのその「保証」はどうなりたつのか。なにしろ、歴史学に関わりがないような「非歴史学な現存在の歴史性と同様に、歴史的な開示も将来から時間的なあり方としてなりたつ」（SZ.395）と言っていることから見ても、客観性というよりも、むしろ個人が自分の将来のために既存の可能性を取捨選択するといった主体的な振る舞い、もっと言えば、人生設計や自己啓発を進めるために必要となる実用的な知識やスキルを習得することのようにも聞こえないからだ。既存よりも自分の将来こそが大事ということになる。⁽⁸⁾しかし、必ずしもそうした主体的な選択がなくても、いや、むしろそれに振り回されずにいるからこそ、哲学史を含めた歴史学の「客観性を保証する」ということがなりたつはずなのではないか。そう考えたくなくなってしまう。

そうすると、第七五節で、「次節では、学問としての歴史学が現存在の歴史性から存在論的に成立してくる過程を思いきって投企することになるだろう」（SZ.392）というとき、その「学問としての歴史学」とはどのような学問のことをいうのか。そして「その投企が、このあとに試みられるべき解明、哲学の歴史の歴史学的な解体という課題にとつての準備となる」（SZ.392）と宣言するとき、その「歴史学的」という観点と「現存在の歴史性」の分析とはどう結びつくというのか。『存在と時間』の叙述のなかだけでは、その点についての意図がどうにも見えにくいままなのだ。

何よりもまず、死に向かって自由であるという肝心の「先駆的覚悟性」「本来の時間性」というのは人間存在のどういうあり方のことをいうのか、これがはっきりしない。そうすると、そのあり方から「運命」としての「本来の歴史性」や「反復」、そして「本来の歴史学」がなりたつと言われても、やはり、何をどう考え

もつとも、その運命というあり方に被投性がつきまとうといっても、既存の解釈や遺産を無自覚に受け継ぐことに終始するということではない。「その根源的な生起のなかで、現存在は、死に向かって自由でいて、受け継いだ可能性とはいえ、しかしそれにもかかわらず選びとられた一つの可能性においてその身を自分自身の手にゆだねる (überliefert)」(SZ.384) のだという。死に向かって自由であるというその肝心な点は、やはり判然としないままではあるが、運命というあり方のなかで、既存の遺産を受け継ぎ、伝承するだけではなく、そこから可能性を選びとり、自分自身の手にゆだねるという自覚的な選択がなりたつと言いたいのだろう。「手にゆだねる」と訳した überliefert というドイツ語には「伝承する」という意味もある。この意味で使われることの方が多い言葉なのだろうが、ここでこの言葉をあえて使うのは、伝承でありながらも自覚的な選択がなりたつという二重の意味を含ませようとする意図からのことだと考えられる。そうした自覚をともなう伝承のことをハイデガーは「反復 (Wiederholung)」と呼ぶ。「反復とは、きつぱりとした伝承 (Überlieferung) のことである」(SZ.385) というのも、その意味でのことである。

こうして、つづく第七五節で「現存在の歴史性は、本質上、世界の歴史性である」(SZ.388) ことを見定めたあと、第七六節以降では、この反復という点から、いよいよ、歴史学の本来のあり方、「本来的な歴史学 (eigentliche Historie)」がなりたつ条件を見定めようとする。

《過去》についての歴史学的な開示は、運命的な反復に根ざしているといっても、それは、ほとんど《主観的》なものではなく、ひとえにそれこそが歴史学の《客観性》を保証するのである。(SZ.395)

そこで、どうしたわけか、ハイデガーは、唐突にも「運命 (Schicksal)」ということをお口にします。もっとも運命といっても、これも、ふつうに考えられているような意味とはまた少し違う。それは、「《幸運な》事情に《出くわすこと》や偶然の残酷さ」のように「事情や事件の衝突によってはじめて生じるのではない」(SZ.384)。むしろ、幸運や不運というそうした意味での「運命の一撃に見舞われることがあるのは、現存在が、すでに特徴づけた意味でのそのあり方の根拠において運命というあり方をしているからこそなのだ」(SZ.384)という。つまり、「本来的であると同時に有限である時間性だけが、運命といったようなもの、すなわち本来的な歴史性を可能にする」(SZ.385)と言っていることからすると、運命というものを本来的な時間性からとらえなおし、それがそのまま本来的な歴史性としてなりたつと考えているわけだ。

4. 本来的な歴史性（運命と反復）とは何なのか

では、その運命というあり方とはどういうことなのか。ハイデガーは、その運命を「本来的な覚悟性に横たわる現存在の根源的な生起 (Geschehen)」(SZ.384) と言います。その生起とは、すでに第七二節で言われた「誕生と死のあいだの現存在の延び広がり (Erstreckung)」(SZ.373f)、「延び広がっていながら延び広がること (erstrecktes Sicherstrecken)」という特有の動かめ方 (Bewegtheit) (SZ.375) のことである。その「延び広がり」[「生起」とは、ようするに、既存の世界に投げ込まれて(延び広がって)いながら、将来に向けて可能性を投企し(延び広がり)、この今を生きているという時間性からなりたつ「気がかり」というあり方のことである。そのなりたちを歴史性という側面からとらえなおすために生起という言い方をしていると考えていいだろう。その生起が本来的な覚悟性のなかで「根源的な生起」つまり「運命」として浮かび上がってくるといいうわけだ。

ものをとらえなおすことになる。可能性といっても、それは、ただの可能性ではすまされない。それを越えて、もはやそのさきにはそれを実現する自分は存在しないという意味で「追い越すことのできない実存の可能性」(SZ.383) だというわけだ。この実現不可能な可能性に向かって投企することが、つまり「先駆的覚悟性 (vorlaufende Entschlossenheit)」であり、このあり方によって本来的に実存すること、つまり本来的な時間性というあり方が可能になる。そう考えようとしていたのだ。

しかし、そう言われてもどうだろう。実現できない可能性に向き合う(投企する)とはどういうあり方のことをいうのか。そもそも、実現できない可能性は可能性といえるのか。肝心要のその点がどうもはっきりしない。すでにカール・レーヴィットも指摘しているように、「先駆的覚悟性」といっても何をどう覚悟すればいいのか、何も具体的なことは示されないままなのだ。⁽⁷⁾ なにしろ、ハイデガー自身も、半ば開きなおるかの様子で、「とはいえ、しかし事実に開かれる実存の可能性は死から取りだすことはできない」「現存在はそのつど事実に何を覚悟するのか、それをこの実存論的分析は原理的に究明することはできない」(SZ.383) とまで断言しているくらいなのだから。

その問題はそれとしてまたあとで考えてみることにしよう。ところが、先駆的覚悟性と言われるその本来的な実存というあり方は、宙に浮かぶような空虚なあり方なのかというと、そうとも考えてはいないようだ。「本来的な実存的了解は伝えられてきた既存の解釈からほとんど逃れることはない」(SZ.383) ことも認めているからだ。「現存在は、投げこまれ、何らかの《世界》に頼らざるをえず、事実にほかの人たちとともに実存している」のだから、覚悟性といっても、「それは投げ込まれたものであるかぎりで受け継いでいる遺産から、本来的に実存することのそのつどの事実的な可能性を開く」しかないというわけだ (SZ.383)。

これを踏まえて第七四節では、本来的な時間性、つまり先駆的覚悟性という「そのあり方のなかに、どうして、現存在の本来的な生起があるのか」(SZ.382)を問おうとする。ハイデガーは、「本来的な生起」(Geschehen)というあり方のうちに人間存在の歴史性、本来的な歴史性がなりたつものと考えているからだ。だとすると、その本来的な生起、本来的な歴史性とはどういうことになるのか。

そもそも、本来的に実存するあり方、先駆的覚悟性、本来的な時間性とはどういうあり方のことであつたのか。人間は自分が置かれた状況に合わせて、できることやできないこと、そうした可能性を思い描き、それを投影しながら、事を進めていかなければならない。人間ならではのこのあり方がハイデガーのいう「実存すること」「実存」なのであつた。その可能性が投影されるありようをハイデガーは「投企」(Entwurf)、「了解」(Verständnis)と呼ぶ。だが、投企といっても、それは自由気ままな振る舞いではありえない。状況や自分の身の丈に応じて描き出されてくる可能性に否応なしに身を委ねていくしかないからだ。この事実に投げ込まれて(geworfen)生きていくしかない人間のあり方がハイデガーのいう「被投性」(Geworfenheit)である。その投企を「被投的投企」(geworfener Entwurf)と呼ぶのもその意味でのことである。

ハイデガーが「気がかり」(Sorge)と呼んだのは、そうした被投的投企というあり方のことで、「おのれに――先だつて」が投企、「すでに――(世界)――のうちに」が被投性、「(世間のうちで出会う存在者)のもとでの――存在」が目先の事を進めていくしかないあり方、つまり「頹落」(Verfallen)に当たる。そして、さきに見たように、この「気がかりというあり方が時間性に根ざしている」(SZ.382)とされるわけだ。人間は、既存の状況に投げ込まれながら、将来に向けて可能性を投企し、この今をやりくりしている。

そこでハイデガーは、第六二節で、そうしたあれこれの可能性の一番さきに待っている可能性として死という

そうした時間的なあり方からなりたつ人間存在のあり方をハイデガーはすでに第一編の第四一節で「気がかり (Sorge)」と言いつ表している。その気がかりとは、「おのれに―先だつて―すでに― (世界) ―のうちに― (世間のうちに) 出くわしてくる存在者」のもとでの―存在として―存在する」(SZ.192) というあり方のことを言うのだが、「おのれに―先だつて」がまさに来たらんとする将来としての未来のあり方から、「すでに― (世界) ―のうちに」がすでにそうであるという既存としての過去のあり方から、「(世間のうちに) 出会う存在者」のもとでの―存在」が今の暮らしを案じる現在のあり方からなりたつものと考えているわけだ。

となると、将来や既存を気にながら今を生きること、そうした時間性にもとづく気がかりというあり方としてハイデガーのいう歴史がなりたつということになる。「歴史は現存在のあり方に含まれ、しかしこの現存在のあり方は時間性に根ざしている」(SZ.379) というのも、その意味でのことである。

Ⅱ. 本来的な歴史性とは何なのか

3. 本来的な時間性とは何なのか

もつとも、ハイデガーによると、現存在の歴史性が時間性に根ざすといっても、将来や既存を気にかける今を生きた時間性という側面だけからではその歴史性はなりたたない。それがなりたつのは、すでに第六二節で示されていた時間性、「何よりもまず本来的に実存する」というあり方に目を向けてあらわにし、先駆的覚悟性と性格づけた」(SZ.382) 時間性であつてこそその話だというのは、その時間性というのは、ハイデガーが「本来的な時間性」と呼ぶあり方のことである。

厳密な意味では、過ぎ去っている（vergangen）のではなく、すでに現にー存在している（da-gewesen）のだ」（SZ.380f）というようにじつに微妙な言い回しをする。こうして、歴史のなりたちを「すでに現にー存在している現存在の何らかの既存の世界（gewesene Welt）からの由来」（SZ.381）としてとらえなおそうとする。⁽⁶⁾

では、その「すでに……存在している、既存の（gewesen）」とはどういうことなのか。そこでハイデガーは、つづく第七四節で改めて、現存在の時間性（Zeitlichkeit）というあり方に注目する。「現存在の歴史性についての解釈は、ようするに、時間性のあり方をいっそう具体的に練り上げることにはかならないことがわかってくる」（SZ.382）というのだ。

現在にのみ縛られて生きるのではなく、過去や未来にも思いをめぐらし、今、何ができるかを考えて暮らしを整える。人間の思いのさきには現在だけでなく、同時に未来や過去への道も開かれている。人間ならではのあり方、暮らし方、生き方をハイデガーは「時間性、時間的なあり方」と呼ぶ。そうすると、人間の日々の暮らしや生活にとっては、未来はまだ来てはいない「まだないもの」、過去は過ぎ去って「もはやないもの」としてしまっただけではすまされない面があることに気づかされてくる。

たとえば、どうだろう。自分がすでに身をおき暮らしている地域。そこへと襲いかかる台風に備えるといった状況を考えるとわかりやすいかもしれない。暮らしの行き先を案じるというその切実な身のあり方にとっては、未来といっても、まさに来たらんとする将来という側面が、過去といっても、すでにそうであること、既存（Gewesenheit）という側面がより鋭く際立ってくるのだろう。「すでに現にー存在している（da-gewesen）」「既存の世界（gewesene Welt）」という時間のあり方も、この既存（Gewesenheit）という人間存在の時間のあり方に結びつけてとらえなおそうとするわけだ。

過去があり、そこに世界があつて、そこで人間（現存在）が生きていた。その現存在としての人間のあり方に向き合う視野が開かれてこそ、歴史がなりたつ。当たり前といえば、じつに当たり前なことしか言っていないようにも見える。ところが、引用符で括られたその「《過去》（『Vergangenheit』）」や、その過去が「開かれている（erschlossen, offen）」というのは、たんに過ぎ去つて、もはや現存しなくなったということではない。ハイデガーは、これとはまた違った時間のありようのことを考えている。

どう見ても、現存在はけつして過ぎ去ることなどできはしない。なぜなら、それが不滅だからではなく、それは本質的にけつして現存する（vorhanden）ことなどありえず、むしろ、それが存在するときには、実存する（existiert）からである。（SZ,380）

現存在としての人間の特有のあり方は、身の回りにある事物や道具と違って、持ち合わせのものとして現存していたり、現存しなくなったり（過ぎ去ったり）するものではない。むしろ、現存する事物や出来事を前にして自分ができることやできないこと、そのさまざま可能性を思い描き、それに照らし合わせて自分の進む道を決めながら生きている。人間ならではといえるこのあり方、生き方のことをハイデガーは「実存すること（existieren）」「実存（Existenz）」と言い表すわけだ。

だとすると、過去の現存在に向き合うときのその「《過去》が開かれている」、その「《過去》への道が開かれている」とはどういう意味合いのことになるのか。つまり、過去の現存在のその過去のあり方とはどういうことなのか。その点についてハイデガーは、「もはや実存していない現存在といっても、しかし、それは存在論的に

なおしている。人間は他の存在と違って、自分の生きる世界やそのなかに存在するあれこれのものや出来事、自分や周りの人たちについて、それらがどういうもので、それらにどう対処すればいいのか、それなりにでも、そのありようや勝手をわかっている（了解している）はずである。現存在とは、そうした「存在了解（Seinsverständnis）」がなりたつ「現場（da）」として「存在（sein）」している人間特有のあり方を強調するための言い回しとして理解しておけばいいだろう。その現存在としての人間は、自分の置かれた状況や現場に身を合わせながら、そこであまく生きていくために何らかの視野や見通しを頼りにしていくしかない。ここで言われる「世界（Welt）」というのは、つまり、その人間に開かれているそうした視野や見通しの全体のことである。その意味で、現存在としての人間存在のあり方を「世界―内―存在（In-der-Welt-sein）」と呼ぶのである。

そうになると、その古道具が歴史的であるのは、世界内存在としての現存在、つまり、その世界を生きていたはずの人間存在のあり方が過ぎ去ったからということになってくる。こうして、ハイデガーは、歴史のなりたちを現存在として今を生きる人間が過ぎ去った現存在として過去を生きていたはずの人間に向き合うあり方としてとらえなおそうとする。

2. 既存というあり方（気がかりという時間的なあり方）

そう考えると、たしかに、第七六節でその点をふり返ってハイデガーが示しているように、そうした意味で「《過去》が開かれていること（erschlossen）」、そこからはじめて歴史というものがなりたち、その歴史についての認識、つまり歴史学というものもなりたつことになってくる。「《過去》のなかへ歴史学的にさかのぼっていくためには《過去》への道が開かれて、（offen）いなければならぬ」のだろう（SZ.393）。

そうだったというのでもない。使い古しのタオルなどのことを考えてみればわかるように、必ずしも古くなっただけで歴史的になるとまではいえない。では、もはやとくに道具としては使われることがなくなったからなのだろうか。だとしたら、アンティークの家具や食器、楽器やジーンズなどのヴィンテージ品のように、今なお古くて価値あるものとして愛用されつづけているものは、まだ歴史的ではないのかというと、そうともいえない。となると、いまなお使われているのかいないのかという問題でもないようだ。では、何がどう変わってこの道具は歴史的な性格を帯びることになったのだろうか。

こうしてハイデガーは、道具を使用する人間存在のあり方そのものに目を向けなおそうとする。

使用されているかいないかに関係なく、それらの事物はもはや、そうであった何かではなくなっている。何が《過ぎ去った》のか。それは、その世界、その世界以外の何ものでもない。その世界の中でそれらは何らかの道具連関の一部をなしながら、手もとにあるものとして出くわしてきて、何らかの用をすませようとする現存在によって、つまり世界―内―存在としての現存在 (in-der-Welt-seiendes Dasein) によって使われていたのだ。その世界が、もはやないのだ。(SZ,380)

その古家具が歴史的なものともみなされるのは、その現存やかつての状態、使用が過ぎ去ったからなのではなく、それが使われていた世界が過ぎ去ったからだというわけだ。だとすると、その世界が過ぎ去るとはどういうことをいうのか。

すでに触れたように、『存在と時間』でハイデガーは一貫して、人間存在のことを「現存在 (Dasein)」と呼び

で《変転する存在するものの全体、しかも人間や人間の集まり、その《文化》の変化と運命を指すことにもなる》(SZ.379)。ハイデガーが言うように、「結局のところ、伝承されてきたもののそのものが《歴史的》とみなされている》(SZ.379)と云っていいだろう。これをまとめると、「人間相互のあり方 (Miteinandersein) のなかで《過ぎ去る》と同時に《伝承され》、影響を及ぼしつつづけている生起したこと (Geschehen) が強調された意味で歴史とみなされている》(SZ.379) というわけである。

こうして、ハイデガーは、過去のもの、過去からの由来、文化の変化、伝承されてきたものという「これら四つの意味は、出来事の《主体》(das »Subjekt«) としての人間に関係しているという一つに連関している》(SZ.379) ということから、人間存在の歴史的なあり方を問いなおそうとする。そこで、その手始めとして、人間存在の「このあり方が時間性に根ざしている》(SZ.379) という見立てのもと、「歴史の概念のなかで《過去》が占める注目すべき優位をいっそう鋭く描き示す》(SZ.379) ために、歴史博物館に保管されている古家具のような骨董品にそなわる性格に注目する。

そうした骨董品は、古く昔の時代のもものではあっても、今もなお大事に保管されて現存している。過ぎ去って、もはや現存しない過去のものではないのに、どうしてその古家具は歴史的なものとみなされているのだろうか。歴史学的な興味や関心の対象となり、歴史的な記念物として博物館に展示されたりすることではじめて、そうみなされることになったのかいうと、そんなはずはない。ハイデガーの見るとおり、順序は逆で、もともと、その古家具そのものが「歴史的」であるからこそ「歴史学の対象 (historischer Gegenstand)」(SZ.380) となりえているのだろう。

もつとも、そうはいっても、ただ単に、その道具が時を経て古び、劣化や老朽化といった変化をとまなうから、

I. 人間存在の既存というあり方

1. 通俗的な歴史概念のなりたち（過去の現存在への向き合い方）

ハイデガーのいう歴史性というのは、歴史学がなりたつための前提条件のことである。ハイデガーの言葉づかいで言いなおせば、「存在論的条件 (ontologische Bedingung)」 「存在論的可能性 (ontologische Möglichkeit)」 ということになる。そして、その条件や可能性のありようを「運命 (Schicksal)」と「反復 (Wiederholung)」という言葉で言い表す。では、その運命と反復とはどういうことなのか。

これを解き明かすための手がかりとして、『存在と時間』の第七三節でハイデガーは、いつものやり方といっているだろう、ごくふつうに通用していると考えられる歴史の見方、つまり歴史についての「通俗的な理解」「通俗的な概念」に目を配り、そのなりたちを調べなおすことから始める。

「歴史」という言葉は、ふつうには、「歴史的な現実」とともに、その現実についてなりたつ学問、つまり歴史学のことを指すと考えられているのだろう。では、そのさい、歴史学や、歴史学が扱う客観的な史実がなりたつ以前の「歴史的な現実」はどのように理解されているのだろうか。

ハイデガーが指摘するように、やはり、まずそれは、とりもなおさず、過ぎ去ったもの、「過去のもの (Vergangenes)」として理解されている (SZ.378) はずである。それを大前提にして、「過ぎ去ったもの」という意味での《過去》 (»Vergangenheit«) というよりも、過去からの由来 (Herkunft) (SZ.378) を指すことにもなるのだろう。何かについて「《歴史》がある (eine »Geschichte« hat)」 (SZ.378) と言われる場合がそうであり、その歴史とは、過去から現在を通じて未来に向かう連関ということになってくる。こうして、「さらには、《時間のなか

とすることは難しいというしかない。その真意をうまく伝えきれないままに『存在と時間』の叙述は終わってしまっただと考えられるからだ。そこで、本稿では、これを補うための手がかりとして、『存在と時間』の公刊後、一九三五／三六年の時期にくり返し行われた講演をもとにしたハイデガーの講演論文『芸術作品の根源』⁽²⁾にも注目してみようと思う⁽³⁾。

もつとも、この論文にしても一筋縄にはいかない。たとえば、木田元の指摘にもあるように、それは、かなり錯綜した論理で構成されているばかりか、はたして、「偉大な芸術作品のうちには、一民族の、あるいは一時代の〈存在了解〉が予兆されていると考えているのであろうか、それとも個々の偉大な作品はそれぞれに独自の一つの世界を開くと考えているのであろうか。その点がはっきりしない」。つまり「その基本的意図のうまく読みとれない論文である」という見方もなりたつからだ。⁽⁴⁾

それはそれとして一つの指針にしながら、本稿では、『存在と時間』での歴史性の真意を見定めるという方向を軸足にして『芸術作品の根源』というテキストにも光を当てなおしてみたい。芸術論というよりも、芸術作品を手がかりに存在の意味を問いなおす存在論であるという見通しのもとで、この論文にもまた隠されているはずの基本的な意図も浮き彫りにしてみようと思う。⁽⁵⁾

そうすることで、ハイデガーの歴史性の分析だけでなく、その芸術論の底にも隠し秘められていたはずの一貫した意図を鋭く浮かび上がらせてみたいのだ。

そこでまずは、『存在と時間』での歴史性の分析の骨子を辿りなおし、そこに含まれる問題点を整理してみることからはじめてみようと思う。

(Dasein)」とは、ようするに人間存在のことを言うのだが、その意味合いはまたあとで掘り下げることにして、歴史主義のそうした問題どころか、歴史学がなりたつ以前にすでに人間は本来的に歴史的なあり方をしているだけでなく、歴史学がその本来のあり方から人間を疎外させるとまでいうわけだ。

では、『存在と時間』において歴史学が軽視されているだけなのかというと、そうともいえない。『存在と時間』の本来の課題は、あくまで「存在の意味への問い」であり、人間存在の分析はその準備作業にすぎない。その目論見を提示する同書の序論では、むしろ逆に、「存在の意味への問いは、その問いに付属する実行の仕方に応じて、つまり、前もって現存在の時間性と歴史性を説き明かすものである以上、その問いそのものからして歴史学的な問いとして理解されるようになっていく」(SZ21)と明言されているからだ。

この「歴史学的な問い」というのは、同書の第一部第三編とともに未完のままに終わった第二部で試みられるはずだった「存在論の歴史の解体」に当たるものと考えていい。つまり、『存在と時間』は、当初のその全体的な構想からすると、西洋存在論の歴史、西洋哲学史を検証するという歴史学的な問いを目的とするものであったわけだ。

となると、その「歴史学的な問い」とさきほど「歴史性から疎外させる試み」と言われた「歴史学」との間での位置づけは真逆になりそうだが、それはどう区別されるというのだろうか。ようするに、ハイデガーのいう歴史性と歴史学とはどう関係するのか。そもそも、何よりもまず、「本来的な歴史性」とは人間存在のどのようなあり方のことで、それが肝心要の本題とされる「存在の意味への問い」にどう結びつくのか。その点をめぐるハイデガーの意図や真意を探り当ててみようというのが本稿の目的である。

とはいえ、それはもはや、『存在と時間』の既刊部、第一部第二編までの人間存在の分析の文脈だけから読み

る。人間存在のあり方が「Geschichtlichkeit（ゲシヒトリッヒカイト）」と呼ばれるのもその意味でのことである。

一方、Historie（ヒストリーエ）という言葉については、歴史という言葉でふつうに考えられている意味に重なる使い方をしているといっているだろう。ヒストリーエというドイツ語の由来が知識や探究を意味するギリシア語の「ヒストリア（*historia*）」にあるように、過去についての客観的な研究や学識、いわゆる「歴史学」という意味としてこの言葉をゲシヒテから使い分けようとしている。ハイデガーのこの使い分けの意図を反映させるために、本稿では、Geschichte、geschichtlich、Geschichtlichkeitを「歴史」「歴史的」「歴史性、歴史的あり方」、Historie、historischを「歴史学」「歴史学的」と訳し分けておくことにしてみたい。

ともかく、ハイデガーはそう使い分けることで、歴史学のなりたちを人間存在の歴史性に認めようとするだけでなく、歴史学をその歴史性に対置するものとすら考えているふしもある。

ひょっとすると、《歴史主義》（*Historismus*）の問題といったようなものが台頭してくるのも、歴史学が現存在（Dasein）をその本来的な歴史性から疎外させる試みであることを示すもつとも明白な徴候であるのかもしれない。この本来的な歴史性は必ずしも歴史学を必要としない。歴史学的でない時代は、だからといって、それだけで歴史的でもないわけではない。⁽¹⁾（SZ.396）

ここで言われる「歴史主義」とは、おそらく、簡単に言ってしまうえば、真理や価値、思想も含めて人間をめぐる事象のすべてを個々の歴史的状况の産物に還元してしまう立場のことで、その結果、真理や価値について極度の相対主義に陥るとするのが「歴史主義の問題」であると考えておいていいだろう。ハイデガーの言う「現存在

歴史から芸術、そして存在へ

——ハイデガー『存在と時間』から『芸術作品の根源』へ——

岡 山 敬 二

はじめに

歴史とは何か。

ふつうに考えれば、それは、過去の出来事、あるいは過去についての記録や記憶、認識や知識のことを言うのだろう。じつに当たり前のことで、そう考えておけばいいはずだ。

ところが、ハイデガーは、『存在と時間』（一九二七年）のなかで、「歴史」という言葉について「Geschichte（ゲシヒテ）」と「Histoire（ヒストリーエ）」というドイツ語を使い分け、Geschichteという言葉に独特な意味合いを含ませようとしている。

つまり、Geschichte（ゲシヒテ）という言葉は、単なる過去の出来事という意味ではなく、人間存在のあり方が「geschehen（ゲシェーエン）」つまり「生起すること、身にふりかかること」であることを示すために使われ

日本大学法学部機関誌執筆要領

令和3年11月18日機関誌編集委員会決定
令和3年12月15日 執行部会議承認
令和3年12月16日 教授会報告
令和4年 4月 1日 施行

1. 本要領の目的

本要領は、日本大学法学部機関誌編集委員会（以下「編集委員会」という）にかかる機関誌に投稿する際の基本的手順について定めるものである。

2. 投稿資格者

- (1) 法学部、法学研究科および法務研究科の専任教員、名誉教授および定年退職した元専任教員
- (2) 以下の者については、編集委員会の審議を経て単著の投稿を認めることがある。なお、投稿に際しては、法学部専任教員の推薦状を必要とする。
 - ① 法学部非常勤講師
 - ② 法学部客員教員
 - ③ 法学部以外の日本大学専任教員
 - ④ 法学部付置研究所研究員および法学部所属の日本大学研究員
 - ⑤ 法学部校友および法学部関係者で研究業績が認められる者
- (3) 学外の研究者は、法学部専任教員の投稿の共著者となることができる。
- (4) 大学院法学研究科博士後期課程学生は、指導教員の許可を得て『日本法学』に「判例研究」を投稿することができる。
- (5) 前4項の規定にかかわらず、退職記念号および追悼論文集については、別の定めによる。

3. 研究倫理の遵守と権利保護

- (1) 投稿原稿は未発表のものに限る。他誌との二重投稿は認めない。また注釈なく自己の既発表著作と重複する記述をすることは認められない。
- (2) 剽窃、捏造、改ざん等の研究不正を行ってはならない。また投稿原稿については、著作者が適正に表示されていなければならない。
- (3) 研究・調査対象に関する権利保護（資料の使用許諾や個人情報保護に関する同意等）、および翻訳に関する権利について、必要な手続きを投稿前に完了していなければならない。
- (4) 利益相反に関する倫理を遵守するとともに、利益相反情報を申告しなければならない。
- (5) 機関誌に掲載された著作物の著作権のうち、複製権および公衆送信権を日本大学法学部に譲渡する。ただし、著者自身による複製権および公衆送信権の行使を妨げない。

4. 原稿種別

投稿は以下の種別で受け付ける。

- (1) 論説
- (2) 研究ノート
- (3) 判例研究（『日本法学』のみ）
- (4) 特別講演
- (5) 翻訳
- (6) 資料
- (7) 書評
- (8) 雑報

5. 原稿の作成

- (1) 原稿は、A4用紙に適当な文字数で打ち出す。
- (2) 分量の上限は、文字数で概ね22,000字（刷り上がり約25頁）とする。それを超えるものについては、原則として分割して掲載する。ただし、編集委員会は、他の掲載原稿のページ数を勘案し、その上限の変更を認めることができる。なお半面1ページ大の図表1枚に付き900字を原稿文字数に含めるものとする。
- (3) 連載を前提とする長大な原稿についても、完結分までの完全原稿を投稿するものとする。
- (4) 表題と氏名には、和文表記および欧文表記を併記する。
- (5) 注、参考文献の表記法は、当該分野の慣例に従うものとする。

6. 原稿の提出

- (1) 原稿は、投稿票、要旨（800字程度）と合わせ、デジタルデータで研究事務課に提出する。

デジタルデータは、原則として電子メールの添付ファイルで研究事務課宛に送付する。
- (2) 原則として、投稿締切日を過ぎた原稿は受け付けない。
- (3) 原稿提出後の原稿の差し替えはできない。

7. 審査

別に定める「日本大学法学部機関誌審査要領」に則って行う。

8. 校正

- (1) 執筆者による校正は、原則再校までとする。加筆、訂正は最小限とし、特に再校時に頁数が変わるような加筆や削除は避ける。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

- (2) 校正は1週間程度で返却しなければならない。著しい返却の遅滞は、次号掲載になることもありうる。

以 上

- 本誌に掲載の全ての論文につきましては、以下の Web サイトで PDF を電子公開しております。

日本大学法学部ホームページ (<https://www.law.nihon-u.ac.jp/>)

- 本誌の受入れに関しまして、送付先（住所・宛先等）の変更や受入辞退等がございましたら、以下まで御連絡ください。

<連絡先部署> 日本大学法学部研究事務課

(住 所) 〒101-8375 東京都千代田区神田三崎町 2-3-1
(T E L) 03-5275-8510
(F A X) 03-5275-8537
(E-mail) kenjimu.law@nihon-u.ac.jp

執筆者紹介（掲載順）

石橋正孝	日本大学教授	伊藤一馬	日本大学専任講師
Camille Lepeltier	日本大学専任講師	岡山敬二	日本大学准教授
和田万紀	日本大学教授		

機関誌編集委員会

委員長	柳瀬	昇	委員	友岡	史	仁
副委員長	竹本	亨	委員	山中	明	広
副委員長	原山	浩介	委員	野松	和	彦
委員	石橋	正孝	委員	山島	雪	江
委員	大久保	聡也	委員	本渡	徳	直
委員	小野	美典	委員	田池	直	夫
委員	加藤	雅典	委員	本杉	竜	史
委員	黒滝	真理子	委員	垣生	琴	也
委員	小林	聡明	委員	大野	久	絵
委員	高畑	英一郎				敏

桜文論叢 第112巻（非売品）

令和7年2月20日印刷
令和7年3月1日発行

発行者 小田 司

発行所 日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話 03（5275）8510番

印刷所 株式会社メディオ
東京都千代田区神田猿樂町2-1-14 A&Xビル
電話 03（3296）8088番

ŌMON RONSŌ

Vol. 112, March 2025

CONTENTS

— ARTICLES —

- ISHIBASHI Masataka*, A Prospect for Rabelais Studies and the Significance of His Humanism 1
- LEPELTIER Camille*, La compréhension du français par le prisme de l'anglais chez les Japonais 25

— NOTES —

- WADA Maki*, Characteristics of the Time Perspective of High School Students Going to the School Infirmary: Determining Factors in Their Mental Health. 45
- ITO Kazuma*, The Research Trends in Military History during the Song Dynasty and “Eastern Eurasia” 67

— ARTICLE —

- OKAYAMA Keiji*, Von der Geschichte über die Kunst bis zum Sein – Heideggers Werk zwischen »Sein und Zeit« und »Der Ursprung des Kunstwerkes« 126